

東方異譚録～万の神人紡ぐ糸～

金柑太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺たちは生きていく。たとえ悪になったとしても。

この物語は本来は原作どうりの道を歩むはずだった世界が紙一重のタイミングで幻想入りした数人の現代人により少しずつ歩むべき道から外れていく異譚。

また話をこうしたらいいんじゃないかなっていうコメントも返答はできないかもしれませんが待っています。気軽にどうぞ!!

最後になりますが、私は親の監視と勉強に追われながら執筆しておりますので投稿スピードはそんなに早くありません。

最後にこの小説を読んで明日も頑張ろうと思ってくれたら嬉しいです。では長々と失礼しました。

目次

序章 現代

一話	月夜の一匹狼	1
2話	歩く犬	7
三話	犬と狐の追いかけて	17
四話	三度目の飛翔	24
五話	こんなはずじゃ無かったのにい!	32
一章 幻想郷		
六話	本当の幻想	43
七話	はじめの一步	52
八話	巫女の勘	63
九話	取っ組み合いのその先に	75
十話	食べてはいけない人間	86
十一話	地獄の修行	97
十二話	紅霧異変・壱	110
十三話	紅霧異変・弐	118
十四話	紅霧異変・参	129
十五話	紅魔異変・肆	139
十六話	狂気は満ちる	148
十七話	脇道にGO	160
十八話	紅魔異変・終	166
十九話	一本の彼岸花	176
二十話	人里にて	187
二十一話	お留守番	197
二十二話	もう一輪のガーベラ	207

序章 現代

一話 月夜の二匹狼

「ぐはあ!？」

真紅の液体が飛び散り路地裏のコンクリートをどす黒く染める。チャリーンと落下音がし、続いてドサッと人が倒れる音がする。

「おま…え誰や…。」

すでもう虫の息であろうヤクザ風な、がっしりとした体型の男が何かなんだかわからないというような表情をして刺された方向に視線を向ける。

「名乗る程のものじゃねえよ。」

犯人はひどく落ち着いていて冷徹な表情で男を見つめている。その目はまるで物を見るような目だった。

「殺し…てや…る。」

憎しみを込められた視線をぶつけられても犯人は表情を変えない。

「死んだら殺せないだろ。」

そう返すと落ちたナイフを手に取ろうとする男の手を革靴で踏みにじった。そしてナイフを拾ってカバンにしまうと、さり際にこう告げる。

「二つだけ教えてやるよ。冥土の土産だ。」

「世の中、因果応報だよ。」

そして犯人はベージュ色のコートをひるがえし、夜の繁華街へと姿を消していった。

冷たくなった男の死体を残して。

「はくあ。」

長くそして重い溜息が人気のない公園に響く。

今日は金曜日、西日がまぶしくなってくる頃合いだ。普段この公園は子育て真っ只中の母親達が子供を家に連れ帰って誰もいなくなり、シンと静まり返っているため、女の霊がでると噂になるくらいの不気味さである。

しかし、この日の公園は違っていた。

「ブラック企業なんて消えちまえ!!」

そんな叫び声が聞こえてくるのだから。酔っているのか目は虚ろで足取りはフラフラ情緒も安定していないようだ。

自分で言うのもなんだが、別の意味での不気味さが充満している。親が単身赴任で一人っ子、貧しかったため大学に行けず、なんとか働き口は見つかったものの、まさかのとんだブラック企業。お先真っ暗ーズの一員だ。

自分の不運を嘆いていると、ふと、「このまま俺は社畜で人生を終えるのか。」と不安が生じた。

「俺は会社の犬でおわりたくねえ!!」

そう叫ぶと、つい木でできた子供用の遊具に八つ当たりをしてしまう。殴りつけ蹴飛ばす。メキメキと音をたてた遊具が無惨にも地面に横たえようとしていた。つい誰もいないことをいいことに叫んでしまった。

俺は小学生の頃から中学生まで親に無理を言っつて柔道や空手を習わせてもらっていた。あの頃は若かったなく。本棚にはずらりとライトノベルが並んでいたのを覚えている。今は売ってしまっつてなく、変わりに本棚には自己啓発本がずらりと並んでいる。

そして両武道の先生が二人ともいった言葉、それは

「無闇に武を奮うな。武道とは心が成就して初めてなるものだ。」

俺も堕ちたもんだねえ。

一人感傷に浸っていると、我に返る。

「やっちまっつた〜!! (泣)」

このままだと俺は、「おさき真っ暗ーず」どころか「鉄枷真っ暗ーず」いや「汚物真っ暗ーず」になっつてしまう。

どうしようかと一生懸命に思索するが良策は思いつかない。考え

れば考える程ぐしゃぐしゃに思考の糸が絡まっていき、底なし沼にはまっけていくような気がする。そして青い服と帽子を被った沼の主のスッポンが俺の耳元で囁くんだ、

「ジェイルへようこそ。」と。

瞬間、ビーンツと音を立てて俺のなにかが弾け飛んだ気がした。脱力感を感じ、

「もういいや……。」

そんな諦めに満ちた言葉が口からポロポロこぼれ落ちる。それと同時に、言葉とは違うしよっぱい雫が目からこぼれ落ち、頬をつたい地面にシミを作る。

それからはしばらく静寂がしばらく続き、公園はいつもの落ち着きを取り戻そうとしていた。

「星が綺麗だな。」

ポロリと呟く。残念ながら学がないため星座などのその他もろもろの知識は無い。しかしそれでも素直に美しいと感じることができた。いや、無かったからこそ余計なことを考えずに直感的に美しいと感じることができたのかもしれない。

空を見上げると傾きかけていた太陽はもうとつくのとうに姿を隠し、餅つきをしているウサギさんが俺を蔑んでいる。「負け犬」と。

そのまま視線を落とすと、ふとブランコが目に入り童心を思いだした。年齢は定かではないが俺が小さい時母さんにブランコに乗っている自分の背中を押してもらってたっけ。温かい思い出が蘇る。

でもそんな優しかった母さんはもういない。

よたよたと歩を進めドカリとブランコに腰掛ける。あの頃とは違いもう社会人、膝が腰より高い位置にありとても不格好で漕ぎづらいが弾みをつけ、ギイと音を立てて漕ぎ出す。

前よりも成長して筋肉がついているからか、思ったよりも速くブランコの振りが大きくなっていく。

ついに振りが頂上に達し二、三回たった所で、

「あっ。」

手がズルリと滑り、宙に放り出される。振りが最高に達したブラ

ンコはそこそこ筋肉質な体をいとも簡単に持ち上げた。

風景がスローモーションのように見えた気がする。

「ははっ、飛ぶのってこんなに気持ちいいんだ。」

頬を撫でる風が心地良い。そう感じた瞬間、ガーンと鈍い衝撃と痛みを頭と感じ視界が真っ黒に染まる。すでに意識は遠ざかり体は眠りへと向かっている。

今宵一人の青年が地に沈んだ。

「ううん。」

チヨチヨと鳥の鳴き声が聞こえる。鳥の鳴き声で目覚めるとはこのことかと、ボーっとしながらメルヘンチックなことを考えていると、徐々に頭が覚醒してくる。気づくとそこは異世界だったなんてことはなく昨日どりの公園だった。敷いて変わった所といえば昨日壊しかけた遊具が、風のせいか完全に死体になっていることぐらいだ。

「はっー」

こんなことをしている場合ではない。昨日はお酒が入っていたためだいぶおかしな行動をしてしまったらしい。酒は飲んでも吞まれるな。こういうことなんだなあ。

って早く家に逃げないと。

両手を地につき力を込めて立ち上がりとうすると、ズキッと頭が痛む。二日酔いのせいだろうか？そう思うとなんだか急に吐き気が込み上げてくる。

「うおえ。」

中身は出なかつたが酸っぱい胃酸が口に残り嫌な感じになる。

「ちっ。」

盛大に舌打ちをすると力の入らない体を根性でどうにか起こし立ち上がる。脳裏にべったりとまとわりつくトラウマをふりはらうかのように首を振りパンパンと自分の頬を叩く。

これでよかったんだよな。

「母さん……。」

幸い青服青帽子の公務員は来ていないようだ。夜の間は公園に誰も来なかったらしい。もしかしたら不審者扱いされて避けられただけかもしれないが。

このあたりは公共施設がなく住宅街のど真ん中のため、見た限り防犯カメラは無さそうだった。

「準備は整った。」

「逃ぐげるんだよ〜!!」

そんな素頓狂な声は朝の静かな住宅街に木霊し、遠くの方の電線に止まっていたカラスたちを驚かせバサバサと一斉に飛び立たせる。まあ防犯カメラが無くても車とかのドライブレコーダーを見れば、すぐ犯人は特定できるんだけどね。

そんなことは当の本人は知るよしもなく、土日の人数の少ない人混みの中へと紛れ込んでいった。

どうもおかしい。おっとと、話に入る前に俺の名前を教えていなかったな。

どうもこんにちは〜。鬱系 y o u t u b e r の社犬斗やしろけんではなく、鬱系会社員の社犬斗です。

少し俺の名前についての話をしよう。

「なんで犬なんだよ〜!〜!〜!〜!」

犬斗だったら賢斗とかあるだろ!!!犬て、まるで会社の犬を体現しているような名前じゃないか。俺が小1のクラスでの初めての呼名で、担任の爺さんが俺の名前の時だけクスツと笑って呼んだこと。今でも忘れない。

もし今が戦国時代なら首を切って、さらし首にするね。っていうのは冗談だけど、それだけ嫌だったって事だ。母さんに抗議したこともあったが、

「親が決めたことにグチグチ言うな。」

でいつも逃げられてしまう。この質問をすると何故か母さんは悲しそうな顔をするのでそれ以上突っ込むのはやめようと思ってしまふのだ。それも母さんの策略なのかもしれないが。

あの年の桜は綺麗だった。あたり一面が鮮やかなピンク色に染まり、桜の甘い匂いがそこら中に立ち込めていた。

驚くほど桜の甘い匂いがしたのを覚えている。今でもこの香りを思い出すと、胸がキュツと締め付けられるような哀愁がドツと押し寄せてくる。

母はもういない。その現実を突きつけられた時は、世界が全て灰色になってしまったような気がした。

このとき、初めて死神っているんだなど、いっぱいいっぱいの頭の片隅で思った。

おととつと、話が脱線してしまった。いや脱線を超えて話が横転してしまった。話をもとに戻すと、何かおかしい。俺は今周りから妙な視線を感じている。通り過ぎていく人は皆俺の顔を見ては、顔を伏せて逃げるように早歩きで去っていく。

なぜだ？

俺の顔に何かついてているのか？

気になったので近くの公衆トイレの鏡で確かめることにした。生ぬるい風が頬を撫でる。ふとなんだか嫌な予感がしたが、これはフラグなのか？そんな事を考えながら、その気を振り払うように鼻歌を刻みながら、冷たく冷めきったアスファルトの上をゆっくりと歩いた。

俺のことを見下してこき使う上司も、わかつたように俺を憐れみ影で悪口を言う後輩も、俺を化け物扱いする親戚も、俺が必死に払って税金を横領するクソ政治家も、親を盾にしていじめてきたバカ共、それを注意もせず見て見ぬ振りをした教師も、

「みんなみんな死んじまえばいいんだ!!」

心の中が溢れんばかりの憎しみと憤怒で塗りつぶされる。やり場の無いムシヤクシヤした感情を忘れるために、ただ一心不乱に顔を洗い続ける。

「大丈夫かい？」

そんなふうに戻ろから声をかけられるまでは。

ビクツと肩を震わせる。感情的になり周りが見えてなかった。嫌な予感がする。恐る恐る後ろを振り返ると、青服青帽子の警官が心配そうな顔をしながらこちら覗き込んでいた。

見つかつた：！

白濁する思考に足りない頭の処理が追いついたとき、体はすでに動いていた。体を勢い良く反転させると、両手が警官へと伸びる。

「俺に構うんじゃねえ!!!」

そんなどこか子供の癩癩のような叫びが聞こえると同時に警官の体が蹴鞠のように吹っ飛ぶ。ドンツと壁に打ち付けられる音が聞こえたが、犬斗は見向きもせず逃げ出す。まるで自分自身の体を置いていくかのようなスピードで。

「痛ててて。」

いきなり突き飛ばしてくるとは、あいつ何か隠してるな。それにしても突き飛ばされたときは驚いた。本当にあいつは人間なのか？一般人であの威力はおかしい。めちやめちや鍛えてたのか？でもそれにしても体はどちらかというと細めだった。

「直接聞くしか無いな。」

体を急いで起こすと慌てて追跡を開始する。

「なっ!?!」

もうそんなところまで。足が恐るべき程速いようだ。でも、

「こっちも伊達にお巡りさんやっているんじゃないんでね。」

この辺の道、路地裏までも全て俺の頭の中に入っている。聞こえないはずの青年に向かって吐き捨てるように告げると、再び思考を再開する。あの柵を乗り越えた先は確か一本道だったはず。先回りすれば道を通せんぼする事ができるだろう。こうして警官は柵の向こうに消えた青年と出会える事を願って目的のT字路へ向かって走り出した。

公園をダッシュで突っ切ると、緑色のフェンスを乗り越える。ガシヤンと音を立てフェンスが曲がった気がしたが、確かめる時間はない。

後ろを振り返ると警官は追って来ていないようだった。安堵しているとすぐに気合を入れ直す。できるだけ遠くに逃げなければならぬ。しかもまだ振り切ったとは限らない。あたりを見回すとそこはよくある住宅街で、少し薄暗く肌寒かった。

「早くいこう。」

独り言のように呟くと足を動かす。

「こんなことになるなら運動靴履いてけばよかった。」

すでにもう遅い後悔をする。今俺が履いているのは履き慣れていない革靴。普段は運動靴を履いていくのだが昨日は大事な会議があったため、課長に革靴とスーツを着てこいと言われたのだ。

「課長め。」

課長は今日も土日惜しまず働いている平社員を差し置いて、ひとりで最近始めたというゴルフでもしているのだろう。こっちは新しい趣味を探す暇さえもないのに。

道なりに沿って行くとT字路にでた。どっちに行くか迷ったが、結局右に行くことにした。そして右に向かって走り出そうとするところから声が聞こえてくる。

「待ちなさい!!」

そんなどこか落ちつきのない声を聞き流すと、そんなことを言われて止まるやつ奴がいるかよと心の中で悪態をつく。続けて、

「チツ!!」

盛大に舌打ちをする。そのまま右に駆け出し、自分に言い聞かせる。大丈夫だあいつは俺より足が遅いと。曲がり角が迫ってくる。まっすぐ行くのはやめたほうがいいかもしれない。左足に力を込め勢い良く右折する。そこからは道をグネグネ進んだ。そのほうが相手を混乱させれると思ったのだ。その行動が自分の命取りになるかも知らずに。

くっ、行く手を塞ぎに来たのに先を越されてしまった。化け物じみた程足が速い。すると青年は右へ曲がった。次は左に。これはもしやと思い、少しずつ離れていく背中を賢明に追う。右、左と意図的にグネグネ進んでるようだ。

「フッ。」

これならと警官は勝利を確信して道を左へと折れた。

警官の姿が見えない。これはまいたかもしれないと内心ホツとしていると、今まで感じていなかった疲労がドツと押し寄せのしかかって来る。

溜まった二酸化炭素をまとめて吐き出すような溜息をつく。

「これからどうしたらいいんだ。」

不安の混じった声で呟き、膝に手をつけて呼吸を整える。俺はもうおそらくこの街、いや東京にはいることはできないだろう。田舎、田舎に行くしかない。いちばん確実なのはこの方法だろう。灰色のコンクリートに背をもたげ俯きがちに思考にふけていると、どこからかタツタツと足音が聞こえてくる。まさかと思ひ音のした方向を向くと、さっきの警官が右から走ってくる。

「しつげえんだよー！」

体を起こし左へ駆け出す。水色の屋根をした家や、蜘蛛の巣がはつている空き家などが、早送りのように通り過ぎていく。しばらく進むと何か違和感を少し感じ始めたが、今は逃げることに集中しろと無視した。

何だ？少し気になりながら進んでいると、どんどん道が細くなつて行く。まさかっ!!

「この先は……」

声が警官に遮られる。

「そうだよ……。君の思っているとおりの先は……行き止まりだ。」

その視線の先には自分の何倍もあるブロック塀が無表情にも高くそびえ立っていた。

「随分と気づくのが遅かったね。」

その警官の顔はいい身体能力を持っているんだから、もつと足りない頭を使えと言いたげな顔だったが、次の瞬間その表情は豹変した。

「はくい。まずはお兄さんから質問があります。できれば答えてほしいなあ。」

さつきまであんなに馬鹿にしたような顔をしていたのに、そんな事を無かったかのように思える程その顔は甘く、朗らかなものだった。男の俺が見てもその顔は甘い毒であったから、もし女の人が見たら、たまったもんじやないだろう。

「なんで君はそんなにも一生懸命逃げるんだい？」

そう質問されても答えるはずもなく、適当に答える。

「警察に良いイメージが無いんでな。」

実際本当だ。この間ニュースで人質事件で一人の警察官が判断をミスってしまい、人質が死ぬという事件が起きたばかりだ。

「それにしても慌てて顔を洗っていたけどねえ？」

チツ。かなり前から見られてたらしい。しかし、それを疑問形で返してくるあたり、だいぶ厄介な性格をしている。クラスに一人はいそうだ。

「顔に鼻くそがついてたんだよ。」

急いで考えて、とっさの言い訳がこれかよと自分でも泣きたくなってくる。

「じゃあ話を変えようか。さっきの警察に良いイメージがないっていうのは、どういう意味かい？」

「そのまんまの意味だよ。」

世間的風潮的にも公務員はあまり良いイメージは持たれていない。有名人に一日署長なんかをやらせてイメージの挽回を狙っているが、正直見苦しい。

「そんな風に思うのにも理由があるはずだよ。君のその情報を役立たないんだ。」

頭にも無いこと言いやがって、と少しずつ苛ついてきて頭が痛くなってくる。奴のヤサ顔がだんだんムカつく上司の顔に見えてきた所で、とどめの一言がくる。

「わかってるよ。周りに流されているだけなんだろう？自分が警察に被害を受けているわけでもないのに、面白おかしくするための他人が考えたデマに。全部知ってるんだよ。」

こいつ今なんて言った？わかってる？全部知ってる？何を言っているんだ。こいつ頭はキレルやつだと思っていたが、とんだ勘違いだったらしい。沸々と、どす黒い怒りが憎しみがドバドバと溢れ出てくる。

「警察風情が俺をわかっているようなことをいうなあー！！！！！！！！」

今日一番の絶叫が響き渡る。

「逆に質問してやる!!お前が俺の何を知って、何を思って、何を感じたのか知っているのか!!ああ信用できねえよ。今朝のニュース見たか、警察官が横領だつてよ。やった警官は大層なご身分だな。あんな奴が警察やるんなら俺がやったほうがまだマシだぜ!はっわかったかこれがすべてだよ。わかったら、さっさと俺の前から消え失せろ。」

言つてやった。心の底から不満をぶちまけたせいか、少しスッキリする。しかし再び警官の方を見るとなんだか様子がおかしい。プルプル震えている。

「何も・・・何もわかってないのはお前だろ!!」

警官は腰のホルダーへと手をのばす。その手に握られていたのはスタンガンであった。

カチツとスイツチの押す音が聞こえ、バチバチと電気の織りなす不協和音が静かな住宅街に響く。

「まじかよ。」

一般人相手にその手のものは使わないと踏んでいたがとんだ勘違いだったようだ。

「一般人に使つたら色々やばいんじゃないの?」

と聞いてみるが、返答はない。こちらの話を聞いているのかさえ皆無だ。いよいよ本格的にまづくなってきた。警官はジリジリとスタンガンを持つて近づいてくる。

「最後のチャンスだ大人しく署まで来てもらおうか。」

そう注告し、こちらの出かたを待っているようだ。あんなムカつくやつについていくいわれはないが、痛いのはごめんだ。だったら、

「わかった。ついていく……」

「おつありが……」

警官がお礼を言い終わる前に告げる。

「わけねえだろうが!!」

痛いのは嫌で、捕まるのも嫌ならそれ以外の選択肢を選ぶだけだ。くるりと体をひるがえし、塀へ向かって走る。左足を踏み込み足に力を込める。

「俺の脚力しかとみやがれえー!!」

そんな自分を鼓舞するようなセリフを吐くと青年は飛び上がる。不安という名の重しをぶら下げて。このとき青年がまるで岩場を飛び移る山犬に見えたのは筆者の勘違いかもしれない。

三話 犬と狐の追いかけっこ

「何あの子。ちよつと気持ち悪いんだけど。」

「きつと何かやってるのよ。筋肉増強剤とかさ。だって小1よ、小1の子供が普通に育ってあんな動けるわけないじゃないの。」

「親に無理やりやらされてるのね。だってあそこの父親確かアスリートだったでしょ。」

「そんな事してまでかたせたいのかしらねえー。」

うるさい。うるさい。うるさいんだよ。

隠す気もない悪口と親への非難。表向きは俺を批判しているようだが、裏には自分の子供が負けて悔しいんだろう。嫉妬だ。こういう感情の読み取りは素直な子供のほうが得意であるから大人たちの気持ちはすぐに理解できた。

母にもこの悪口は聞こえていたであろうが素直に俺がかけっこで一位を獲った事を喜んでくれている。

「だんとつだったね犬ちゃん！」

俺はどこか心から笑えていなかったんだろう。そのことに気づいた母は、

「どうしたの？」

と尋ねてくる。俺は視線だけでさっきのババアたちを訴えると、母はふふつと笑って口を開く。

「どんなに悪口言われたって気にしちやだめよ。自分がしてないってわかってるでしょ、だったら信じないと」

自分の力を。」

「まだ犬ちゃんには早かったかな？」

と心配してくれたが俺にはよくわかった。言葉の意味はよくわからなかったが、心をグツと掴まれた。自分を信じる。今思いだすと、母はとても大事な事を言っていたんだと胸が熱くなる。

しかし、これが俺の最初で最後に獲った一位だった。

見てしまったのだ。俺が寝た後、布団にこぼれ落ちた涙を。やっぱり母も人間だった。そんな残念な気持ちと悲しい気持ちが混ざり合って俺は溢れてくる涙を悟られないようにするのでいっぱいはいだった。人間は弱い。いつまでたっても変わらない永久の真理だ。

自分が目立つと母が傷つく、だったら大人しくしていようと幼かった当時の俺は強く心に誓った。しかしこのとき自分が一番読み取らなければならなかったことに気づけていないことに、俺は全く気づいていなかった。

警官に向かって叫んだ時俺は幼い頃を思い出していた。母は死んでいない、だったらいつまでも殻にこじこもっている必要は無い。傷つくとしても自分だけ、我慢すればいいだけだ。生憎俺は我慢することに慣れている。今までそうしてきたんだ、だったら今更ビビつてられない。

後ろへ体をひるがえし、扉に向かって走る。さぞかし無駄なことをと呆れているだろう。だからこそ心の中で言ってる。

「指くわえて見てろ。」と。

さつき全力で走って運動神経は鈍っていないことは把握済み。だ

からは、

「自分の力を信じるだけ。」

右足を踏み込み力を込める。全体重を右足に預けると、左足を勢い良く振り上げ飛び上がる。右足が地を勢い良く離れ体が宙に浮くのを感じた。塀の頂上が近づいてくる。絶対届く、俺は信じて疑わなかった。

やっと追い詰めた。彼はとても足が速いようだが少し頭が足りないようだ。さっきの曲がり角でこの先行き止まりの看板が出てきたときは焦ったが彼は気づかなかった、相当慌てていたのだろう。

「は〜い。まずはお兄さんから質問があります。できれば答えてほしいなあ。」

まず相手を落ち着けなければならない。どの警察官も相手の気を抜く技術というものを持っている、抜き方は人それぞれだが。そんな中でも俺の武器は笑顔だ、ニコニコ笑いながら話しかけることによつて相手の警戒心を解く。中には犯人を威圧して心を折る奴もいるが、失敗すると相手がヤケクソになり被害が拡大する可能性があるかもしれない。だから俺的にはこの方法が最善だと思っている。

「なんで君はそんなに一生懸命に逃げるんだい？」

少し嫌味を込めて相手を苛立たせる意味を持つ質問だ。青年のど

こか寂しい黒瞳が揺れる。

「あまり警察に良いイメージがないんでな。」

少年の態度を見るか限り嘘では無いだろうが、もつと大事なことを隠しているはず。もう少し深堀してみるか。

「それにしても随分と一生懸命に洗っていたけどね？」

人間は意外と皮肉に弱い。皮肉を言われると言われると案外簡単にボロを出すものだ。

「顔に鼻くそがついてたんだよ。」

あからさますぎる。鼻くそだと、どこのチャイナヒロインかよ！鼻くそほじる暇があるなら卵かけご飯でも作ってる!!おつと危ない、気を冷静に保て。いつも職場でツツコミ役をしてるせいで思わず突っ込もうとしてしまった。とりあえず話題を変えるしかない。

「じゃあ話を変えようか。さっきの警察に良いイメージがないってのはどういふことかい？」

数秒の間沈黙が流れる。なんだかピリピリした威圧を感じたが追い詰められた側が出せるものじゃない。気のせいだろう。

「そのまんまの意味だよ。」

こいつはなかなかしぶとい。それでも俺は周りに「懐柔刑事デカ」と呼ばれている。普通の一般人だったら今頃あつという間に懐柔さされているだろう。

つく。苛つきすぎて今自分の頭にヤカンを乗せたら今すぐ沸騰しそうだ。怒りのボルテージが限界まで振り切るのを自分でも感じる。

「何も…何もわかってないのはお前だろ!!!」

無意識に腰のホルダーに手が伸びる。拳銃に手を伸ばさなかったのは無意識に自制心が働いたのだろう。まあスタンガンに手を伸ばしてる時点でOUTかもしれないが。

「まじかよ。」

驚きの声が青年から漏れる。

「一般人に使ったら色々とやばいんじゃないの？」

聞かれるが無視する。

「最後のチャンスだ、大人しく署まで来てもらおうか。」

この状況になつてはもう脅ししかないだろう。

「わかった。ついていく…」

「おっありが…」

「わけねえだろうが
!!!!!!!」

まあそれもそうだろう。さっきの目を見た限りここで大人しく捕まるようなやつではない。だがそのあがきは無駄なもの。道に行く手にはスタンガンを持った警官、触れた瞬間しめーだ。そして後ろは高い塀。正直詰みだろう。

だから青年が後ろの塀に向かって走り出したときは正直気が触れたかと疑ってしまった。

「俺の脚力しかとみやがれー！！！！！！」

青年は思いつきり足を踏み込み飛び上がる。衝撃の風が俺の短髪を揺らす。

「なっ!!」

何が起こったんだ。さっきまで下で向き合っていたはずの青年はすでに民家の屋根の上、飛んだのか？この塀を？すると一瞬ズキッと頭が痛む。ザーっと視界が歪み頭をおさえる。その歪んだ視界の端に写り込んだのは澄んだ瞳で俺を見つめる一匹の山犬であった。

「山犬だ。」

しかしそれも一瞬のことで山犬は青年に戻り、自分の空虚なつぶやきが残されているだけだ。シーンと静まり帰りなんともいえない寂しさが込み上げる。その寂しさを表すかのように茶色に萎れた落ち葉が風に飛ばされカサカサと音を立てている。

頭痛も引き、視界の乱れも止まった。しかし消えないこの緊張感は何なんだ？喋りだすことができない、いやできない空気になっている。

青年はそのまま足を沈ませもう次の屋根に飛び乗っている。そんなすばしっこい青年を見ている俺はただ口を開けることしかできなかった。

四話 三度目の飛翔

タツ、タツとリズムよく板を踏む音がする。その残された乾いた音の先を見れば一人の青年が屋根の上を前へ前へと身軽に飛び移って、何かから逃げまどつている。

対して追いかける側の男も負けておらず道路の上を必死に駆け青年との距離を保っている。

それがどのくらい続いただろうか。30分？いや1時間かもしれない。しかしその鬼ごっこも終わりを告げようとしていた。住宅街の隅を堂々と牛耳る国道によって。

ーフワッー

体が宙に浮くのを感じる。そして足が塀の上にかかる。自分でも驚くほど簡単に塀にのぼることができた。右足をそのまま沈め、さらに隣家の屋根へと踏み切る。

ータツー

屋根の上に着地すると、乾いた木を叩くような快音が響き渡る。元の場所を見ると警察官がポカンと口を開けていた。

「山犬だ……」

呆然としたつぶやきが耳に届く。人を山犬呼ばわりするとはなんてやつだ。俺はただ運動神経がいいだけの人間、でも実際は自分でも驚いている。いや驚愕と言っても良いだろう。しかしいつまでも驚いてはいられない。すぐに飛び移り屋根伝いに逃げる。年若い警察官はしばらく呆然としていたが、はっと我に返ったように追いかけてきた。

「しつけえなあ。」

さつさと諦めてくれんかねえ、と思っていると住宅街の隅まで来てしまった。隣は国道でブーンと多くの車が走っている。排ガスのけむ臭い匂いで、ケホツと思わず咳をする。

最端の家の屋根に突つ立って思案していると、追いつかれてしまったようだ。肩で息をしてポツンとたたずむ警官を見ていると何故か

違和感を覚え、いつも見ているお気に入りのお気に入りの刑事ドラマ、「相〇^棒」を思い出す。いつも主人公の右京さんは相棒と常に単独行動だけど、犯人確保のときは他の警察官が来ていた……。それに比べこの警官はずっと一人。ここで一つの疑問がはじき出された。

『こいつはなんで増援を呼ばないんだ?』

増援を呼べば、もつと俺を早く捕まえる事ができるだろう。そこで俺は端的に直接聞いてみることにした。

「おい、お前なんで増援を呼ばないんだ?」

警官は拍子抜けしたようにポカンと口を開けていたが、やがてフツと笑うと答えた。

「手柄がほしいんだよ。それだけだ。あきらかにヤバい奴を一人で捕まえたってなればおそらく本庁に行きだ。少なくとも昇進は間違いないだろう。近づくんだ……。あの人に。」

何やらよくわからないが一人で捕まえたって事がわかった。つまり相当なことがない限り仲間を呼ぶってことは無いだろう。

とりあえずどう逃げるか考えるのが大切だ。戻るにもそつちには警官がいるからなあ。車に飛び移る? いや映画の見過ぎだ。どうせ風圧で吹き飛ばされてしまうだろう。

いや、ちよつと待てよ。トラックの荷台なら行けるんじゃないか? 横目に国道を走っている車を見ると、朝だからか多くのトラックがボロボロと低いディーゼルエンジンを響かせながら50キロぐらいのスピードで通り過ぎている。

いけるか? でも痛いだろうなあ。再び国道に眼をやると道の端に立ててある土木工事の看板が目に入った。

これだ! 荷台に土を積んでいるトラックに飛び込めばいいんだ。幸いこの近くではニュータウン開発が行われているらしいからいざれ通るだろう。と思っていると遠くの方にそれらしきトラックが走ってくるのが見える。

主人公補正か! と内心思いながらも体の向きを変え警官に言う。

「あつ!? あんなところに全裸の露出狂が!!」

「なんだって!!」

まるで絵に描いたような反応だったが、今は飛ぶことだけ考えよう。タイミングが命だ。少しでもタイミングがずれれば即ミンチだろう。ドクツドクツと自分の心臓の鼓動が聞こえる。死ぬかもしれないという不安が胸を締め付け、手がプルプルと震えた。体を前傾姿勢にして足に力を込める。

こんなことになるなら何か食つとけばよかつたと後悔しながらも走り出す。恐怖で目をつぶってしまう。しかしこの時の青年の表情は自然と笑みを含んでいた。

「頼むからもうついてこないでくれえー!」
そんな悲痛な叫びを残して一人の青年は道路にきえた。

はあはあ。体がドクツドクツと震え、体中に血液を押し出す心臓は悲鳴を上げている。もう駄目かと諦めかけたその瞬間、青年の足が不意に止まる。

ああどうやら住宅街の端にまで来てしまったようだ。

ここぞとばかりに少年の退路を塞ぐ。

「はあはあ、さあもう逃げ道はないぞ大人しくついてこい。」

とは言ってみるも青年の顔に焦りの感情はなくむしろ訝しげにこちらを見ている。何を見ているのかわからないがきつと頭の中でどうやって逃げるのか考えているのだろう。しかしその後の青年の一言に俺は啞然としてしまった。

「お前は何で増援を呼ばないんだ?」

「はあ。」

思わず間拔けな声が出てしまう。なぜ応援を呼ばないのか……。言ってしまうえばその答えは最終的に1つの答えに収束する。

「手柄がほしいだけだよ。」

様々な理由があるが結局これだ。とにかく今は昇格だ。来年から金もかさむからな。さあさっさと捕まえて公務に戻ろうと塀に手をかけると、青年は叫んだ。

「あつ!? あんなところに全裸の露出狂が!!」

「なんだって!？」

思わず振り向いてしまった。ありがちな展開と思う人もいるとは思うが、人間いきなりある方向を指さして叫ばれたら思わずその方向を見てしまうものだ。当然見た場所には誰もいなく誰かがポイ捨てしたのであろう短くなつたタバコが落ちているだけだ。

だつ騙された!?!慌てて後ろの青年のいた所を見ると、雲隠れしたように何も無い空間が残っているだけで、代わりに道路の方向を見ると子供のように満点の笑顔で飛翔する山犬の姿があった。

ポフツと音をたてて足が埋まり、続いて胸までズズズツと音を立てて土に埋まる。まさかこの感触はと、恐怖でまだつむつていた目を開くと胸まで浸かっている土と黄色の主張の激しい金属のボディが目に飛び込んでくる。

「奇跡だ。」

ホツと安心して一息つくと自分のいた場所をふちから顔を出し確認する。遠ざかっていく警官は何やら地団駄を踏んでいるようだ。あの警官でも流石に車までは追って来ないだろう。警官に追われていたことによる緊張がゆるりとほどけ、安心と同時にじわじわと脱力感が湧いてくる。

土の上に四肢を投げ出し、空を見上げると段々と空がくすんで曇つて来ているのがわかった。溜まったストレスと共に重く淀んだ溜息を吐き出す。いつまでもここにはいけないと思いつつも中々動く気にはなれない。ついそのまま、うとうとしていると不意に金色の光が目を刺した。

眩しいなあ、と思いつつも体を起こしあたりを見回すと田んぼが一面に広がっていることがわかった。手につけている腕時計に目をやるとさつき飛び乗った時から約10分がたっていた。

「寝過ぐした……。」

車の上に乗っているから10分あればそこそこの距離を進んでい

るだろう。

「ん？」

何やら遠くでサイレンのような音が聞こえてきたような気がする。まさかあいつは応援を呼ばないはずだが、警察か？

「……。やばくね。……ちよ待てよ、え!!、はっ!!逃げれないやん。」

走行中の車から逃げるのは困難を極めるだろう。でも車が止まってしまうえばそれこそ本当の終わりだ。

「3回目……か。」

正直言つてやりたくない。死ぬかも知れない。でも今の俺は何も怖くない……はず。枯れかかっていたアドレナリンが再びバドバと溢れ返ってくるのが自分でもわかる。パトカーはもうすぐ後ろで、トラックもスピードを落とし始めている。

「社、行っきまーす!!」

どこかで聞いたようなセリフだが、フツとあたりが暗くなると足を踏み切る。その姿はまるで闇に紛れ夜の街を跳び回る忍者のようだった。

「クソがッー!!」

近くを歩く子連れの親子が驚いたようにこちらを見たがそそくさと去って行く。警察が一般人に警戒されてしまうことは良くないことだが、この際どうでもいい。まさか車に飛び乗って逃げられるなんて。

地団駄を踏んでいると、近くでキーツと車が停車する音が聞こえる。音のした方を見ると白黒のパトカーが一台止まっていた。

「こんなところでどうしたんすか？先輩。ていうかそもそもここ今日先輩の担当じゃないですよね？」

「おっ。」

「ていうか汗ダラダラで……何かあったんですか？」

こいつは俺の1年後に入ってきた後輩の小塚だ。こいつは大の車好きで休みの日にサーキットに行つて走行会に参加するほど好きら

しい。こいつは普段どこか抜けているやつだが今はとても有り難い。「おい、今すぐパトカーを出してくれ！」

急いでパトカーの助手席へ乗り込む。

「え!? っていうか先輩、この担当じゃない……。」

普段職場で俺は賑やかし係、いわゆるボケキャラなのにこんなにも真剣になっているので小塚としても戸惑っているんだろう。

「いいから早くしろー！」

半ば無理やり小塚を車に乗せるとキイイイと大きなタイヤのスリップ音をたてパトカーが発進する。急発進により身体が大きく後ろにのけぞるが気にしている暇はない。

「東京△△区○○○○ー○○○、のナンバーのトラックを追ってくれ!!」

俺は訓練に鍛えられたおかげで記憶力は人一倍ある。車のナンバーを覚えるのなんて訳ない。スピードメータを見るとゆうに120 kmを超えている。しかしこのパトカーは軽自動車タイプのやつなので120 kmが限界だろう。すでにギシギシと車が嫌な音を立てている。

幸いにも平日の正午ということもあり車通りは少なく120 kmで走ってもあいつの運転なら事故することは無いだろう。すると突如車が左へと傾き同時に身体も左へと振れる。思わず窓ガラスに手をつき「おつ。」と叫ぶ。

今片輪が浮いてた気がする。

「危なあ。」

と思つたのも束の間さつきの車線変更の反動で後ろのリアタイヤがスリップしバランスが崩れる。タイヤからキヤヤアと悲鳴が聞こえ、白煙がのぼるが、小塚は気にもとめずに澄まし顔で逆ハンをきると車のバランスを立て直す。

最近、地球温暖化が進んでいるとかなんとかでセダンのパトカーから軽自動車のパトカーへと移行が進んでいる。環境にはいいかもしれないが、いざ犯人を追うってなると軽自動車じゃしんどいかもしれない。

「こういうカーチェイスには向いてないすね。」

小塚は独り言のように呟くと、さらにアクセルペダルを深く踏み込みエンジンの唸り声が最高潮に達する。

「ちよ、流石に出しすぎだろ！」

「でも早くしろって言ったのは先輩っすよ。」

まあ確かに小塚に任せとけば事故ることは無いだろう。

「いや、なんでも無いこのまま頼む。」

「OKっす！」

チラツと小塚の方を見ると妙に顔がいきいきとしている。多分つまらないパトロールにも飽き飽きしていたんだろう。はあ、何で警察になったんだろうか。まあ彼なりの考えがあるんだろう。

それにしてもこのスピードで走られると落ち着かん。全身が変に力んでしまう。タバコで一服して気を落ち着けるか。胸ポケットからタバコとライターを取り出し、カチツカチツと石どうしを打ち鳴らしたような快音が車内に響き渡る。

このライターはさつき買ったばかりだから傷もなしでテカテカと光輝いている。さらにテカテカと輝くボディの側面に描かれているのは浮世絵風の荒々しい海。正直派手すぎるので買い換えようと思っていたところだ。前のが壊れたのでその場繋ぎで500円で買ったものだったので買い換えても大丈夫だろう。

「ちよ、先輩！匂いが制服に付いちやうじやないすか！車の中でタバコは辞めてくださいよ。ただでさえ窓開けられないのに……。」

「今だけだからな？頼むって、な？頼むって！」

「はあ、早死しても知りませんからね。」

小塚はしかたなさそうに溜息をつくと質問する。

「先輩が言ってた車ってあれすか？」

まだ遠いが、かすかに黄色っぽい工事車両が走っているのが見える。

「そうだあの車だ。」

あたりはいつの間にか田園地帯になっておりあたり一面が稲穂で覆われている。その風景は、かの有名なナウ○カのオ○ムの触手のようだ。

「早すぎやろ……。」

だいぶ前に出発したはずの車にもう追いついている。やはり小塚に頼んで正解だった。この先のトンネルを抜けた先らへんで追いつくことができるだろう。

「このまま全力で追いついてくれ！」

一人で捕まえることはできなかつたが小塚となら良いだろう。仲良く昇進だ。そんなことを考えながらひたすら前に進んでいると、トンネルが近づいてくるのと同時に青年の後ろ姿も近づいてくる。

そしてフツ視界が暗転し、目が慣れるまで数秒かかった。コーというトンネル内を走る車の音のみが聞こえ、蛍光色の車が迫ってくる。そしてフツと視界が明転した時、そこにさつきまでいたはずの青年の姿は無かった。

五話　こんなはずじゃ無かったのにい！

「はあ、はあ。」

暑いそして痛い、苦しい。さつき車から飛び降りた後、俺は来た方向へと戻り、田園の横を走っていた。

「痛っ。」

慣れない革靴での運動なので当然犬斗の足は靴ずれを起こしていた。鉛のように重くなった身体を引きずるように必死に足を踏みしめ前へ前へと進んでいる。

こんな所で捕まるわけにはいかない。ここで捕まったら俺のしたことはなんなんだ。いよいよ世の中の警察も腐ってきている。

後ろに振り向くとさっきのパトカーは工事車両を追いかけたようにたようだ。

「とりあえずあそこの住宅街までいくか。」

そしてまるで高校生の持久走のようなスピードで走り出す。俺はどうしたら良いんだよ。

ふっ、と視界が暗転するとそこに青年の姿は無かった。何も知らない小塚は何事もなかったかのような澄まし顔で前を見ている。一方俺はといえば、あんぐりと口を開けた間抜け面で近づいては離れていく街路樹のスタジイただただ見つめているだけだ。数秒間が空く。

「ちよつと行ってくるわ。」

手を車のドアにかけシートベルトを反対の手で外す。カチツと外したときの音が耳に入ったのだろう、小塚がふつとこちらを振り向く。

「ちよつ、ちよつと！先輩なにやってんすか！」

小塚は慌てて片手をハンドルから離し俺の袖を掴む。バランスを崩しながらの片手運転なため車が不安定になりユラユラと揺れる。それはかの有名な、藤○ゾーンではなくただの運転ミス。超絶な運転で速くなるということもなく、サスの柔い軽自動車はグラグラと揺れる。

「先輩いい加減にしてください！」

「まじで危ないんすよ、スピンして下手したら死にますよ。」

それにも構わず片手でドアのレバーを引く。バンっ、ドア開示時のみ光る車内ライトがオレンジ色に輝く。

「まさか先輩外に飛び降りようとしてんすか?! 運悪かったら骨数本いきますよ！」

小塚が袖を引く力を強めるがもう引くわけにはいかない。

「離せよ..。」

ギンっと目を見開き小塚を睨みつける。小塚には悪いが離してもらわなければならない。

小塚はひっ、と小さい悲鳴をあげ袖を離す。

なんで俺は後に引けなくなっているんだろう。自問自答してみる。

あんなおちよくられた逃げ方をされてムカついているというのもあるだろうし、警察官としてのプライドもあるだろう。熱くなつて周りが見えなくなっているってことは自分でもわかっている。

「ぜってえ逃さない。」

怖い。けど逃げていられない。グツと足に力を込め身体を外へと放り出す。当然そのままスタつと着地できるわけも無く、慣性の法則によりそのまま歩道をゴロゴロ転がる。転がりながら身体のあちこちから痛みを感じる。10メートル程転がると、やっと勢いが止まりヨロヨロと起き上がる。

「痛てえ……。」

身体のあちこちに打撲や擦り傷があるが骨が折れなかったのは不幸中の幸いだったのだろう。小塚には悪いことをしてしまったが今は追いつくのが先決だ。

「指くわえてまっつてな。」

警官は走り出す。傷だらけの身体を背負つて。しかし警官の目はランランと輝いている。警官は走る、いや走るしか無かった。両手に青年を捕まえるという希望を大事に抱えて……。

「きちん……。」

あれから10分程走つてやっと住宅街の角に着いた。ここまでくれば大丈夫だろうと田んぼの端にある石に腰掛ける。

「足痛てえ……。」

いったん革靴と靴下を脱ぐと、足首あたりにあるピンク色の傷口があらわになる。靴ずれだ。慣れない革靴で激しい運動をすればそりや靴ずれになるだろう。

「これからどこに行けば良いんだ……。」

少なくともここにはもういることは無いだろう。地元に戻るにしても、もう親はいないから行く宛も無い。田舎だな、田舎に行くに限る。どうせもう都市にはいられないだろう。そんな風に今後のことを肌寒い風に吹かれながら思案していると視界の隅に何か青いものが映り込む。疲れていたのだろう、最初は気にもとめなかったがだんだんとその物体が大きくなってくる。

は？まさかそんなわけ無いだろう。車から飛び降りたんだぞ……。ありえない。なんで、そこまでできる。何が根源なんだ。あの警官の絶望的なしつこさに半分呆れながらも焦って靴を履き走り出す。

この時、犬斗の心情と警官の心情はまさに対になっていただろう。

「住宅街に入っちゃえばこっちのもんだ。」

住宅街の角を勢い良く曲がろうとしたその時、……ドンつと何かにぶつかる。

「きゃっ！」

きゃっ？どうやらぶつかってしまったのは人のようだ。続いて何かがドスドスと落ちる音が聞こえる。反射的に目を瞑ってしまったが目を開けると、そこには一人の倒れている学生らしき少女ともうひとり側でその少女を心配する金髪の少女がいた。

あたりに散乱しているノートを見ると名前には宇佐見蓮子と書かれている。たしか大分県に似た名前の寺があった気がする。それに

しても珍しい名字だ。他の開いているノートに目をやると、超弦理論【紐について】と書かれている。だいぶ難しい研究をしているようだ。ていうかこんなことをしている場合ではない、慌てて駆け出そうとしてふと足を止める。今ここで立ち去っては逆に怪しまれるだろう。ここはノートを全部拾ってから行くとしよう。

「すみません。」

それだけ言いぱつとノートを拾って渡し、駆け出す。今のでだいぶ時間を使ってしまっただろうから、警官は確実に近づいて来ているだろう。このまま逃げ続けるのは得策では無いだろう。灯台もと暗しで隠れた方が見つからないかもしれない。

あたりをキョロキョロとみまわすと、少し先にある神社が目に入る。なんとなくだが神社ってなにか入りづらそうだし、まさかここで隠れてるとは思わないだろう。

「今度こそさらばだ。」

最後の余力を振り絞り全力ダツシユで神社に駆け込む。ここで犬斗は気づくべきであった、神社の鳥居に妙な御札が貼られているのに。中に入ると何だか身体がズシリと重くなった気がする。それが疲れなのか、はたまた別のものかわからないが今はそんなことはどうでもいい。

「念には念を入れとこう。」

そして神社の脇を通り、奥の母屋の庭に駆け込む。はあく、と安堵の溜息をほく。人の庭に無断に入り込むという罪悪感は多少あったが今はシャッターがしまっていて誰もいなそうなので今だけ居させてもらおうと思う。

カチリ……。そんな音が聞こえた気がした。

…錆びついて噛み合わなかったはずの2つの運命の歯車がガチりと音を立てて噛み合う。ここに駆け込むのを最後まで見送っていた少女たちによって。

「よっころせつと。」

荒ぶった呼吸をおちつけると縁側に腰掛ける。ギシイという木のきしむ音と共に腰を後ろに倒し、伸びをする。

「それにしても何も無いな。」

そうこの庭、余りにも何も無いのだ。まるで昨日即席で作ったみたいな花壇一つ無い庭でまるで人が住んでいる気配がない。そしてそのまま仰向けで目をつむり時がすぎるのを待とうとした時、まぶたの内側がふつと暗くなる。何かいるのか?と思ひ。目を恐る恐る開けると…そこには、柴犬の顔がドアアップで映し出されていた。

「うおっ!!」

まったく気配を感じなかったので驚き、1・2歩あとずさりする。

「いきなり現れると心臓に悪いなあ。」

と呟きつつも、その柴犬の艶やかな毛並みに思わず息を呑む。そのモフモフした毛を触りたい衝動にかられ思わずゆっくり手をのばす。噛まれるかなと心配したが、犬は自分の指先をスンスンと嗅ぐといき

なり膝に足をかけじやれついできた。

「ちよっお前、やめろつてえ〜。」

表面だけは嫌がつているていを装いつつも口元はニヤけており、声は嬉々としていて喜んでいることは明白だ。両手で柴犬を羽交い締めにして優しくフワリと抱きしめるとモフモフが体中に押し当てられ天国に昇ってしまったそうな心地だ。

「なんかおばあちゃんみたいな雰囲気だなあ〜。」

近くにいるだけで何だか安心する、まるでおばあちゃんだ。

「眠くなってきたわあ〜。」

色んなことがありすぎて忘れていたが、今日俺は土の上で寝ていたんだ。昨日のしごとの疲れが取れているわけもなく、眠くなるのは必然だろう。一眠りするか：と柴犬を抱きながら再び目を閉じようとした時、自分の上にいる柴犬がけたたましく吠えだす。

まさか警察か?!と違って背を起こすとその犬は俺の来た方ではなく、家の中に向かって吠えていた。

「何かあるのか?」

と聞いてみるも犬なので答えは返ってこない。物騒だが中に死体でもあるのか?犬は人間よりも数100倍嗅覚が良いという。自分じゃ気づかない異変に気づいていてもおかしくない。最低だが死体があつたら、もし警官が来た場合警官はそっちに行かざる負えないだろう。俺に余罪が一つプラスされるかもしれないが。

「ちよつとぐらいなら大丈夫だよな?」

そろりと窓に手をかけ中を覗こうとすると、窓の鍵は開いていてカラカラと小さな音を立てて窓がスライドする。中は木材でできた、いかにも和といった造りで木のいい匂いが立ち込めている。

「何か逃走に使えそうなものないかねえ。」

と忍び足で中に入ろうとすると、犬は俺の足の裾を引っ張り必死に中に入らせないようにしてくる。こいつは何故か俺に忠犬だなあと思いつつも

「ちよつとだけだから大丈夫だつて。」

と家の中に足を踏み入れる。中に入ると奥の方から女の声が聞こえる。小声で喋っているのになんて言っているかはわからない。何故か無性に気になった俺はそちらの方に歩を進める。部屋は全室畳部屋でマニフェストなのかというほどなにも無い。目の前の部屋からだけ光が漏れておりはつきりと声が聞こえる。誰かと会話しているようだ。

「ちよつと早く帰って来てくださいよ!! 仕事が溜まってらんですよ!!」

「待って、これも幻想郷のためなのよお。なんとか人員を集めれば当たって砕けろでなんとかなるの。」

「そんなこと言ってまた現代で遊んでいるんですよ!! 紫さまの言うことは信用できません! ていうかまだ帰ってこないってことは見つからないってことですよね? ていうかこのこと他に聞かれてたらどうするんですか!」

「うるさいわねえ。藍は神経質すぎなのよ。ここには人よけの札が貼つてあるし普通の人なら空き地に見えるようにしてあるから大丈夫よ。」

なんの話をしているかわからないがここは退散したほうがよろしそうだ。そつと後ろに下がろうとすると、カタツと手が触れ音をたててしまった。

やっべえ。思わず背筋を伸ばして固まってしまふ。しかし女は気づかなかつたようでそのまま話を続けていた。

「いいから早く帰ってきてくださいっ！人里から新しい塩送つてくれつて要望がきてるんですよ。」

「はあくわかつたわよ。もう帰るつて。」

………

「……丁度いい人材を見つけたとこだしね……。」

ぞわあ、と体全身に鳥肌がたち、こちらを見る視線を背で感じる。自分では見てはいけないとわかっているのに否応なしに身体が勝手に後ろを振り向く。

そこに立っていたのは金髪的女性で紫色のドレスを身にまとつてゐる。その人から感じるのは……

威圧、威圧、威圧、威圧。強烈な威圧。無理矢理でも上下の差をわからされてしまふ。どうあがいても逃げれる気がしない。そして何よりも感じるのはこいつは人間ではないという確信だった。

「ちよつと協力を願いたいんですがあ、よろしいですか？」

断れない、断ることができない、俺はそのまま返事をしてしま……、

わなかった。どこからかタツタツと足音が聞こえてきてガタ
ンツと窓が開かれた。

「やっと追い詰めたぞ!!」

「あつ。」

瞬間警官は固まる。

「あらあなたも協力してくださるの?」

「.....」

「は..はい。」

声は半分震えていた。

「よかった。それじゃあ藍、二人確保つてことで面倒たのむわね。後、
夕飯の準備しといてね。」

「まったく紫様はもう..早く帰ってくださいよ。」

「ちなみに私は現代で有名な、ケーキ食べて帰るから。」

「え!!ちよつとずるいですよ、私にも買って...。」

ブチつと音を立て通信が切られる。

「それじゃあ行ってらっしゃい。」

にこつとその女は微笑んだ。

最後に俺は警官に振り向いて言った。

「あのお、なんか……どんまい。」

「二名様幻想郷にご案内です！」

女が指パッチンをすると、ぽっかりと下に穴が空き身体が中に浮きまたたく間に落下していく。その穴は無数の目で囲まれていて気持ち悪い。

最後に

「だから言ったのに……。」

と聞こえたのは恐怖からの気のせいだろう。

り痛いだろう。

「痛ってええええ!!!!!!」

青年の悲鳴がこだまする。寝ていて気の緩んでいる所を無理やり締め上げられたんだ。自分でやっておいて何だけどそりや痛いだろう。まあ抵抗せずに力を抜けば痛くないのだが、今の彼からしたらそれどころでは無いかもしれない。

「暴れるなって!」

このままだと暴れられて逃げられてしまうかもしれないので無理やり抑えつけるしかない。片膝を青年の腹に付き更に体重をかけようとすると、ググツと体を押し戻される。

「離せよ!」

こいつやべえよ、押さえつけてるのに、まるでコイキングのように跳ね回っている。この細い体のどこにそれだけの力があるのか。

最初はフワリと綺麗に整えてあった布団も今やその乱闘騒ぎによって乱れに乱れまるで団子ようにしわくちゃになってしまっている。無理やり抑えるために全体重をかけると、

「おっ・・・折れる折れる折れる折れる!!」

と、さらに暴れる始末だ。

そしてさらに3分ぐらいいもみ合っていると不意に暴れてバタバタともがく青年の肘が、みぞおちに入ってしまった。

「いっふい。」

たつてことだろうか？でもそしたら底に付く前に衝撃もなく気絶するのはおかしい。

これでも俺は警察官だ。訓練を受けている。だから生半可な恐怖ごときで気絶はしないだろう。だったら何だ？地下世界に落とされたとしても言うのか？

「つかぬことをお聞きしますが、ここはどこなんでしょうか？」

さつき殴られたことから何となく下手にでてしまう。これが恐怖政治というやつか、と内心悪態をつくも女に手を出すのはご法度なので柔らかく対応する。

「お前達は何も知らないのか？」

まるで知っているのが当たり前かのようにそのけも耳は質問してきた。

「いきなり穴に落とされただけで、何も知らないんだが。」

と青年が困ったように顔をしかめながら、口をはさむ。

そのけも耳は呆れたようにため息をつくとぶつくさと何かをつぶやいている。その呟きを耳を澄まして聞いてみると、

「紫さま後で絶対干す。」

と連呼しており、その様子はまるで獲物を狙う肉食動物を連想させる。そもそも見た目が狐っぽいので本当に肉食かもしれない。気を引き締めて対応しよう、と心に言い聞かせていると再びケモ耳の焦点がこちらに合った。

「ここが幻想郷ってことも紫様から言われてないんですか？」

「幻想郷？ここは東京なのか？」

青年が素つ頓狂な声で聞き返すと、

「はあ。」

ケモ耳はだるそうにため息をつき、頭をおさえながら答える。

「ここは日本といえれば日本だけど日本じゃない場所って言えば正しいかもしれないですね。幻想郷、それがこの世界の名前です。」

「いや、そんな曖昧に言われても何もわからないんだが。」

「もう面倒くさいんで詳しいことは後で紫様に聞いてください。まあ紫さまが帰ってくる前まで適当にゴロゴロしといてください。」

「ちよつと待てよ。俺たちは元の場所に返してもらえるんだろうな？」

「さあ？それも後で自分で聞いてください。今回の件は紫さまの独断ですからね。はあ、まったく紫さまは何を考えているんだか……じゃあそういうことで。」

そう言うのと金髪のケモ耳は俺たちに背を向け、屋敷の奥へと帰っていった。髪からカレーが滴る中、この場に取り残された俺たちは顔を見合わせると、先程とは違いゴニョゴニョとクラス替え後の気まずい会話のように、小さい声で話し始める。

「あの……何か……どうします？」

額から茶色いカレーを垂らした青年がこの微妙な空気の中か質問してきた。

「とりあえず頭を洗いに行きますか・・・。」

「あつ、はい・・・そうですね。」

ずしりと背中にのしかかる重たい空気を背負いながら、洗面所を探すために二人で和室の外に出る。外に出てみると、この建物の作りがよくテレビで見る古民家をちよつと豪華にしたようなものである事がわかる。掃除はきちんとして行き届いているようで、太陽がさしている廊下はきらりとその光を反射している。

「はあ〜。」

思わず感嘆の声がもれる。今右手には開放的な庭が見えているがただの庭ではない。まるで牛乳のような純白の砂利が敷き詰めてある、見事な日本庭園だ。これほど立派な庭を作るのには相当な金がいるだろう。

「金持ちか・・・。」

青年がつぶやくのが聞こえる。するとトントンと包丁で何かを切る音が聞こえてきたので、台所の流しを借りるため音のした方と歩みを進める。

ーガラガラー

障子戸を開けるとそこにいたのはやはり先程のケモ耳だった。

「ここに何をしにきたんですか？まだ料理中なのでお帰り願いたいん

ですけど。」

「いや誰かさんのせいで頭がカレーまみれになってしまったんで流しを貸してもらいたいんですけど。」

ケモ耳は少し黙っていたが、やがて勝手口を指し

「外に井戸があるのでそこで洗ってください。」

といつてきた。

「いや台所の水道を使わしてくれれば良くないですか？」

青年のちよつと失礼なもの言いに少しイラツときたが、それは俺も同感だ。

「はあく。さつきも言ったけどねここは日本であつて日本でない場所なの。あなた達の住んでいる現代で当たり前前に蛇口から水が出てくるのも、当たり前前に電気が通っているのも、ここじゃ当たり前じゃないの。ほら、わかつたならさつきと出ていく！」

無理やり外に追い出されるとピシヤリと戸を閉められてしまう。

「どゆーんや〜。」

電気も水道も通っていない？そんなに田舎なのか？次々と疑問が溢れてくるが、自分の着ている浴衣がどんどん茶色に染まっていくことを思うとさつきと洗ってしまったおもうと思つた。幸い井戸は見える位置にあつたので冷たい水に体を震わせながらも頭を洗い、ビチョビチョになつた浴衣を絞る。

「ふう〜。」と一息つくと先に頭を洗って待っていた青年が聞いてきた。

「そういえば名前聞いてもいいですか？」

よく考えると布団で起きてからずっと青年と呼んでいたが名前は一応聞いておいたほうがいいかもしれない。

「俺の名前は社 犬斗。高卒で今は中企業の社畜だ。」

まじかよ。まだ学生だと思っていたがもう立派な社会人だったらしい。

「俺は真弓まゆみ 優太。知ってのとおり警官をやらせてもらった。」

お互い自己紹介をするも嫌な間が空いてしまう。これはお互い陽キャに見えても根は陰キャということの現れだろう。

「ていうか今ならここから出れるんじゃないすか？」

・・・ホンマやん。ちつとも気づかなかったが、今あのケモミミは台所。そしてあの紫とか言う女性は外出中。今なら普通に出ていてもバレないんじゃないか？

俺は無言でコクリとうなずき親指を立てる。そして、そろりそろりと、一步一步吊り橋を歩くみたい慎重に屋敷の前を通り過ぎた。そして屋敷の出入口らしき門にたどり着くと、青年に合図をして全速力で走り出す。

冷たい風が頬の横を吹き抜けた。ゾクッと背を震わせ後ろを振り向く。

そこに立っていたのはあの紫とか言う女だった。

「あら、どこに行かれるんですか？」

彼女とは数メートルほど離れていると言うのに耳元で囁かれているような感じがする。

「いや、あのお、ちよつとお使いを頼まれたんで。じゃ、また後で！」

「そつちにお店は無いわよ。」

ニコリと微笑みながらその女は冷酷に告げたのだった。

七話 はじめの一步

そっちにお店は無いわよ。の問答から10分が経過している。俺たちは紫とか言う女の威圧に押し負け結局屋敷の中に引っ込み、紫がのんびりとカレーを食べているのを二人とも正座で眺めているのだが…、

「いや、どういう状況だよ！」

俺が大きな声でツツコミをすると社は白々しい目でこちらを見てきた。

「いやだって何か気まずかったじゃん！」

「……………」

「なんか言えよ！」

こんな不毛なやり取りを続けていると紫の口が食べるためではなく、喋るために開かれる。

「ふふっ。仲がいいのね。それよりもこのままだと藍にご飯作ってもらえなくなっちゃうかもしれないから、さつさと連れてきた理由を言っちゃうわね。」

「さつさとこっちは帰りたいんだ。早くしてくれよ。」

「帰ることは…いや話が先に進まないから先に説明しておこうかしら。まずここはあなた達が住んでいる日本ではない。幻想郷って場所なの。まあ詳しくはこれから教えるとして、あなた達をここに連れてきた理由はあなた達に強くなってもらうためよ。だからあなた達

が強くなるまで元の世界に戻ることはできないわ。」

「はあ？帰ることができない？そんなことあったたまるか。」

「どう言おうと無理なもんは無理なの。諦めなさい。」

「ていうか何で俺たちがお前のために強くならなきゃいけないんだ？俺たちが強くなったとしてもお前には関係の無いことだろう。」

俺が熱くなっているのに対して社は冷静に紫の矛盾点を指摘している。たしかに部外者である俺達に強くなったら返してあげるといふには紫にはなんにもメリツトがない話だ。

「俺たちがここの世界にいる間は元いた世界では時間は進むのか？」

なんかこいつ嫌に順応が早いな。俺はこんな状況に頭がアップアップなのに社はこんな非現実な現象に少しもどうじてない……。こいつ元厨二か？

「当たり前じゃない。同時に二つの世界が存在してるんだから。」

「それは困るー！」

俺はハッキリと言い放つとギロリと紫を睨んだ。

「俺は妹まだ就活中なんだ。俺が生活費を払ってやらないとだめなんだよ。俺たちは親がいないからな。」

「しようがないじゃない。それに今この場の主導権を握っているのは私。あなた達が私に意見する事はできないの。」

なんて自分勝手なんだ。北海道の積雪のようにズシズシといら立ちが山のように積もっていく。プツン。自分の何かがはち切れた。

「いい加減にしろ。」

「勝手に俺をこんなところに連れてきて、完璧に法律違反だ。」

「法律・・・何のことかしら？」

「とぼけるな！幻想郷？そんなこと信じられるか！」

ふぎけるな。これからだったんだ。あの人のように正義感の強い人になって、妹を守るくらい強くなって偉くなってのんびりと生きていたらそれで良かったんだ。なのにあいつは俺からそれを引裂いて個人の目的で利用しようとしてる。許せない。

「元の世界に返しやがれ・・・。」

「ふーん、あくまで反抗する気・・・か。まあ基礎を見ておく必要もあるか・・・。」

「幻想郷では力がすべて。返してほしくば私を倒せば良いんじゃないかしら。」

「いいんだな？」

そう啖呵を切り返す。するとそれまで黙って紫の隣に控えていた藍がこちらに向かって気まずげに言ってきた。

「あの、そのやめておいたほうが・・・。」

そこまで言うと紫が藍を手で制す。

「藍あなたは黙ってなさい。」

一呼吸置くと紫は続ける。

「あら、えらく自信ありげね。」

「社。今は一旦休戦だ。お前も元の場所に戻りたいだろ……。だから協力しろ。」

青年は何だかめんどくさそうな表情をしていたが、はあく、と大きなため息をついて言った。

「つたく、さつきまで俺を追いかけてめったんめったんにしてた奴が言う言葉か……。でも誰かに駒にされるってのは……。」

青年はスクツと立ち上がるとファイティングポーズをとって続けた。

「俺の性分じゃねえからな。」

舞台は整った。よくわからない能力が何だか知らないが、そんなもんあつてたまるか。

「厨二かよ。」

その発言が開戦のの合図となり両者は素早く飛び下がる。正直女を複数で攻撃するのは気が引けるが、妹が関わってくるとなると放つて置くことはできない。

「とりあえずは小手調べね。」

そう言うとき紫は紫色のドレスをふわふわとたなびかせまるで天女のように空中に浮き上がる。その表情は笑みを浮かべており、こちらを見下す強者の目をしていた。

「はっ。」

ただそれだけが口から溢れる。どういう原理なんだ？しかし目を凝らして見てもワイヤーや機械の存在は確認できなかった。

「あいつなめてるな。」

社がつぶやく。確かに紫は浮き上がるだけで攻撃らしい攻撃はしてこない。

「たどり着けるもんならたどり着いてみるってことかよ。」

さてどうする。普通にジャンプしても届く距離ではなさそうだ。あれこれ考えてみるも妙案は浮かんできそうにもない。するとさっきまで隣りにいた社が勢いよく駆け出した。

「俺をなめてもらっちゃ困るんだよ！」

右足で地を踏むと一回で屋敷の屋根に飛び乗る。そして着地した左足にそのまま力を込めると、紫の方へと手をのばす。紫は慌てた様子で上に掴みを避けた。社の腕は紫のドレスをかすただけであったが、紫の表情は余裕をぶっこいていたものから挑発的な表情へと変わる。

相変わらず超人的な身体能力だ。まるでゲームのバグを見ているような気分になる。

「ふふっ。馬鹿げてるわ。でもあなた相手ならちよつとぐらい力使っ

ても大丈夫そうね。」

片頬をにやりと持ち上げ言うと、紫が手を広げ、その腕を振り抜く。すると何もなかったはずの虚空から紫色に輝く閃光玉らしきものが放たれた。

「なっ!?!」

剣道をやっていた頃の瞬発力が何とか体を横へと押し出した。頬に擦り傷ができる。

「俺かい!?!」

今の流れは着地した社に向かって仕掛ける場面だろ!俺まだ何もして無いんですけど。こいつずる賢いタイプだな。俺は曲がったことが好きじゃないのであまり好きにはなれないタイプかもしれない。

「ていうか色々ツツコミ過ぎて、肝心の閃光に何も触れられてないんだけど。」

銃弾よりは遅くなんとか視認できる速さであったが……、今となつてはいちいち不可思議な現象に構わない方がいいかもしれない。今の最優先事項は東京に帰ることだ。

「今のを避けるのね。あなた達本当に一般人かしら。」

そう言うとさらに腕を振り上げ2、3発の閃光玉を飛ばしてくる。その速さはさつきより増しておりの確に俺の体を捉えて、まっすぐこちらに飛んでくる。考える暇もなく俺はさつきと同じように横に飛んだ。閃光玉が足の間と腕の上、脇下を通り過ぎていき風が吹き抜けていく。本能は当たったらヤバいと告げているのだが、怪しく煌煌と

紫色に輝く閃光は、妙に俺の視線を誘う。

「きれい。」

というのが率直な感想であった。

しかし、今のこのやり取りでお互いの役割は明確化しただろう。俺が誘い、社が潰す。これしか無い。悔しいが俺にはひと踏みで屋根に飛び乗るほどの身体能力はない。空に行かれてしまつては手の出しようがないのだ。自分のやれることをする、それが最善策だ。

「おやおや紫さま？当たつてませんけど大丈夫ですか？」

とにかく煽つて気を引くのは紫の性格によつて効くか効かない変わってくるが、あんなに上から目線なんだからプライドも高いと思いたい。これでも人を見る目は持っているつもりだ。

「ふんっ。だまらっしやい。でも、まだまだ足りなそうね。」

再び紫は閃光を飛ばしてくるがさつきより速さと数が増しているのがわかる。ははん、さてはこいつ普段は自分の冷静キャラですよ感出してるけど実は負けず嫌いなタイプだな。思考にかかる時間は、ほんの0,0数秒なのにも関わらずもうすぐそこまでもう閃光は迫っている。

「ふんっ」

それを無理やり伏せることで回避する。脳天すれすれを閃光が通り過ぎていった。やはり剣道をやってきたころの観察眼がいきいている。

剣道と聞いてアニメとまでは行かないが、竹刀での激しい打ち合いをイメージする人は少なく無いだろう。しかし違うのだ。本来剣道

はほんの一瞬で勝負が決まる。お互い相手の動きを観察し動きがあつたらすぐに反応する。手の微妙な動きも見逃さないそういうスポーツだ。今の紫の動きは予備動作が大きく、閃光が飛んでくる前に対策を立てられる。

剣道やつておいて良かったと胸をなでおろすも、俺の仕事は終わって無いと言ひ聞かせ、立ち上がり紫をにらみ直す。

「大層な口聞いてた割に一発も当たりませんけど、もしかしてこれが限界ですかあ？」

わかりやすい煽りだが言われた本人からしてみればイライラしてくるだろう。実際自分も言われたらイライラしてくると思う。

「そんな大口叩けるのも今のうちよ。せいぜい頑張つて頂戴。」

そろそろ止まって避けられるのは限界だろう。疲れるけど走るしか無いみたいだ。体を横に傾け走り出すが、目線は紫から離さない。再び紫が閃光を放とうとさつきよりも予備動作小さく腕を振ろうとした時、紫の背後に迫る影があつた。そう、もちろん社である。期を見て背後からの不意打ちである。どうやら松の木を踏み台にして飛んだようで、その拳は紫の胴体をしっかりと捉えている。

その拳が紫に触れようかという時紫が告げた。

「甘いわ。」

その体を空中でひらりと翻すと、当たるはずだった社の拳は空を切りこちらへと体ごと転がるように飛んでくる。

「お前背中に目でも付いてるのか？」

「やあ？どつどつしょうねっ。」

こいつの場合本当についてそうでちよつと怖いが、それよりも今は対策を立てないとだめだろう。前回り受身を取りこちらへと転がってくる社に小さく声をかける。

「もう少しこの戦法でいこう。」

彼はうなずくと、再び立ち上がり逆方向に走り出す。今のが偶然と
いうのもありえる。その間にも何個か閃光は飛んできておりそれは
足元へとぶつかり、純白の砂利を巻き上げる。そんな状況ながらも
俺は心に誓った。

絶対に帰るんだと。

心に誓ってから何回が経過しただろう。何回やっても紫はまるで
蝶のように攻撃を回避してしまう。俺にも攻撃手段があればと思う
がそれは無理な話だろう。いや無いことはないのだ。部屋には警察
のベルトが置いてある。拳銃も中に入っているが、倒すのと殺すのは
違う。殺されていい命なんてこの世には一つもない。

「じり貧だな。」

攻撃は当たらないのに、こっちの体力が減って行く。ついに乳酸が
たつぷりと溜まった足はその場で動きを止めてしまう。何か隙が、い
や大きな隙が必要だ。それを無理やり作るしか無い。そのためには
こっちも痛手を食らうかもしれないが…、

帰るためだったらなんだってするそう決めたのだ。

「次の閃光が終わったら俺が絶対、隙を作る。だから絶対決めてくれ。」

「その確証はあるのか？」

「ああ。絶対だ。」

「わかった。」

それだけ言うと社は前に向き直り駆け出す。閃光が肩の横を通り過ぎるのを流し見ると俺も社と同じように駆け出す。ただし、社と違う箇所といえば俺はまっすぐ紫に向かって走っていることだ。

自分がどうなろうと関係ない。あつたか我が家に帰りたいただけなのだ。妹のためになりたいのだ。だからこそ俺はこの言葉を叫ぶ。

「俺はシスコンだああああ
!!!!!!!」

絶叫と同時に紫に飛びかかる。幸い紫は閃光を打ったあと一瞬だけ高度が下がる。このことにきづいた自分を褒めてあげたいぐらいだ。

紫の手に手先が触れそのまま掴む。

「隙は作ったぞおおおおおお
!!!!!!!」

瞬間、体が吹っ飛ぶ。ゼロ距離での閃光。物凄い衝撃が体を貫き地面をゴロゴロ転がる。かすれる視界で紫を捉える。社の拳はもう紫の目の前。避けれるはずがない。

「あなた達やるわね。」

そう紫眩いたのかもしれない。でも何でだろう。社の拳は空間へと埋まっていく。そして拳は社の腹に突然出現した。ゲホツ。すっかり暗くなつた視界の中で社の咳が聞こえる。そのまま耳に届く炸裂音と共に誰かが転がってきた。ああ、これじゃ俺が恥ずかしい告白をしただけではないか。

「おやすみなさい。」

最後、空っぽの耳に優しくその言葉が響いた。

八話 巫女の勘

「ほら早く起きなさい。遅刻しちゃうわよ。」

その言葉で目を覚ました。

「今日友達と放課後遊ぶから。」

寝起きの寝ぼけた声で告げると返ってきたの母の心地いい返事、ではなく

「お前大丈夫か？」

という真弓の心配した声だった。

「は？」

慌ててまた閉じようとする目を見開きあたりを見回すと、そこに写っていたのは前に俺が目覚めた屋敷の和室の天井であった。

「寝ぼけてたみたいだわ。」

「ふーん。お前にもそんな可愛いところがあるのか。あんなバケモノみたいな動きしてんのに。」

「うるせえ。そんなこと言うわりにお前ゴリゴリのシスコンじゃねえかよ。あんな堂々と叫んでな。」

カウンターのパンチが強すぎたのか真弓は眉間を抑えてうつむき黙りこくってしまう。こんなことになるのはわかりきっているのに何で叫んでしまったのは謎だ。

「俺たち負けたんだよな…。」

そんなことお互いわかりきっているのにも関わらず、そう聞かずにはいられない。

「そうだよ。気絶してから丁度一日たつらしい。さっきそこで藍に聞いたからな。で晴れて今は軟禁状態というわけだ。」

一番辛いはずの真弓は平然その事実を言っただけのける。

「そっか……。」

和室の一室に重苦しい空気が流れる。はあ。どうしてこんな事になってしまったのだろうかと一瞬考えかけるも、特に現代に置いてきたものは無い。強いて言うならば、会社を無断で抜けてしまったことだろうが、正直言っただけであんなブラック企業については会社が潰れる前にこっちが壊れてしまう。まるでマリオネット人形のように毎日指示されたことをするだけの職場。残業は確定。最悪だ。なのでこっちにいるという選択肢に気持ちが悪く触れつつあった。

しかしだ。真弓の妹を残してきている心配もわかる。俺だって真弓を冷たくあしらっているかもしれないが、良心は持っているし、人の優しさも知っている。だから真弓の辛い気持ちに痛いほどわかった。最初は警官として敵視していたが、今はもうほとんどなくなってしまう。これが吊り橋効果ってやつか？いや、やめとこう。男同士でなんて俺はそんな趣味は持っていない。

なんかかならないか？と思考をめぐらしてみるも策はな…あつた…。いやでもこの案は本人が嫌がるかもしれない。聞いてみないとわからないか…。

そのことを真弓に言ってみようと口を開けたとたん、目の前の空間が裂け寝不足のときの俺の目がギョロギョロと睨んできた。

「紫・か。」

「ご名答！それにしても辛気臭いわね。もっと元気だしていきましょ！」

お前のせいなんだよ！と頭を抱えたくなるが、それを我慢し、質問した。

「なんの要件なんだ？」

「いくら強くなるって言ったってまだよくわかんないだろうしね。見本を見せてあげようと思ったのよ。今日はいわゆる校外学習ね。」

見本？何がなんだかよくわからんが、行く前にこれだけは置かなければならない。

「待ってくれ、お前が言う「強くなる」には条件がある。」

紫はなにか見定めるように目を細め、真弓は驚いたようにこちらを振り向いた。

「ふくん。言ってみなさい。」

「現世から自分の私物の持ち込みを許可することと、もうひとりここに連れてきてほしいんだ。真弓の妹を。」

「私に意見する気……か。どうせ私がここでそれを断ったらあなた達真面目にやらないでしょ。」

「さあな。」

「はあ。わかったわ。認めるわよ。でもそれには色々手順が必要なの。できても一週間後ぐらいかしら？それまで待つてちょうだいね。」

「ああ。」

よし。交渉に成功した喜びを噛み締めながら、真弓の方を振り向く。当の真弓は呆けた顔をしており、まるでイッちゃってる人みたいだった。

「あの…なんか悪いことしたか？」

聞いてみると、その焦点の合わない瞳に涙が滲み、やがて顔をつたいポツリとしたに滴った。そして彼の体が壊れかけのロボットみたいにワナワナと震えだす。

「ありがとうおおおうああああおおおおお!!!」

「ちよ、抱きつくなくて！20近くの男同士が抱きつくなんて誰トクだよー！」

まったく驚かされた。普段はあんな冷静な雰囲気をかもしだしているのにも関わらず。いざこうなって見れば、泣きじゃくって感謝してくる。少しは可愛げのあるやつだな。

「はあ〜。」

ため息をつくも、そのため息がマイナスのものでないことは確か

だった。この瞬間、二人のあいだの心の壁が崩れ去ったということはいうまでもないだろう。

「ほら行くぞ！もう強くなるって言っちゃまたんだ。さつきと行くこうぜ。」

真弓は数回鼻をすすると、起き上がりこちらに頭を下げてる。

「すまん。感傷的になっちゃまって。それと・・・ああー、ありがとな。」

こころなしか言葉遣いのさつきよりもフランクになった気がした。この方が話しやすく助かるな。とそんなことを考えながら、俺たちは二人で紫の裂け目をくぐった。

空間を抜けるとそこは森だった。新緑があたりに広がっており葉と葉の間からチラチラと陽光が見え隠れしている。

「おい。こころはどこなんだ？」

そう紫に聞いてみると。紫は

「この先に神社があるの。そこに行けば何で連れてきたかわかるわよ。あと、これから先は静かにしてちょうだい。あの子は色々と敏感だから。」

「敏感？よくわからんが黙ってついてけばいいんだな？」

紫はコクリと静かにうなずくと、森の中を先陣を切つてあるき出

す。道なき道を数分間歩いていくと何やら建物らしきものが見えてきた。木々の隙間から目を凝らして見てみるとその建物の柱が朱色に塗られている事がわかった。

「あれが神社か。」

大きさとしては余り大きく無いようだが、朱色に塗られているということはきちんとした神社なのだろう。考えることも無くなったのでなんとなく真弓の方を振り返ろうとして、神社が目線から離れた瞬間だった。

ズドーンと地面が揺れた。今まで感じたことのない揺れだった。まるで地面がまるごとスッポ抜けてしまったかのようなだった。地震とは全く違う余震もなにもない突然の揺れだった。

「つなんだよこれ、どうなってんだ!？」

慌てて聞き返すと、紫は真剣な瞳でこちらを射抜きピンと伸ばした指を唇にあて、「静かにしろ」と訴えてくる。紫はこれを想定してたのか？

こんなことを考えている間もミサイル攻撃のような地揺れは続いており、その揺れはけして軽くない俺の体を上下に持ち上げたり叩きつけたりしている。しかし、そんなことを気にもとめずに紫は歩いていく。

そうして視界は開かれた。

その先に広がっていたのは・圧倒的な質量と光量に満たされている景色であった。

いくつもの閃光玉や閃光が行き交っておりまるで昼なのに花火大会に来ているようだ。その光景は規模は違えど昨日の紫の閃光玉を連想させる。

ふと、視界を埋め尽くしている閃光玉の隙間から2人の少女の姿が見えた。この状況から見て二人は戦っているのか？

理解できない混乱を抱えつつも俺はその景色に見惚れる。
そのままその光景に見入っていると横から脇腹をつつかれた。

「ちよつとブーツとしてないで聞きなさいよ」

どうやら紫から話しかけられていたらしい。

「すまんすまん。」

軽く会釈して謝ると、紫は話し出した。

「まずこの世界のことを教えるに当たって、あなた達の住んでいる現代と切り離して考えてちよつだい。幻想郷にはあなた達みたいな人間の他に人ならざるもの、妖怪が存在する…」

「はっちよつと待てよ……。妖怪？ いやでもケモミミがいたからそりゃそうか……。」

「わかってもらえたのは嬉しいけど、いちいち突っ込まれると話が進まないから黙ってて頂戴。」

「すんません。」

「で続けるけど、あなた達が水道がなんとかかんとか言ってたけれど、そもそもそんなものはこの世界には無いの。ここは現世で幻想となったものが流れついて来る場所。それならここに妖怪がいるってこともわかるでしょ。」

「なるほど。今妖怪って現世じゃ物語の中の話だもんな。」

「ちよつと待ってくれ。紫お前まだこの話した時家にいなかったら？」

「隙間でこっそり覗いてたのよ。藍は気づいてたけどね。」

こいつ怖つ。ストーカーみたいじゃん。と口からでかけたが、なにかされても嫌なので黙っていることにした。

真弓が納得した表情でうなづく。

「ここで問題ができたの。人間と妖怪じゃ力の差がありすぎるのよ。だから私は、人間と妖怪が対等に戦えるスペルカードルールを作った。」

「ちよつと待ってくれ。また話を止めちまって悪いけど、私は作ってたってどゆこと？」

「あら言っでなかったかしら？この世界を作ったのって私よ。」

「…は？」

「じゃあこの幻想郷が作られたのはここ数十年なのか？」

驚きで声がでない俺の代わりに真弓が冷静に質問する。たしかに紫の見た目は見た感じ20ぐらいであろう。つまり彼女が生まれてからこの世界を作られたのは最長でも20年ぐらいだろう。

「あつこれも言っでなかったわね。私って妖怪よ。」

「は？」

今度は真弓もそろった。

「まあ細かく数えてないからわからないけど、だいたい5000歳ぐらいかしらっ。」

「まじかよ。ってことはお前って結構BBA……。」

俺が言い終わる前に叱咤の言葉と鉄拳がほぼ同時に飛んでくる。どうやら触れてはいけない琴線だったようだ。

「本当に話が進まないんだけれど。」

紫がこちらを睨みながら言ってきたので、頭にできたたんこぶをさすりながら話を先に進めるように促す。

「はあく。何かあなた達といると疲れるわ。えーと、そう。今日の前で行われてるのがそのスペルカードバトルってわけ。ルールとしては、まず大原則として相手を殺してはいけない。それ以外は意外と自由で弾幕を撃ち合いながら相手を負かせばいいわ。しかし、このルールには醍醐味があるのよ。それはルールの名前にある通り、スペルカードよ！」

もしこれが漫画だったら背後に集中線を書いて、バーンとでっかく効果音がかいてありそうなくらいの決め顔である。まあそれは置いて、確かに森に木霊する激しい爆裂音の合間からスペルカードと叫ぶ声が聞こえる。

「スペルカード「封魔陣」！」

片方の少女がそう唱えると、無数の弾幕が虚空から現れ、もうひとりをめがけて放たれる。

「必殺技みたいなもんか。」

「そうね。いわゆるスペルカードはそれを持つ人のアイデンティティみたいなもの。同じものは存在しない唯一無二の技なの。」

「なるほどなあ。つまり今日お前がここに連れてきたのはこの戦いを実際にみて教えるためだったってわけだ。そして強くなるためこれができるようにならなければならぬわけだ。」

真弓がわかりやすく整理してくれるも、なにか一つ引つかかる。あれ？これ俺たち習得すんの？え？無理じゃね？だって俺たちただの一般人だぜ。

「ま、まさか、ねえ。そんなわけ無いですよ？紫さま？」

「何言ってるの？習得しなきゃだめに決まってるじゃない。」

はい。詰みです。

「ここでは現世とは切り離して考えろって言われたろ。きつとなんとかなるんだよ。」

「流石に楽観的すぎるだろ！」

こいつこんな大雑把なやつだったか？と思わずツツコミたくなる。冷静な時と今みたいなきの落差が激しすぎる。

「まあくよくよしていても何も始まらないってことよ。くよくよしてらるぐらいだったら、物事をプラスにかんがえろって事だ。」

初めて年齢の差がでたかもしれない。流石は人生の先輩だ。もっ

ともなことを言っている。

「今日はここまでにしましょ。じゃあ戻るわよ。」

と紫が裂け目を開こうとしたとき一際大きい声が響く。

「スペルカード「夢想封印」！」

今までで一番大きい揺れが俺たちを襲う。あたりに砂ぼこりが舞い、視界がクリーム色に染まる。

戦いの決着がついたのだろうか？少しづつ煙がよけていき視界が再びクリアになる。見てみると、赤色の巫女らしきものが、あれなんと言うんだっけ？えくと。そうだ幣を黄色髪の魔女らしき人物につきつけている。和洋折衷だなと思いつつも、あんな少女達がこんな戦いをしてたのかと驚く気持ちの方が大きかった。

さて、そろそろ帰ろうかと、その少女から目をそらそうとしたときであった。こちらのことが見えないはずの巫女がこう言い放ったのだ。

「そこにいるのはわかってるのよ、紫。さっさと出てきなさい。」

そのままこちらに歩いてくる。

あれこれってまずくね？バレちゃ行けないんじゃないかなかったっけ？紫の方を見てみると額に手を当て呆れているのがわかる。そして紫はそのまま

「バレちゃったかしら？」

といつもどおりの口調で返事をし、俺達の前を通り過ぎていく。フ

ワリとしたドレスで俺たちを隠すように立つと、何故か、紫の指が俺たちの額にふれる。その瞬間紫は何かをゴニョゴニョと唱えた気がした。が紫は何一つ表情を変えずにただその少女を待っている。

少女はもうすぐそこにまで迫っている。しかし俺はそこから動くことができなかった。少女が紫の真ん前にくる。もうバレてしまっただろう。しかし、その少女は一向に俺たちについて触れない。

は？と唾然としてみると、紫の後ろにまわした手が、裂け目をさしている事に気づいた。どういう原理だかわからないが、少女には俺たちが見えてないらしい。すぐに立ち上がると、隣で座っている真弓の手を引き、裂け目に駆け込む。裂け目が閉じる瞬間、

「今誰か後ろにいなかった？」

「まさか、そんなわけないじゃない。」

というやり取りがあつたのには流石にヒヤヒヤした。

九話 取っ組み合いのその先に

「いま後ろに誰かいなかった？」

「そんなわけないじゃない。見間違えてしょ？」

「そうだと思いたいわね。紫は秘密が多いから。」

紫は表情には出さずとも、内心とても焦っていた。相変わらず霊夢の勘は鋭い。何とか二人を透明化させ逃げさせることはできたが、バレないかとヒヤヒヤしていた。

「それにしても霊夢また腕を上げたみたいね。」

「そう？ずっと家でダラダラしてるだけだったけど。まあ私の才能がすごいってことね。」

満足げに、まだ大きくない胸をはりながら顔をほころばせている。いくら博麗の巫女で、強くても中身は少女だ。この子を騙すことになるのは心苦しいがこれも私の愛してやまない幻想郷のため。

最近幻想郷はこれと言って大きな危機は無い。先代の巫女るときはまだ多少ガチの反乱など気持ち引き締まることは起きていた。しかし、霊夢になってからは異変こそあるものの平和ボケが進んでいる。ここで問題が生じる。幻想郷のときが進むたびに現代のときも並行して進んでいるということだ。現代で時が経てばたつほど多くものが幻想と化し幻想郷へと流れ込んでくる。

文明の利器がここに流れ着くのも時間の問題だろう。そうなったら今の幻想郷のバランスは絶対に崩れる。ここを守るためにもあいつ達が必要なのだ。

「私は様子を見に來ただけだから、そろそろ博麗結界の調整に行つて

くるわね。」

「私もそこで伸びてる魔理沙を介護しなきゃいけないから戻るわ。まあほつといてもいいんだけど。」

そう魔理沙を案じる言葉を告げると、くるりところらに背を向け離れていく。私も裂け目を開くと、再び八雲亭に戻る。

「あいつらマジで許さん。」

可愛らしい顔を憤怒に染めながら紫は裂け目の中を歩いていった。

「アブねえ。」

紫に指示され裂け目に入った後、俺たちは自分たちが寝かされていた部屋へと戻ってきていた。

「紫何したのかよくわからないけど何かスゲエな。」

「それにしてもあんなことできるのかよ。」

俺が独り言のように言うと、真弓は

「できるかできないかじゃない、やらなきゃいけないんだ！」

「おい、それ聞いたことあるぞ。色々と危ないからやめとけ。」

「まあ、コツ教われればできるようになるんじゃないやね。」

「盛大に無視すんな！」

でも現状自主練もクソもない状況である。紫が帰ってくるのを待つ他ない。あそこでバレていたら紫を苦しめることができたかもしれないと、心のなかで考えていると目の前の空間が裂けた。

「おっ紫、おかえ」

「何しとんじやボケー!!」

顔面に振り下ろされる拳をギリギリで首を捻り避ける。そのまま後ろに転がったが、紫はグルグルとまるで肉食動物みたいになり続けている。

「話なげえんだよ！ボケナスども！」

今度は反対を向くと真弓に掴みかかる。

「ちよつと俺は無関係だって。だって前回俺視点じゃなくて社だっただろ！」

「メタい話すんなあ！」

完璧なアウトなメタい話をした真弓に俺も飛びかかる。結果的に二人で真弓をボコボコにするという事になってしまった。

「まだ、痛てえよ。完璧に首のすじをひねったわ。」

俺と紫は正座をして並んでいる。なんでこんなことになったのかというと、目の前のケモミミが原因だ。

二人で真弓をボコボコにした俺たちは、ふと冷静になると、障子は突き破るし、布団はぐちゃぐちゃ。テーブルの上の水はこぼれ、畳にシミを作っているという悲惨なことになっているのに気づいた。

そのとき、

「あゝなくた達、なあゝにをしてるのかなあ？」

目をギラギラと赤に光らせ、憤怒に燃える狐が背後にいた。今度は味噌汁のしたたるおたまがカターンと音を立て直撃する。しかも殴られたのは俺だけだ。

「おら、さっさと正座して並びやがれ！」

「申し訳(づ)い」

謝罪の言葉を言おうとするも、

「黙(も)ってろー！」

と遮られてしまった。いくらなんでも性格変わりすぎだろ。

「まず言いたいことがある。さつき私は汚くなったこの部屋を一回掃除したの。それをなに、帰(か)ってきた途端(と)ボタンボタン暴(あ)れやがって。しかも紫様も。ここを掃除するのは誰ですか？私(わ)だろー！」

「二大(に)変(へ)つ申し訳(づ)ご(ご)いませんでしたあゝ。」

「紫(むら)さまだけ何も無いなんて思(おも)わないことですね。私は紫(むら)さまの式(し)神(かみ)なので直接(じ)接(せ)危害(がい)を加(く)えることはありませんが……、今晚(こん)の夕食(じ)食(じ)を抜(ぬ)き

にすることぐらいだったらできるんですよ?。」

藍が悪い笑みをニヤッと浮かべる。

「ちよっそれだけは勘弁して!。」

紫は慌てて許しを請うたが、藍は無情にも

「さっお二人様行きましょう。」

と告げるのだった。

「じゃ、そゆことで。」

真弓は勝ち誇った笑みを紫に向け藍についていく。

「なんか……どんまい。」

このセリフあいつにも言ったなと思いつつ立ち上がって二人を追ってあるき出す。

「もう知らないもん!。」

そんな小1みたいな捨てセリフを残して紫は隙間の中に消えていった。

3人でご飯がおいてある机までくると、藍はまだよそっっていない味噌汁と白米を三人分よそるところこちらにさし出してきた。

「「いただきます。」」

3人の声が同時に静寂を破り、各々が食べたいものを食べていく。メニューは鮭の塩焼きに、ほうれん草の胡麻和え。真っ赤なトマトに、大根の味噌汁、白米とシンプルなものであった。

こんな栄養バランスの整った食事なんていつぶりだろう？ほうれん草の胡麻和えを試しに口に入れてみる、瞬間からだ中に電撃が走った。

「なんじゃこりゃああ!!」

見た目はただの料理なのだが、口に入れた途端わかる。こいつプロだ。素材の味を最大限引き出し、それに加えてごまに入っている砂糖の割合も完璧だ。ほかのものにも箸を伸ばしてみると、どれも美味しくて夢中で食べる。不意にこちらを不思議に見つめているのにきづいた。冷たいしずくが頬を伝うのがわかる。

あれ？俺なんで泣いてんだ？

そのしずくはどんどん増えていき、まるで堤防が決壊してしまったかのように溢れ出してくる。

身体から水分はどんどん出ていつているはずなのに乾いた心が満たされていく。不思議な感覚だ。

「うう。」

こんなところでは泣いてはいけないのに、拭っても拭っても涙は止まらない。背中を吹き抜けていく薄ら寒い秋風がその涙を止めさせない。それでも口をへの字に結び、心のこもった料理を口の中にかき込む。そしてカツと器を置き、泣いているのに満面の笑みで言った。

「おかわり。」

俺は社が食事中に泣いているのを見て、なんだか話しかけてはいけないような感じがして黙っていた。その様子は、まるで足りない何かを夢中で取り込んでいるような様子だったが本人は泣きながらも幸せそうな顔をしているので、何を思っているのかわからない。

「おかわり。」

まだ食べるのか。泣いたり笑ったり食べたり忙しいやつだ。

その社言葉を聞くと藍はさっきまで結んでいた口を緩めニコリと笑いながら言った。

「はい。」

それを聞くと社は再び鼻をすすり出す。それでも社は食べるのをやめずに米の一粒一粒まで味わって食べていた。

「落ち着いたか？」

夕飯を食べ終わって少し経つと俺は社に聞いた。

「ああ。みつともないとこ見せてすまん。それと藍さんにも申し訳ありません。せっかく料理作ってくれたのに泣いてしまつて。」

「作っている方も今のあなたみたいな食べ方をされる方が本望です。ひと目見ただけで美味しいと思ってくれてるってわかりますから。常に満たされている人は今それを持っていない人よりも気づきづら

いんです。今自分が持っている幸せに。」

そこまで一息で言う和一呼吸置いて藍は続けた。

「はあく。すみませんね。紫さまの我儘に付き合わせてしまつて。」

紫の我儘ぶりには藍も手を焼いているらしい。

「あれでもやる時にはやるんですよ。何百年もそばにいますからわかります。でもねえ、欠点というかそれが良いところなんですけど、ちよつと頑固で子供っぽい時と冷静でカッコいい時の落差が凄すぎなんですよね。」

それはまだ会つて2日の俺にもわかる。幻想郷創設者としてもすごい圧を感じる時があれば、なんだかへにやけている時もある。

「確かに。」

「私つて式神の中でも悪行罰示神という種類なんですよ。いわゆる紫さまに調服されたつてことなんです。その時の紫さまの強いものつて。でも紫さまの世話を手伝うようになって、とつても優しい方つてことを知りました。なのでこれから色々あると思いますが、紫さまと仲良くしてあげてください。あの人ああ見えて気軽に話せる人があまりいないんですよ。」

「そんなことだと思つてたよ。だつて最初から器が3つしか無いんだもん。どんな難癖つけてでも今夜紫に飯食わせる気なかつただろう。」

「バレちゃつてましたか。こんなこと本人の目の前では小つ恥ずかしくて話せませんから。」

「まあよくわかんないけど、頑張ればいいってことだろ。」

立ち直った社はまぬけた返事をするが、まあ本当に頑張るしか無いからな。

「じゃあ俺今から外の井戸で汚れた頭を洗ってくるわ。」

「お風呂に入って入ってもいいですよ？」

「いや、今からわざわざ沸かしてもらうのは申し訳ないから。じゃ、ちよつくら行ってくるわ。」

そう言葉を残して社はめんどくさそうにモタモタと足を引きずりながら出ていく。そこまで面倒くさいなら風呂に入ればいいじゃないかと言いたいが、彼には彼のポリシーって物があるのだろう。

そんな事を考えながらも、残った俺たちはプシュツと音を立て酒を酌み交わすのであった。

「うう。さみいよ。」

もう秋のいりだ。乾いた風が社の黒髪と服をゆらゆらと揺らす。こんな時期の夜に水浴びだなんて支したくもないが、結局自分のせいで起こした事態だ。贅沢は言ってられない。

昨日来た井戸まで来ると水をすくう桶があるはずなのだが、

「あれ？おけないやん。昨日の紫のやつで吹き飛ばされちゃったのか？」

しかし庭のどこを見ても桶は見当たらない。

「まさか外か？」

この井戸は屋敷の敷地の際にあり、真隣は草むらでその先には何が広がっているのかはいざ知らずだ。でも、あるとしたらそこにしか無い。少し身を乗り出して草むらを見回してみると、少し置くの方に木製の何かが見えた。

「よかった。このままだったらこの状態で寝ることになっていたかもしれない。」

腰ぐらいの高さの塀を乗り越えると、それめがけて足場の悪い草むらを歩く。そしてその木製のものに手を伸ばし足を踏みしめた時。不意に前足の足場がズズズと音を立てて崩れ落ちる。前足に全体重を乗せていた俺は重力に逆らえるはずもなく、ゴロゴロと下に落ちていった。

土の上のうちつけられ仰向けに倒れる。そして一緒に落ちてきた木製のものが顔面にバチーンと直撃する。それを見てみれば、
「この先崖なので注意。落ちたら妖怪に食べられちゃうかも。」

「……………助けてくれえ！ていうかもつと目立つところに置いとけよお！」

まあ崖に落ちただけなら何とかなるが、その後ろが気になる。かわいイフオントで書かれており、書いた本人は冗談のつもりで書いたのだろうか、

「冗談にならねえよお!!!」

ただの人間がこんなところで独りぼっち。妖怪の生態はよく知らないが、何かたべられそうだな。

「クソツ！桶がないってところからフラグは立っていたのに何で気づかなかったんだ！」

叫びちらしていると、ガサツ背後で草を踏む音が聞こえた。ビクツと肩を震わせ恐る恐る後ろを振り向くと、

「あなたは食べていい人間？」

はい。死にまゝす。

十話 食べてはいけない人間

「あなたは食べていい人間？」

「ダメよくダメダメ！」

おいおい看板どうりのやつが出てきたぞ。いかにもって感じた。その容姿といえば夜の真つ暗な闇と対象的なキラキラと光る金髪に黒いワンピース。そして、赤いリボン？を頭に携えている。正直言つて拍子抜けしたが、俺はこの世界は見た目に騙されてはいけないということを紫から学んだ。

「ほらあつちに行けばもつと美味しいお肉があるぞお。」

「食べていいのさ？」

おいおい会話が成立してないぞ？

「いいのさ？」

「いや俺まだ何も言つて」

「そうなのさ。ありがとうなのさ。」

ちよつとお話が勝手に進んでませんか？ていうかまずい方に進んでませんか？

「い、一回話を聞こうか。」

もう一回会話を試みようとした時、俺は彼女の目がギラリと見開かれたの見逃さなかった。もう会話するのは無理だろう、と直感で感じ

る。だって見開かれた彼女の目は人殺しそのものの目をしていたから。

「いただきますなのだ。」

その言葉と同時にその少女は足を一步前に進ませる。その速さは人間のものではなく、あきらかに常軌を逸つた速度であったことから彼女が妖怪であることを再確認する。

少女は拳をこちらの腹部に伸ばし貫いてこようとするが、

「こんなところで死んだらあいつらに一生笑われ者にされるからな。」

体を一步引き、その拳を自分の右前にいなす。少女の動きは単調。何とかその速度に反応し、いなすことができた。彼女は地面をゴロゴロと転がり近くの木へと衝突する。あれで気絶してくれたらいいのだが……。

「おにーさん強いのだ。」

ですよねー。まあ妖怪って言うからには人間より体も丈夫なんだろう。

「切り替えろ。」

自分に言い聞かせ、立ち上がる少女を見据え、考える。俺が生き残るために最善な方法は……

「逃げるんだよ。」

体をその場で反転させ、走り始める。結局コレだ。今、無理に戦つても妖怪相手じゃ勝ち目がないだろう。今はもてる自分の身体能力

をもって逃げるのが得策だ。

自分が草を踏みしめる音と、風を切る音のみが聞こえる。夜の明かりのせいで新緑が深緑に染まり、まるで中学校の一人下校の時のような孤独感を覚えるが、そんなことを考えている暇はない。今は後ろで振るわれている、暴力と呼べるのかも怪しい攻撃をなんとしても回避しなくてはならない。彼女が足を払ってこようとすることの確認し、上へと飛ぶ。

足元の土が振動とともに爆ぜ、後ろを振り返ってみると、その地面だけがえぐれていた。

「ちよつと手加減してくれないかなあー。」

頬を伝う冷汗を拭いながら言ってみるも、少女は無反応で次の一手をこうじてくる。彼女は持てる限りの脚力をもつてこちらへと飛びかかってくた。とつさに横に飛ぶが、右腕を何かに掴まれる感触を感じる。見てみるとそれは少女の手だった。そのまま口をあぐりと開け、

「いただきますのどく。」

と俺の腕にかぶりつこうとしてくる。今噛みつかれたら右腕がまったく使い物にならなくなるという革新があった。

俺の脊髄反射は持てる限りのスピードで仕事を行い、右腕を前に向かってボール投げの要領で振り抜く。遠心力で彼女は手を離し飛んでいくが、右腕を何かにえぐられる感覚を覚える。視線を右腕に向けると、彼女の歯にえぐられたと思われる見るからに痛々しい傷があった。そこからはどす黒い血がチロチロと流れ出ている。血の色を見て、傷ついたのでが静脈であることを確認しホッとすることも、もう次の攻撃が迫っている。

「後でアドレナリンに感謝しないとな。」

幸いアドレナリンの痛み止めの効果で、右腕の痛みは感じない。抱きついてくる彼女の両腕を掴むと、自分はしゃがみ、後ろに向かって投げ捨てる。すると少女は自分の上を通って転がっていく。

それにしても夜の森つてのは暗いもんだ。一寸先は闇、まさにこの言葉がこの状態を表すのに一番適しているだろう。

「おにーさん、本当にニンゲンなのかー?」

「そうだよ。ただ人一倍危険な思いをしてきたんだ。」

「そうなのかー。でもオニーサンもここで終わりみたいなのだー。」

「うーん。それはどうかな。」

「でも周り見てみるのだー。」

あたりを見回してみるもさつきと変わったところは無く、あたりにただ自分が立っている地面と2、3本の木そして闇が見えるだけだ。
…ん?」

「最初からこんな暗かったっけか?」

森に入った時は見えていた景色が見えなくなっている。時間の経過のせいだと思っていたが、よく考えてみれば夜が更けたところで月明かりがあることには変わらない。ならなぜ、視界が狭まっているのか?

「そっか、オニーサンには見えないのかー。」

「どういうことだ?」

「オニーサンの周りには私の闇が立ち込めてるのだ。チョット待ってなのだー。」

その言葉通り、数秒間待っていると、不意に視界を遮っている闇が朝の霧みたいにはれていく。そのはれた視界に写っていたのは、3方を高い崖に覆われた逃げ場のない絶望的な光景であった。

「は?」

色々な情報が混み合っていてなかなか整理することができない。何で急に闇が晴れた?その少女がなにかしたのか?ていうかこれ俺詰んでね?

「Please Someone help me!!助けてくれー!」

「ごめんなのだー。美味しくいただくから許してなのだー。」

それじゃなんにも解決になってないわ!内心突っ込むが、でもどうしてもこの場を覆すためのアイデアは浮かんでこない。

こうなったらダメ元で突っ込むか?こんなことを考えている間にも少女は着々とこちらに向かって歩いてきている。

一歩踏み出す。

「うおおおおおおおおお!!」

死にたくない。これ以外の方法がない。でも少しでも可能性があるなら、俺はそれに賭けようと思った。近づいたら死ぬかもしれない

そんな恐怖を抱えながら、俺は突っ込んでいく。

彼女に命を刈り取られる間合いの一步手前だった。

「はあ。お酒なんか飲むんじやありませんでしたね。」

そんな凜とした声音が森に、いや鼓膜に響き渡った。お互いの動きがピタリと止まり静の時間が訪れる。その声の主は……、

「藍。パイセン！」

「パイセンってつけないでください。ていうか、あなたは本当に面倒事に絡まれますね。」

「知らん。望んだわけじゃ無いんだけどな。」

藍は話していたとおり、お酒を飲んでいたのか頬をピンクに染めており腕には一匹の黒い猫を抱いている。

「ルーミア、この方は紫さまの客人です。これ以上傷つけるならば、力でわからせないといけないのですが、どうです?」

「私はニンゲンを食べたいだけなのだー。」

「会話が成り立ちませんか。それは肯定と認めていいんですね。」

その返事もせず、再びこちらに近づいてくる。

「藍オネーサン酔ってるみたいなのだー。」

「そうですね。私はあなたの相手をするのには酔い過ぎました。なの

で、代理に頼みたいと思います。この子が偶然この屋敷にいたので助かりました。」

そう言い終わるとほぼ同時に、藍は叫んだ。

「式神「橙」！」

すると腕に抱かれた黒猫は、藍の腕から飛び出すと空中で、赤い服をきた女の子へと変化した。その女の子は、落ち着いた茶髪にひよこつと可愛い猫耳をはやしている。こいつさては……

「……お前さては化け猫だな！」

「にや、なに！な、なぜ私の正体が」

「いやだって猫の妖怪で知ってるの、化け猫と猫又ぐらいしかいないもん。猫から人に変化するなんて化け猫しかないもんな。」

「ふーん。本当は、あなたを取って食べちゃいたいけど、藍さまがいるからやめとくね。さてルーミアちゃん。妖怪の森に帰ってもらおうか。」

俺との会話を半端無理やり終わらせるとその橙と呼ばれた化け猫の女の子はルーミアに向き合う。

「ルーミアちゃん、妖獣の最大の利点はね圧倒的な身体能力なんだよ。」

そう橙が言い終わった直後であった。フツと姿が消えたのだ。視線だけを動かしてどこに行ったのか探すと彼女はすでにルーミアの目の前におり、一瞬で彼女があそこへ移動しただけであることを俺は悟

る。

しかし、ルーミアもそれに反応しているらしく後ろに飛び下がって攻撃を回避している。

「じゃ、私達は帰りましょう。」

「え？最後までいなくていいんですか？」

「ルーミア相手ならあの子でも十分よ。ルーミアは妖怪の中ではあまり強い方ではないから。」

「あれで!？」

その言葉を最後として俺たちはこっそりその場を後にする。ある程度離れてから、

「仙符、鳳凰卵ほうおうらんー!」

という叫びとともに大きな爆裂音と、震動があったということを経後に付け足しておく。

藍さんと二人で夜の森から八雲亭に帰っていた俺は申し訳なきすぎで、繰り返し謝罪の言葉を半端悲鳴のような感じで伝えていた。

「すみませんでしたあ!」

「だからもういいって言ってるじゃないですか。見えやすい位置に看板置いてなかったこちら側にも負がありますし。」

「でも、藍さんが来てくれなかったら死んでるところでしたあ！手当もしてもらっちゃったし。」

「お礼ならあの子に言ってあげてください。実際助けたの私じゃないですし、そのほうがあの子も喜びますよ。」

「確かにそうかも。わかりました。」

承諾の返事をする、内心気になっていたことがあるのを思い出した。

「そういえば、式神って確か、陰陽師の技っていうか術ですよね？で、藍さんは紫の式神であると。つまり、式神の式神がさっきの橙ってことですか？」

「まあ言ってしまうえばそうでしょうけど、あの子は普通の式神と違います。普段は黒猫の姿をしていて化け猫として妖怪の森ってところに住んでいます。でも私があの子に、式神を宿らせることによって一時的に私の式神にしているんです。」

高等テクニクすぎてよくわからないが、とにかくすごいってことだけがわかった。

「そういえば今日紫さま追い出してしまったので言い忘れていますが、紫さまいわく明日から地獄の特訓を開始することですから頑張ってくださいね。」

地獄の特訓……。つまり今日の昼間に見せられたあれをできるようになるための特訓ってことだろうか？

「ここの住人はみんな、あんな化け物みたいなことができるんですか

「？」

「そういうわけでは無いです。人里というところに行けば、戦えない住人なんて山ほどいますし、能力も持っていない人間がほとんどですよ。」

「つまり、あの子達は人間じゃないってことですか？」

「いいえ、違います。あの子は選ばれた人間なんですよ。博麗の巫女。それが彼女に与えられた使命であり、彼女を縛る台座でもある。まああの子もそれを楽しんでいそうなのでいいですけど。」

藍はどこか遠くを見つめているような顔をして、こちらに視線を向けると、

「この話はもう終わりにしましょう。」

その言葉はしばし静寂を招くが、藍はさっきの顔に戻っており

「夜ふかしは明日の修行にさわるでしょう。屋敷にいたらもう寝ちゃって下さい。真弓さんももう寝てらっしゃると思いますので。」

「俺が大変な目にあっている間にあいつはもう寝てるのか。」

俺が一人呟くと、藍は気まずそうに口を開く。

「実は社さんが出てってからお酒を開けたんですけど、真弓さんはあまりお酒に強くないらしくて散々妹の自慢話をして寝てしまいました。」

やっぱいなくて良かったかも。

葉を磨き寢床に入る。白い月明かりが破れた障子から差し込んでくる。隙間からは見えない月を想像し、まだ月のウサギさんは俺のことを蔑んでいるのかと考えてみる。そんな寂しげな青年を寝かしつけるように幻想郷の夜は更けていった。

十一話 地獄の修行

「ふああ。」

軽くあくびをして、横たわっている自分の体を起こす。布団から出ると外は薄ら寒くこの服一枚では足りないという結論を出し、部屋の隅に置いてある澄んだ青色の制服を着る。帽子は室内なので取るとして、腰のホルダーやベストをつけるか迷ったが、つけてしまうと硬い印象をあたえてしまうかもしれない。そのまま置いておくことにした。

「仕事の癖が抜けないな。」

普段警察の仕事はかなり早朝から始まる。どんな時間でも犯罪に對して対処しなければならぬからだ。隣では社が、ぐうすかと軽いイビキをかきながら寝ていたので起こさないようにそつと部屋を出る。

顔を洗いに井戸まで行こうと廊下を一步踏み出すと、ズキツと頭が痛む。昨日の夜の記憶を辿ってみると、酒を飲んでいた事を思い出した。

「二日酔いなんていつぶりだろう。」

あんまりお酒は飲む方ではなく、昨日は何となくその場のノリで飲んでしまったが、もう少し抑えておけばよかったという後悔がふつと湧いてくる。

「はあ。ここだけ見れば一見田舎の旅館って感じなんだけどな。」

ここが幻想郷という未知の場所だということとは未だに信じがたいが、昨日の二人の少女の弾幕ごっこというものを見てしまった以上、

自分の気持ちにこれ以上嘘をつくわけにはいかない。

「はあ。今日大丈夫かな？」

藍が言っていたかんじだと今日から練習が始まるようだが、こんなロボロな状況で大丈夫だろうか？そんな心配を心の隅に抱えながら外に出る。

外は薄いオレンジに染まっているが、反対の空を見てみればまだ月が出ており夜に染まったままである。そんな幻想的な光景のおかげだろうか、二日酔いも少し和らいだ気がする。

「元氣だしてこ。」

その眩きとともに手ですくったキラキラと光を反射する水を頬にぶつけて気合を入れる。そしてもう一杯水をくもうと手を伸ばしたときであった。

「あら、習慣なのかしら？」

と怪しげな声が耳元で囁かれ、ゾクツと体が震え、鼓膜が不快な震動受け取る。思わず反射的に飛び上がり後ろを振り向くとそこにいたのは、

「そんな驚かなくなっちゃっていいじゃない。」

「紫かよ。驚かすなってこんな朝早くに誰も起きてるだなんて思わないだろ。ていうか昨日どうしたんだ？」

この質問をすると紫は不機嫌そうな感じになり、

「神社に泊めてもらったのよ。」

とどろつきらばうた言う。

「あいつ神社にすんでるのか？」

「そうよ。博麗神社っていう神社なんだけどね。なにぶん参拝者が少なくてひもじい思いしてるのよ。」

「ふーん。」

と相槌をつき、手の中でほとんど滴り落ちてしまった水を頬に当てると寒くなってきたのでそそくさと屋敷の中に戻る。帰り際に紫に

「朝ごはん食べたら始めるから。」

と言われたので、自室に戻って本でも読んでおくことにした。

自室に戻ると、さつきは置いていかなかった数冊の古ぼけた本が置いてあった。藍の計らいであろうか？まあここに置いてあるっことは読めってことなんだろう。

「何の本だ？」

思わずそんな声が口からこぼれる。表紙は黄色っ茶けており、背表紙は擦りに擦れて何の文字が書かれているのかわからなくなってしまうている。埋蔵金のありかでも書かれているのではないかと思われる程にその本は古ぼけている。

「こういう本には大抵大事な事が書かれてるんだよな。」

表紙をぺらりとめくって見ると、日焼けしたページのど真ん中に「幻想郷」とだけ書かれており、おそらく幻想郷についての情報が載っ

ているということを察する。そのままページをくり、達筆な文字がつづられており、何やら図解されている。

「こりや読むのに時間がかかりそうだな。」

そうつぶやくと、俺は本の世界へ引き込まれていった。

本の半分ぐらいまで読んでふと顔をあげるともう完璧に日が昇っていることに気づく。陽光が白い障子を通り抜けて部屋内に差し込んでいる。

「そろそろ朝食の時間か。」

美味しそうな匂いが鼻腔を刺激し、口の中でじわりと唾が滲み出してくる。横を向くとまだ社はぐうぐうと静かな寝息を立てていて自分では起きそうもない。話を聞いた感じ社はだいぶブラックな仕事に勤めていたらしい。起きる時間を気にせず、寝るのは久しぶりなのかもしれない。

「でもなあ。起こさなきゃだめなんだよな。」

社にはすまないが、今日から修行って話だった。こいつにそれが伝わっているかはわからないが、朝食に遅れてあのBBAに何されるかわかったもんじゃやない。

「おーい、社。起きなさんな。」

軽く肩を揺すってみるも社は無反応。声をかけても起きてくれそうにない。

「しゃあないから少し実力行使に出させてもらおうとするか。」

俺は腕を振り上げるとパシンつとビンタをかましてやる。すると、

「俺の眠りを邪魔してんじゃねえ！」

と目を半開きにしたままこちらにビンタをしかえしてくる。寝ぼけてるのかわからないが、せつかく起こしてやっているのにこちらに危害を加えてくるとは許しがたい。

「起こしてやったんだから少しぐらい感謝してくれてもいいんじゃないかな？」

そう言つてやると、再びビンタをかます。さつきよりも威力は強く、不意打ちだったら目から星が出るかもしれない。

「はあ？お前加減つてものがあるだろうが！こっちはスヤスヤと夢の中でハッピーな時間を過ごしてたんだよ！ほら見てみる。俺の右頬、絶対真っ赤になってるって！だつて痛つてえもん。ヒリヒリするもん。」

と言いながらも明らかにエグい風圧を感じさせるビンタが俺の右頬に向かってきていた。

「死ねえええ！」

その人を殺しかねないビンタは俺の頬に…、当たらなかつた。俺は寸前で顔のみを後ろに躲し、ふっふっふつと笑ってやる。

「ふっ、バカアめ。君の次の行動は読めているのだよ。君はその短気な性格をどうにかした方がいいんじゃないか？」

そう嘲笑してやると、再び平手を構え全力を社の頬に叩き込んでやろうと腕を精一杯振り上げ、振り抜く。

「お前が死ねええ！」

しかしいつまで立っても手が頬に触れる感覚はない。何故だ？後ろに向いたままの頭を持ち上げ、社に目を合わせると、

「な!？」

社は俺の手が触れる直前に首を持ち上げるようにして俺のビンタをいなしていた。

「あれれ油断しちゃったかなあ？まあしょうがないよね。だってあなた俺より強いって勝手に思ってるんだもんね？、ってことでお前が死ねええええ！」

バチンと俺の頬で衝撃が爆ぜ首のみがふっ飛ばされてしまうほどのビンタが俺を吹き飛ばす。そのままゴロゴロと柔らかい畳の上を転がっていき、あまりの痛みに悶絶していると、

「俺の方が一枚上手だったようだな。」

とムカつく口調で俺を煽ってきた。許せん。そのまま社は障子を開けて外に出ていこうとしたが、

「どうやらお前は俺を怒らせちゃったようだなあ。」

社が俺の殺気に気づき振り向くと、

「ほう。まだやる気か？」

「生きて朝食を食べれると思うなよ。」

瞬間お互いの張り手が重なり、いなしいなされ張って張られてのビ
ンタ勝負が始まった。

「うおおおおお」

互いの叫びが重なり、同時に吹き飛ばされ、立ち上がる。こんなこ
とを10分ぐらい続けた頃であろうか？

「いいかげんにしろおおー」

と藍におたまで殴られた俺たちは、二人仲良く畳の上に倒れるので
あった。

「ほらさっさと食べなさいー」

畳に倒れた俺たちは、そのまま藍に引きづられながら食卓まで連れ
て来られていた。男二人を一人で引きずっていくあたり、藍も妖怪で
あるんだなあ、のんきに考えているも頬からはジンジンと痛みが伝

わかって来ており、赤々と腫れてしまっている。

「は〜い。」

力なく返事をしてホカホカの美味しそうなご飯を口の中に入れるも、昨日のような感動を得られることはなく口の中からにじみ出る血の味が邪魔をしてしまっている。

社の方を見てみると、同じく頬を真っ赤に腫らしており死んだような顔をしたままだ食事の口に運んでいる。

「ごめんな…。何か大人気なかったわ。」

鉄の味のするご飯を無理やり飲み込むとそう社に謝る。

「いや、俺が原因だし。すまん。」

よかった。とりあえず仲直りをする事ができたらしい。でも残ったご飯を食べないと紫との修行に遅れてしまう。

「社…。味覚を封じるんだ…。」

俺たちは二人とも心を無にして残ったご飯を胃の中に叩きこむ。ああ、始まる前からこんなんでいいのだろうか？という不安が生じるも、ここまで一緒にはしゃいだ相手はいつぶりだろう。という疑問に押しつけられどこかへ飛んでいってしまう。

媚を売って、社会の闇に揉まれて誰かに裏切られ、俺も社と同じくらい心の奥底で人間不信になっていたのかもしれない。あいつとは性格は違えど、案外相性がいいのかも、と心のどこかで思う。

そんな思考の海を突き破ってきたのは、

「さあ地獄の修行の始まりよ（ゝoゝ）。」

と満面の笑みで俺たちを修行へと向かわせる紫の声であった。

「はい！ということまで紫先生の授業を始めていききたいと思います！まず、弾幕を打てるようになりましょう。」

「先生！出し方がわかりません！」

「それを今から話そうとしてたの！だまらっしゃい！」

「すみません。」

「えっと、まず生き物には主に霊力、魔力、妖力が宿っているの。人間は霊力、魔力。妖怪は妖力。を宿している、そして私だとよくわからないけどあんた達はどうせ霊力しか持ってないはず。パチュリーに聞けば一発なんだけどねえ。生憎あんた達を外に出すわけにはいかないのよ。」

「パチュリー？誰だそれ。」

「あら、いらぬおしゃべりが過ぎたわね。今のあなた達には関係のないことだから気にしないで頂戴。で、弾幕はその体に宿ってる霊力を使ってうちます。ここまでわかりましたか？」

「はい。」

「で、霊力を弾幕にするためにはまず、霊力を外に具現化してその後

形を作る。」

「先生！どうやって具現化したらいんですか？」

「何となくだ！」

「先生！それは流石に適當すぎじゃ無いですか？」

「だまりなさい！本当だからしやあないでしょ！ええとねえ。何となく体から沸き立つ感じ？っていえばいいのかな？現代で言う……ちゅうにびよう？ってやつかしら。」

「先生それって本当なんですか？」

「Yes, I do.」

「じゃあ俺得意だわ。俺元中二病だし。」

「それ平然と言つてのけることじゃなくね？どちらかと言えば黒歴史の方に入るんじゃない？」

自分の黒歴史を平然と公言した社に驚きつつもツツコミを入れる。

「チツチツチツ。違うのだよ。この世界では中二病が正義なのだよ。」

なるほど、彼の言っていることは表現は違えど現実に囚われていては駄目ってことを言いたいのかもしれない。流石に考えすぎか？

「じゃあやってみますか。」

俺はのっそりと立ち上がり精神統一をしてみる。顔が腫れてしまっているのでぴっしりと決まらないけれど何となく分かる。体が沸き立つ感じ、全身に鳥肌が立つ感じ。

「そうそう。ちよつと出てるわよ。学習効率が良くて助かるわ。」

何か掴んだ気がする。何だろう？アドレナリンを無理やり引き出す感じだ。

「慣れればそんな力まないでもできるようになるわよ。」

その言葉を皮切りに俺は全身の力を抜く。まるで、ストローでエネルギーを吸われてしまった感覚だ。力が入りにくい。

「じゃあ、社。次やってみてや。」

「ああ。いくぞ！うおおおおおおおおおおおおおおお
!!!」

目が見開き、全身の隅々まで神経を研ぎ澄ましているのがこちらにも伝わってくる。これはかなりの量がでてるんじゃないか？

「はあああああああああああああ！」

そう叫んだ瞬間だった。バツタリと社が仰向けに倒れる。なんだ？こいつ力みすぎて頭の血管プチツとイッちやったか？

「うっげ。」

はあ？紫のほうから嫌なうめきが聞こえてきた。

「そいつ、やりやがった……。」

「はあ?」

「こいつ……自分の体の霊力全部一気に放出しやがった。」

「なんだって!？」

まるで絵に描いたような反応をしてしまったが……、こいつ何やってるの? バカなの?

「もうこいつ動けなさそうだな。」

倒れた社を見ていると白目を向いて失神している。まるで地上にうちあげられた深海魚みたいな印象を持ったが、それも一瞬のことで紫が地面に裂け目を開きそのまま丸太のように体勢を崩さず垂直落下していった。

「とりあえずあなただけでも続きをしましょうか。」

続き? まさか今日で弾幕を打つところまで進むっていうのか?

「ちよ、ちよつとそれは早くないか?」

「だって地獄の特訓って言ったじゃない。」

「まじかよ……。」

弾幕とやらを早く打てるようになることに越したことはないが、何だか精神的にまいるものがある。ただでさえ、あれをやるだけで疲れるとついうのに。

「で、どうしたらいいんだ？」

「まず、さっきみたい灵力を外に出してから、それを頭の中でどんな形にするか頭の中で想像するの。できるだけ具体的にね。」

「なるほど？まあ想像って結局やってみんとわからんから一回やってみるわ。」

再び全身を集中させて灵力を体内から体外に放出させる。一回目ではかなりあやふやな感覚だったが、二度目の今回は確かに自分の体から灵力がにじみ出ているのを感じることができた。想像。どんな形を想像したらいいんだ？

数秒間考えていると、ふと頭の中で弓矢が連想された。何故弓矢なのか？そう思う間もなく鈍く光る鋭利な矢じりが本能的に頭に浮んでくる。

そのときだった。自分の手のひらから1メートルくらいの青く輝く矢が射出された。その矢は青い輝きを放ちながら真っ直ぐと空間を突き進んでいき庭の石に当たって爆散した。

「やった！」

そう叫ぶも足には力が入らない。ガクツと膝から崩れ落ちドサツと音を立てて砂利の上に倒れ込む。薄れゆく意識の中で、起きたら絶対あいつに自慢してやる。と顔をほころばせながら目を閉じた。

十二話 紅霧異変・壱

霊夢はいつもどおりまっさらな布団から起き上がると、いつもどおり井戸の水で顔を洗う。冷たい水に背筋を震わせながらもタオルで顔を拭き、まだ閉じようとするまぶたを無理やりこじ開け意識を覚醒させる。

「はあく。掃除やりたくないよお。」

普段内に秘めている愚痴が口からこぼれ出て、群青色の空へと消えていく。博麗の巫女として妖怪退治をするのはいいが、こういう雑務は私には向いていない。だって面倒くさがりやだからだ。こんな人の来ない神社いくら掃除したって無駄だろうに。

「とほほ..。」

普段妖怪から人を守ってあげてるんだから少しぐらいいい生活しても良くない？と疑問を提すも今の貧しい生活は変わらない。

母屋に立てかけてある竹ぼうきを手に取り境内の掃除を始める。なんでこんなに落ち葉が落ちてるのかなあ。原因としては昨日の弾幕ごっこのせいであろう。結局自己責任だ。

「何か楽に儲かる仕事ないかしら？」

この薄汚い考えは今ままで何万回口に出したかわからない。でもそれはしょうがないと自分では思う。だって働くあてを探したところで人里では下っ端として働かされるだけだし、魔理沙とかに頼んでも魔法の実験台とかろくな仕事を持ってこないだろう。

「上から命令されるのは性に合わないのよねえ。」

そう、これが働けない1番の理由。人に命令されたくない。だって上から目線で物を言われるとムカつくんだもん。だから結局私は貧乏巫女として働くしかないのだ。

「ていうかあのBBA自分の布団片付けてないで出てきやがった。こっちからしたらいい迷惑だつづうのに。」

またいつもみたいに藍と喧嘩したのだろうか？

一回思考を切り離し、足下の落ち葉に視線を向ける。赤、茶、黄色と境内の中で自己主張をしていた落ち葉は一箇所にとめられ鳥居

の横に小山ができています。

「ああ、やっと終わった。じゃ寒いしさつきと中入っちゃお。」

と竹ぼうきを引き摺りながら踵を返すと、ヒョくと冷たい風がほんのり赤く染まった頬をかすめて吹き抜けていった。

ダメだ振り返ってはいけない。わかっているのに反射的に後ろを振り向いてしまう。そこにはさつきの小山の存在はなく、代わりに色とりどりのカーペットが敷き詰められていた。

「クソが。」

思わず人里の子供みたいな失言をしてしまった。

「もうこんなんやってられっか!」

苛立ちが最高潮に達して破壊衝動に襲われる。とにかくものに当たりたい気分だ。持っていた竹ぼうきを膝で真つ二つに折ろうとした瞬間、

パツと群青色の空がまるで血に染めたような紅色へと変わった。太陽の光が赤い霧に覆われ遮られる。最初は疲れて自分がおかしくなった?、と考えたが自分が大したことをしてないことを一番知っている。基本的にゴロゴロしてばっかだ。

「どうやら、掃き掃除やらなくてすみそうね。」

これは間違いなく異変だ。赤い霧が太陽を遮る、紅霧異変とも呼ぶことにしよう。異変ということは博麗の巫女の出番であつてこの異変を起こした犯人を退治しに行かなくてはならない。

「なんとなくこっちな気がする…。」

私の勘はなぜかよくわからないがよく当たるのだ。思うままの方へと飛び立つとムシムシした空気が全身を逆立たせる。秋ごろ飛んでいると風が涼しくて気持ちいいのだが、今の陽気は最悪だ。

さつきと、退治して終わりにしますか。そう心に決めると飛ぶスピードを更に上げる。

真つ赤な巫女服をまとう博麗の巫女、博麗霊夢の後ろ姿はあつという間に小さくゴマ粒だになり霧の湖の方角へと消えていった。

「ふああ。」

今日もいつもどおり早起きだ、昨日と変わらず布団からのつそりと起き上がると時計に目をやる。カチツカチツと規則正しい音を奏でる振り子時計の針は五時半を指しており外はまだ薄暗い。

「そういうえば社大丈夫かな？」

横を向いてみれば白目を向いていた目は閉じられスースーと寝息を立てながら胸を上下させている。安心して昨日と同じように制服を取りに行こうとそちらに視線を向けると、

「俺の制服がない？」

昨日あったはずの場所に青い警官服はなく代わりに黒の袴に青色の羽織が置いてある。ベルトと帽子だけがその場所でちよこんと寂しそうに置かれており昨日の自分の記憶を辿ってみる。

「そうか俺警官服のまま寝ちゃったから今洗濯してるのか。」

そう自分の中で答えをはじめ出したときであった、あきらかに今の自分と矛盾しているということに気づいた。今俺が着ているのはこの屋敷の浴衣である。

「俺の服装誰が着替えさせたんだ？」

これ俺やったか？慌てて自分のパンツをチラツと覗いてみると、チエツクのものから変わっておらず胸をなでおろした。何とかセーフか……。

「つまりこの服はこれ着て生活しろってことか。」

ていうか社はどうしてるのか？そう思い社の方を向く。すると枕元には黒の袴に白の羽織と捕色でアツピールの激しい和服が置いてあった。まあ、でもあいっらしくていいのかな？

そこまで考えるとグー、と腹の虫が鳴き今まで感じていなかった非常に大きな空腹感を覚える。

「お、俺にな、なにか食い物おを……。」

さすがのように廊下に這い出ると厨房に向かってよろよろと、酔っぱらいみたい歩いていく。

厨房に着くと何やらガチャガチャと調理器具を用意をしている音

が聞こえる。藍か？少し襖を開けて中を除いてみると予想通り藍が料理の準備をしていた。

しかしまだ料理は作り始めていないようだなにやら調理器具を用意している。まずい一刻も早く何かを胃の中に入れていないとこのまま永遠の眠りについてしまうかもしれない。

力の入らない腕をプルプルと震わせながら再び襖の取手に手をかけ厨房の中に入った。

「め、飯をお。」

驚いたように藍はこちらを振り向き駆け寄ってくる。

「どうしたんですか!？」

「お腹が空いて力がでない……。」

どこぞのパンヒーローを連想させる言葉を乾いた口からこぼすと、一刻も早く料理を食べるために

「俺も手伝いますよ。1秒でも早くご飯を食べたいんです。」

しかし、藍は申し訳なさそうに

「じゃあ私が1人でパパッと作っちゃいますから。」

とやんわりとまるで布団の羽毛のように断られる。

「それじゃダメなんですよ!？」

これだけは言える。このままだとヒモ男みたいになってしまうと。ヒモ男ほどカッコ悪いものはない。男子たるもの女の子を助けてあげることが本望ではないか。少なくとも女の子が働いているのに俺は黙って待っているなんて俺はできない。

「これは僕がやんなきゃいけないことなんです。人はやんなきゃって思ったら今やんなきゃいけないんです。今じやなきや間に合わないこともあるから。」

藍は困ったように苦笑いを浮かべていたが、やがてその苦味はピーマンを大人になつて食べたかのように抜けていく。

最終的にニンマリと笑顔を浮かべ、

「わかりました。じゃあ優太さんはピーマンを洗ってきてください。」

まさか本当にピーマンがあったとは。ちよつとした偶然に驚きながらも

「おうー」

とさつきとは正反対の生気に満ち溢れた顔で返事をした。

こっちの生活に少しづつ慣れてきてそれなりに仲間と交友を深めるできた。そんな心地のよい生活をしていく中でこのままこっちで暮らしてもいいんじゃないか、と考える自分がいることに真弓は自分で気づいていなかった。

10分程たつとジュウジュウとごま油の香りが野菜とお肉を包みフライパンの上で踊っている。ゴクリと口内で分泌される生暖かい唾をゴクリと飲み込み喉仏がクイっと上に上がる。それを見た藍は口の端に柔らかい笑みを浮かべうふふ、と声をこころして笑う。

「もう少しでできますからもう座ってていいですよ。」

そう言われて立っているのが限界だった俺は、

「ありがとうございます。」

と短く礼を言い水に浸かってさめざめとした手をさすりながら席に着く。これを体験をするとなんで主婦の人の手がカサカサしているのかわかる。画面の向こうの君もお母さんに感謝しなきゃ駄目だぞ？

するとなにやらソノソノと寝起きのライオンみたいにゆったりとしたコチラに歩いてくる足音が聞こえた。時間を確認すると既に6時位を時計の長針と短針が差しており時間的にも紫が起きてきたのだと思ったのだが、

「お前かい。」

「ああ、眠みいよ。もうちつと寝てくれば良かったわ。」

そこにいたのは以外にも昨日中々起きなかった犬斗であった。その姿は先程枕元に置いてあった羽織と和服ではなく、だるんとだらしなく帯を垂らした寝間着だった。

「お前、部屋戻って着替えてこいよ。枕元に着替え置いてあったろ。」
「マジ？全然気が付かなかった。ちよつくら戻って着替えてくるわ。」

そういうとまだ眠そうな体を引きずって再び俺たちの部屋に戻っていく。しかし、人間の生理行動はそう抑えられるものではない。ご飯早く食いたいという欲求を抑えられず、藍が置いてくれたほかほか

ご飯と野菜炒めを口に放り込む。

突然だった。

「なんだよこれ！」

廊下から声が聞こえてきた。なんだ？せつかくこれから飯を食おうと思つてたのに。

「どうかしたか？」

米と野菜炒めを詰め込んでいる口を片手で抑えながら、かろうじて廊下に届く位の声で聞き返す。

「空が……、空が……、赤くなつちまつてる!!？」

「はあ？」

思わず変な眩きが漏れてしまう。

「んなことあるかよ!?嘘ついてないでさっさと食おうぜ。」

「いや：本当d。」

「白々しいぞ。そんなことしてないでさっさと戻ってこいよ。」

「いやでも……。」

「仮にそうだとしてみとりあえず食つてからにしようぜ。腹が減つては戦はできぬつて言うしな。腹空いて死にそうなんだよ。」

そこまで会話すると、しびしび犬斗は戻つてきてテーブルのうえに着席する。

「言つとくけど嘘はついてないからな。」

「まあまあ、うまいから食えつて。藍さんのご飯やっぱうまいわ。昨日の疲れが取れてないんだな。うんうん。」

そう言つて藍の方を見ようとしたのだが藍はいつの間にか出ていったらしい。

「本当なんだけど……、やっぱうまい。何かどうでも良くなつてきたわ。ていうか話変わるけど俺昨日何があつたん？何かイキつて力込めたところまでしか覚えてないんだけど。」

「そういうばああなた雑魚すぎてあなた霊力を全部放出しちゃつたらしいよ。まあ俺は弾幕打てるようになつたけどな。」

「Why?まじかよお。まあ身体能力はチミ雑魚だから実質プラマイゼロだね。」

「What? Are you stupid?」

「Oh! Fuck you!」

そんなやりとりをして俺たちは机の上の皿を空にしていく。最後の締めに残ったお味噌汁をグイツと飲み干して背もたれに体重を任せた。

「うんめえ。」

腹が空いて極限状態だった後に食べる飯はとにかく美味しい。部活後の夕飯と同じだ。

「できつきなんか言ってたけどなんなん?」

「そうそう何か空が赤くなってたんだよ。お前も見に行ってみ?」

「ふーん。じゃあちよつと見てくるわ。」

そう言つて椅子の背もたれに手をかけ立ち上がった時であった。突然目の前の空間が裂け、艶やかな金髪があらわになる。いきなりだったので止まれず額を思いつきりぶつけてしまった。

「痛っ。」

そう声が漏れ、ぶつかった張本人の方を見るとやはりそれは紫でありさつきのことを意にも返さずこちらを見つめている。

「おい、いきなり出てくんなくて、痛かったんだけど。」

「私は痛くないし。これが人間と妖怪の違いかしらね。」

「うるせえ。悪いのはそっちだろ。」

「私何にも聞こえませーん。」

この態度に無性にイラつくのは俺だけであろうか? しかしいつもみたいに揉め事ばつかしていたら話が進まない。ここは大人らしく返す言葉を飲み込んだ。

ていうか俺よりも圧倒的に長く生きてて子供っぽいついていうのはおかしくないないか?

「で、どうかしたのか? まだ特訓の時間には早いだろ。」

「異変よ。」

「異変?」

そういえば昨日読んだ本に書いてあった気がする。確か度々妖怪かなんかが異変つてのを起こして、それを人間が解決するって書いて

あつた気がする。

「それがどうした？別に俺たちが出る幕ってわけじゃないだろ。博霊の巫女がいるんだし？」

「博霊の巫女？」

あの本を読んでいない犬斗はポカンとしているが、俺にはわかる。博霊の巫女は妖怪退治を主な仕事としており異変の解決は大抵巫女がやっているらしい。

「いいえ。貴方達は経験が足りなすぎる。異変解決の場面を直接見てもらおうと思つて。」

「それつてつまりこれから見に行くつて事？」

「そうよ。今日の修行は無しつてことで。でも正体がバレてはダメなの。貴方達はそういう存在だから。」

「なんかよくわからないけど、その現場に行つたら結局バレちゃうかね？」

「そう、だから気配と姿を隠せる術とでもいうのかしら？それを貴方達にかけるわ。現場に着いたら私はやる必要があるから一緒には居られないけどくれぐれも見つからないようにね。」

「おう。その術つてのはウルト○マンみたいに制限時間見たいの無いんだよな？」

「そこら辺は心配しなくてもいいわ。私つて大妖怪だもの。」

「だつてよ。じゃあさっさと歯磨きしていこうぜ。」

その言葉を合図に俺たちは洗面所へと足を向ける。ギシギシと歩数と比例して床が軋み乾いた音が早朝の静かな廊下に規則正しく響く。顔を洗い終わると再びリビングに戻り、紫の裂け目の中へと入っていく。

この先で何が待っているのかその二人はまだ知るよしもなかった。

十三話 紅霧異変・弐

「何じやこりやあ!!!」

「だから言ったのに。」

空が赤い。見間違いでは済まされなほど赤い。その空の赤さはどこか血液を想起させどこか気味の悪い雰囲気醸し出している。そして何より異臭を放つのが、目の前にドシンと巨人のように佇む巨大な洋館であった。数日間和風建築の中で過ごしてきたのでそつちが目に馴染んでしまつて目に違和感しかない。

「でこれから俺たちは何をすればいいんだ？」

「基本的に貴方達はことの成り行きを見守っているだけでいいけど、おそらく屋敷の中での弾幕ごつこが起ると思うの。だからこつそりタイミングを見て中に入ってちようだい。基本的に貴方達の姿は他人からは見えないけど、物とか動かしたらバレちゃうから気をつけてね。」

「何か無駄に難易度たかくね？」

こつちの世界のことをよく知らないのに中々に高度なことを要求してくる。まるでかの有名な伝説の傭兵のスニークミッションみたいだ。

「もうすぐで博麗の巫女達がくるはずだから、それまで中には入らない方がいいと思うわよ。じゃ私は用事があるから異変解決したら戻ってくるわ。」

「え？ちよつと侵入方法とか教えてくれないのかよ!？」

「じゃあ、バイバイ♪」

そうして紫は、何も知らない生まれたての子鹿のような男二人を残し、自らのドレスをひるがえして裂け目の中へと消えていった。

「おいどうするんだよこれ？」

「まあ博麗の巫女が来るらしいからちよつと待ってればいいんじゃないやね？」

「お前は呑気でいいよなあ。」

「いやこれでも足りない頭使って頑張って考えてるぞ。」

「ほう？」

「多分その博麗の巫女ってのはこの異変ってやつを解決するやつなんだろう？で、こんな世界を真紅に染めるなんてことは普通人間はできない。この世界の性質からして妖怪が原因ってことだ。そして妖怪は圧倒的な身体能力を持っていると考えられる。だったら騒ぎに紛れて忍び込んだ方がいいだろう。」

「妖怪が身体能力が高いなんてなんで知ってたんだ？」

「いや、お前は知らないと思うけど俺深夜に妖怪に襲われたんだよね。ルーミア？とかいうやつだっけ。」

「いつの間にな？」

「なんだったら傷あるぞ。」

犬斗は羽織で隠されていた右手の裾をたくし上げるとまだ少し赤黒く抉られたような傷が目に入る。その傷は朝まで包帯に覆われていたのかまだ乾ききつておらず少し膿んでいる。

「痛たそうやなあ。」

「ていうか何だったらお前、ちよつと蕁麻疹ぽくね?」

犬斗の指が指していたのは俺の右手の甲であり、無意識に掻きむしっていたのか少し赤ずんでいる。

「俺今まで一回もなったことないんだけどなあ。」

「ストレスじゃね?」

ここ数日間なれない生活を続けていたのでストレスが溜まっていたのかもしれない。そんなくだらない会話をしていたときであった。

赤い閃光が俺たちの真上を突き抜けていく。突然のことで俺たちは口を抑え固まってしまうが、よくよく見てみればその赤い閃光は人であり屋敷の門の前へと降り立ったのがわかった。

「博麗の巫女……か。」

あまりに速すぎて自分の動体視力が追いつけなかった。今、紫の術がなければ完璧に見つかっていただろう。

「これからドンパチやり合うってことか。」

「じゃあ一旦ここから移動して門の近くまで行こうぜ。」

その言葉を合図に俺たちは潜んでいた小山から移動し、門前の様子がよく見える茂みの中へと身を移した。いくら透明でも草木に触れれば、草は揺れてしまうので最新の注意を払いながらここまで来ると博麗の巫女の姿が見えた。

「おい、あいつって。」

コシヨコシヨ話で犬斗に話しかける。

「この間見つかりそうになったやつだよな。」

そう、そこにいたのは二日前見つかりそうになって紫が逃してくれた少女であった。当時は緊張していて記憶も曖昧だったが、あらためて落ち着いてみるとすごく精悍な顔立ちをしており紫や藍に勝るとも劣らない美少女であった。

「幻想郷ってあんなのばつかなのかよ。」

「男の人権なくなつて、もの○け姫のたたらばみたいになつてたりして。」

俺たちそこまでかつこいいって訳でもなのに周りばつかわいごとこつちのメンタルが持たなそうさ。そんなことを話していると何やら話し声が聞こえる。一旦その談義を打ち切り2人とも耳を澄ました。すると先程まで見えない位置にいたもうひとり女性の俺たちの眼中に入り込んでくる。

「ちよつとそこ通して頂戴。あんたの主によろがあるのよ。」

「ちよちよなんで勝手に入ろうとしてるんですか!?ここから先はお嬢様に一切の出入りを禁じられているので通すことはできません。」

何やら梅色の髪に抹茶色のチャイナドレスと華人服の間の子ような服をまとった、高身長的女性が博麗の巫女の申し出をきっぱりと断っている。お嬢様と言っていることから従者なのだろうということはわかるが、

「なんで中華風なんだ？」

洋館に中華、和風建築と色々なジャンルが出てくる。もしかしたらこの世界はそうだったたくさん文化が混ざっているのかもしれない。

「ふーん。博麗の巫女に楯突こうっていうのね。」

「これでも私も腕が立つ方ですので。」

眉間と眉間の間にバチバチと散っている火花が草木に引火してしまうのではないかと思うぐらいあたりに緊張感が漂い、俺はゴクッと乾いた喉で唾を飲み込む。弾幕ごっこが始まろうとしているのだ。まだ始まったでもないのに二人からは覇気が溢れ出ており、なんだかこちらが睨まれているような感覚に陥る。

中華風の女性が左足を一步引き、右手も手のひらを構える。

「勝負ですー！」

「まったく、素直に通してくれば楽なのに。」

その言葉が耳から消えた瞬間だった。光が交差する。色とりどりの弾幕が扇状に放たれた。超速の弾幕が空気を貫き、常人では反応できないほどのスピードで着弾する。風が吹き荒れ前髪がバサバサと乱れ、流れ弾が俺たちの周りに飛んできてヒヤツとした。巫女はとい

うと、圧倒的な反射神経で体を反らしそのままバク転で弾幕を回避する。

「不意打ちとはやってくれるわね。普通この後なんか言ってるでしょうが!？」

「何のことでしょうか?」

博麗の巫女はふわりと浮き上がり、距離をとった。しかし中華風の女はふーっと息を吐き、集中するように目を半開きにして構え直す。すらっとした長い足をそのまま踏み出し、踏み込んだ地面から砂煙は舞う。連続で身体を遠心力に任せ助走をつけていく。

その姿はまるで本当の舞にも見えるが、突如その様子は急変した。左足が足についた瞬間、その足で思いつき踏み込んでカンガルーのように宙に飛び上がる。土の上なのにも関わらず、ドンっという踏み込みの音が聞こえてくる。

「な!？」

お札を右手に構え射出しようとしていた巫女の方は驚いたように声を上げる。

「あんたどういう脚力してんのよ!」

この声とほとんど同時に中華風の女の長い左足が振り抜かれる。見事な後ろ回し蹴りだ。

博麗の巫女はというと、右手を顔の横に構え蹴りを受けようとする。ドンっと衝撃で右手がぶれそのまま顔面に当たりそうになるが一步身体を引き、あえて右手の力を抜くことによってその鮮やかに回し蹴りをいなす。

「私の蹴りを捌きましたか。」

中華風のその声には反応せず、博麗の巫女は今度こそ持っていたお札を投げ飛ばす。現実ではヒラヒラとちてしまうはずの紙切れは空気に綺麗な弧を描き中華風の女へと向かっていく。

「そんな単純な攻撃当たりませんよ。」

そう快活に告げた中華の方は飛んでくるおふだを目視すると、右足を軽くけり左に身をそらす。そして再び博麗の巫女に向き直った時であった。

「ばーか。」

突如巫女がそう呟いた。

「何がですか？」

中華風の女はよくわからないといったような困った顔をしており俺たちは首を捻っている。

ボンッと目の前が爆ぜた。中華風の女の背中に何枚かのおふだが直撃するのを何とか肉眼で捉えることができた。

「バカね。私の攻撃がお札一枚で終わる訳ないじゃない。」

瞬間理解する。一枚目のお札は囷で相手を引きつけて、周りに放ったお札に気づかせないための布石だったのだ。結構定番な方法だが一回一回が勝負を分けるこの弾幕ごっこでは意外と刺さるのかもしれない。

「なんかこの勝負見てると俺たちの圧倒的な無力感を改めて感じる

わ。」

「確かに。お互い元々色々やってた身だけど、この幻想郷では通用する気がしないわ。」

「俺たちはまだ現代っていう枠にはまっっているのかもな。俺たちも一回型を忘れて自由に戦ってみた方がいいかもな。」

男2人で反省会をしているとどうやら終わったらしく巫女はズカズカと屋敷の敷地内へと入っていく。

「じゃ、いきますか。」

すっかり血が下に溜まって重くなった足を持ち上げると、先ほどの戦闘があつた場所をこつそりと忍び足で通り過ぎる。

バレないかと緊張したが中華風の女はグルグルと目を回しており起きる様子はなかった。

俺たちが安心して草むらに腰を降ろしたとき、博麗の巫女が一瞬こちらを振り向いたがその視線は中華風の女に向かっていた。肩をビクツと跳ねさせて危うく声を出しそうになったが、犬斗が口を無理矢理おさえてくれたおかげで何とかバレずにすんだ。

「ったく。びつくりさせるなよ。」

そう眩き額に滲んだ冷や汗を拭う。その汗は何だかべったりとしいて気持ちのいいものではなかったが、心を落ち着ける事はできた。

相手の視界には入っているのに向こうの焦点が合わないというのは違和感が凄い。そんな事を思いながら少しずつ前に進んでみるとギギギ、と鈍い重厚な音をたて博麗の巫女が玄関らしき門を開ける。

一瞬中の様子が見えたがレッドカーペットが敷いてあり外見通り

かなり高価そうだな。そこで博麗の巫女はその屋敷の中へと入っていきドタンとドアがしまった。外にはぽつんと男2人と現在進行形で気絶している中華風の女だけが残されている。

「じゃ、俺たちも入るとするか。」

犬斗はやる気満々と言った感じで立ち上がっているが、一旦ちよつと考えてみる。

「これ今入るの危なくね？」

よく考えてみてほしい。扉は中の様子が見えないのだ。今、この扉を開けて、中に博麗の巫女がまだいたらドアが勝手に開いたと勘繰られてもおかしくないだろう。

「まだ博麗の巫女が居るかもしれないからな。ここは窓とか中の様子が見える所から潜入した方がいいかも。」

「ていうかあんな堂々として入って行って他の従者が駆けつけてこない訳ないもんな。」

そうして俺たちは屋敷の周りを見て回る事にした。何だか泥棒みたいな感じがしてあんまり気のりしなかったが、こんな大きな屋敷を見る機会が今までなかったので少し好奇心が湧いてくる。窓から覗いてみると屋敷の中は赤に統一されており、羽の生えた小さいメイドが掃除や片づけなど家事を行っている。

結構その数は多く、バレずに侵入するのは中々骨が折れそうだな。

「おーいー！」

遠くで犬斗が呼んでいる。見つけたらどうするのかと半端呆れるが見つかつたら尚更やばいので急いで駆け出す。

「もう少し小さい声で喋れよ。」

小さな声で注意して、何を伝えたかつたのか聞くと

「あそこの換気扇のバルコニーっぽいところから入れそうじゃね？」

だそうだ。指差された方を見れば、黒い柵に真つ赤な床と何処か幽霊屋敷を彷彿とさせるバルコニーがあつた。

「二階だけどうするんだ？」

「目の前の木を登っていけばなんとかつけるんじゃない？」

「いや、みんながお前みたいな身体能力を持ってると思わないほうがいいぞ。俺は多分この高さは無理だ。学生の時だつたらわからなかつたけどな。」

「でもここ以外入るとこなさそうだけど。」

「……。お前だけ入って内側から窓開けてくれよ。」

これしかないだろう。バレないようにふたりとも中に入るには犬斗に先に入ってもらうしかしない。俺にも犬斗みたいな運動神経あつたらと鼻の先がむず痒くなるが、物ごと適材適所だ。お互い何も知らない同士、もたれかかつて生きていくしかない。

「はあ。しゃーねえなあ。じゃあチャチャツと行ってくるから、見つからないようにな。」

「お前じゃあるまいし見つかるわけ無いだろ。でもまあ、……ありがとうな。」

「つたく、ダレトクのツンデレだよ。じゃあ行ってくるわ。」

犬斗はお得意の身体能力でスルスルと木を登っていく。そして軽々とバルコニーに猿のように飛び移ると、こちらに一瞬視線を向けそのまま赤々しい館の中へと駆けて行った。この別れが何を表しているのか俺たち二人は何も知らなかった。

十四話 紅霧異変・参

「ああ、無駄に広いわね。」

紅美鈴と名乗った中華風の妖怪を倒した私、博麗霊夢は異変の元凶と思われる洋館の中へと足を踏み入れていたのだがこの屋敷の圧倒的な広さを前に早くも気持ちが始めていた。

「異変の元凶見つけるまでいつまでかかると思ってたのよ。」

向こうから来てくれたら楽なのにと、猫背でお祓い棒を肩で担ぎながら考えていると、何やら階段の上からコツコツと足音がする。ここまで妖精メイドは何体も蹴散らしてきたが、あいつらは浮いてるため足音を出さない。つまり……

「見いつけた。」

ニッコリと微笑み、お祓い棒を構える。歩いていると言うことは、異変の主犯の可能性が少なからずあるという事だ。

「お客さま、本日のお嬢様との面会は受け付けておりません。」

澄んだ声がちちらを威圧するようにそう告げる。お嬢様様と言っていることからこの声の主がハズレであった事を悟るが、相手の戦力を削って置いて悪いことはない。

「また来るの面倒臭いんだけど。」

「もし受け入れられないと言うなら……、わかっていますね。」

まるでナイフのように尖った言葉で少しピリツと背筋が伸びるの

がわかる。それと同時に声の主の容姿があらわになった。長身で白銀の髪に指と指の間に煌めくナイフを挟んだメイド服の女。それが声の主であった。こいつはやると、私の直感が告げている。

「あんた少しはやるみたいね。私も少し本気でやらなきゃだめっぽいわ。」

「それがあなたの答えですか？じゃあ……死んでも文句言わないでくださいね。」

「それはどっちセリフかしら？」

「こつちのですけど。」

「あつ、そう。じゃあさつきと始めましょうか。弾幕ごっこをね。」

「十六夜咲夜参ります。」

開戦だ。銀髪の女は階段から飛び降りざまにこちらへと蹴りを入れてくる。スラツと伸びた長いから繰り出される蹴りはさつきの女には劣るも、素早くまともに食らったらヤバそうだ。

「『夢符 封魔陣！』」

とつさにスペルカードを発動させる。空中でのスペルカードだ、避けられるわけないだろう。自らのはなった弾幕が音も立てず空中のメイドの方へと向かっていく。そしてその弾幕が白銀のメイドの目前に迫り私が勝ちを確信したときであった、……消えた。消えたのだ……メイドが。赤色の弾幕が音を置き去りにして空を切り、階段に激突して粉塵を巻き上げる。

「はあ、あなたの死体に損害賠償の請求書もくくりつけないといけなくなつたじゃないですか。」

その声が後ろから聞こえる。

「なっ!？」

慌てて振り向くと粉塵で白色に染まった視界を切り裂き神速のナイフが視界へと飛び込んできた。弾幕ではない本物のナイフだ。ゾクツと背筋が震え体が本能的に体を反らした。血色の良い顔をナイフが掠め、薄い血霧が霧散する。

「あんた能力持つてるわね。」

これは確定だ。こいつは程度の能力を持っている。ただの人間があんな人間離れをしたことができるはずがない。目の前から消えたのだ人間が。紫の能力と親しいものを感じるが紫があっち側に加担することはない。

少しの間彼女の能力について考えていたが、メイドの声と弾幕が私を頭の中から引き戻す。

「ぼーっとしちやってどうしたんです?」

メイドはわざとらしくニヤツと笑い、振り向きざまに大量のナイフ形の弾幕と、空のように透き通った青色の弾幕を発生させこちらへと飛ばしてくる。

「さっきからチマチマと面倒くさいのよ。」

あくまで冷静を装いながら飛んでくる弾幕をかわす。かわしきれない弾幕はお祓い棒で処理しながら首をかたむけ、しゃがんで飛んで

バク転してかわしていった。弾幕が産毛を掠めていくがそれくらいはいつもどおりのこと。喉に骨がつかかっているような気持ちを感じた。どこかで抱えながらも今までの経験と己の勘で圧倒的物量かわしきった。

「さすが博麗の巫女といったところね。大抵は初手の一撃で死んじやうのだけれど、あなたとなら少しは楽しめそうね。」

「はあ。こっちはちつとも楽しくないわ。」

フツと再び姿を消す。それと同時に四方八方からナイフが出現し鋭利なナイフの先端がこちらの命を刈り取りに来る。目にゴミでも入ったのでないかと思ってしまうほど、自分の目にはそのナイフがもともとその場所に存在していた物みたいに自然に写った。

「『夢符 二重結界！』」

キツ、カンツと音を立ててナイフが床に転がり怪しい赤色の空を反射する。どうしたら攻勢に出られるのか？彼女の能力は何なのか？それを理解することがこの勝負に勝つ鍵だと本能が告げている。

再びナイフを構えようとした彼女に弾幕を放ち、彼女をよく観察してみることにした。彼女はなんの前ぶりもなく姿を消す。そして何もなかったはずの空間にナイフが現れ瞬間加速しこちらへと向かってくる。

おそらく瞬間移動みたいな能力ではないことはわかる。そんな単純な能力なら、体の移動はわかるもナイフが現れた瞬間から速度が出ているのが説明できない。

「あんたばっか攻撃してないでこっちにも攻撃させなさいよ。あんたもずつと攻撃してて暇でしょっ。」

のね。」

「まあせいぜい頑張ってください、どうせ無理でしょうが。」

ムカつくんですけど。あの高飛車な態度、めっちゃムカつくわ。あの伸び切った天狗の鼻をへし折ってやる、と心のなかで誓うと左手に御札を構える。考えた結果、今回飛ぶのは避けたほうがいいと結論づけた。飛んでしまうとおそらく下からもナイフが飛んできてしまい余計に避けづらくなってしまうだろう。

「そろそろ終わりにしますか。」

どうやら向こうもお遊びには飽きたらしい。自分にここが山場だと言い聞かせ全神経を研ぎ澄ます。

「幻符 殺人ドール！」

その言葉が紡がれた。

一面がナイフだった。彼女の背後も自分の背後もどこを見てもナイフであった。まるで銀色の世界に閉じ込められしまったように錯覚するが、ナイフの隙間からかろうじて見える真紅の屋敷の内装がそれを否定する。

「終わりです。」

鉄の雨が降り注がれた。タイミングは違えど、あたりのナイフは一齐に自分目がけて降り注がれた。しかし、絶体絶命の中でも私は自然と笑みをこぼしていた。

「はあ。まったくあのバカの言うことが役に立つなんてね。」

体を鉄の雨がスクラップにしようところつちに向かってきている。しかしそれはもう私には関係ないことだ、だって、

「派手じゃないと魔法じゃない。弾幕は火力だぜ……だったかしら？」

「霊符 夢想封印!!」

虹色の閃光が集まって色とりどりの弾幕ができたかと思うと、それは銀色の壁を塗りつぶしていくように、メイドへと向かって鉄の壁を食い破っていく。曇り空に虹がかかっていくようなその綺麗さに誰もが息を呑むことになるだろう。見ていたのが咲夜だけだったのが悔やまれるぐらいだ。

「なっ!？」

油断していた咲夜はその弾幕に反応できず、モロに食らって虹の光へと飲み込まれた。しかし、ボロボロになりながらも一応まだ動けるらしく、肩で息をしながら立っている。

「好きありー!」

弾幕を夢想封印を撃った後すぐに咲夜に向かって飛び出した霊夢は至近距離で咲夜にとどめを刺そうと構えていた札を当てようと、腕を振り抜いた。

「くっ。」

歯を食いしばりながら咲夜は時を止め博麗霊夢の後ろに回り込んでナイフを放った。そして時は動き出す。そのナイフは巫女の背中に当たるはずだったのだが、当たったのは自分で博麗霊夢のお札だっ

た。理解ができないまま倒れ込み、驚きの声を上げる。

「な・ん・で。」

「予測よ。あなたが時を止めてそこに移動してくると思った、それだけよ。」

なんで私の能力がわかったのか、なぜ私がここに出てくるとわかったのか、という疑問達、主人レミアへの申し訳無さ、思考が渋滞して何も発することができなかったのだが、薄れゆく意識の中で最後に

「すみません。お嬢様……。」

その言葉が静まり返った屋敷の中で静かに木霊した。

どうやら気絶したようだ。気絶する前の最後の言葉が、「すみません。お嬢様。」とは相当な忠誠心を持っていたに違いない。それにしても今回の相手は中々に骨のある相手だった。

しかし、いつまでも思考にふけてはいられない。こうしている間も外は真っ赤なのだ。さっさと主犯を見つけて倒さなければならぬ。

「さっさと次行きましょうか。」

博麗の巫女は静かな廊下を歩いていく。倒れ伏した一人の優秀なメイドを残して。

一方その頃、無事バルコニーに入ることになった犬斗は永延と続く廊下をトボトボと歩いていった。狐に化かされているかのような感じがする程長いが、ところどころに妖精メイドが居るのでこれが現実であるということを理解させられている。

「外から見たときより広くね？」

確かに大きい屋敷だとしてもここまで長い廊下は無いのではなからうか？疑問を抱きながらもここまで来てしまった以上後戻りは出来ない。

「真弓を中に引き入れる時にはもう異変終わってたりして。」

これが冗談になりそうに無いのが余計に腹立たしい。諦めて再び歩を進め始めたのだが、ふとズズズと地震のように屋敷が揺れたのがわかった。咄嗟に小学生の時に習った「おかしもち」を思い出したが、どうにもこれは地震では無いらしい。地震であればこんなに何回も振動は来ないだろう。だとすれば考えられるのは一つだけ、博麗の巫女が戦っているのだろう。

「早くしないとまずいな。」

目の前で掃除をしている妖精メイドの横をスラリと通り抜けながら、再び走り出す。まずは階段を見つけるところからなのだが、これが中々見つからない途中でかなり重厚な扉の図書館らしき場所を通ったが中に人がいるっぽかったので入るのはやめておいた。

これだけ走ってもまだ階段が見えてこなかったのはどういうことだろう？ただそのことだけが積もっていきどつと体が重くなる。

そこからさらに十分程たっただろうか？階段を見つけることができなかつたのだが代わりにここだけ妙に怪しげな石造りとなってい

る大きな扉を見つけた。しかもその扉は元々開けっ放しになっており風で揺れながらキーッと音を立てていた。

「曲がり角を間違えたか……。」

頭を抱え途方にくれていると、どこからか爆発音のようなものが聞こえた。その音は一回だけではなく何回も続けて鳴り響いている。耳をそばたててみるとどうやらこの石造りの先でなっているようだ。

「博麗の巫女か？」

こんなところで戦っているのか？と疑問を抱きながらも、首を半分突っ込んで中を確認してみた。その中は窓がなく薄暗い空間で下に降りる階段が続いていた。さっきの屋敷のイメージとはかけ離れた雰囲気はどこか牢屋を連想させるものであったが、ここまで来てしまったからにはタダで帰るといふことにはなりたくない。あわよくば一階の窓に繋がってくればいいなと思いつつ、俺は足を踏み入れた。

「何かうす気味悪いな……。」

コツコツと自分の足の音と呟きが響き、下に行くに連れてゆ揺れが強くなっていくのがわかった。そして階段を降りきった先にあつたのは、どこか子供部屋を連想させるようなドアと名前プレート。ドアにかけられている板にはフランの部屋と書かれており、振動でカツンカツンと音を立てている。

この扉を開けてはだめだと、心の中自制する自分と、興味本位で扉を開けようとする自分たちが戦っている。そしてその決着がつく。

俺は鈍い金色のドアノブに手をかけた。

十五話 紅魔異変・肆

ドアを開けた瞬間、ボンツと土煙が吹き抜けていく。煙に混じってとんでくる小さな瓦礫が身体中にぶつかって点々と痛みが走る。そしていまもドンツという振動は続いており、立っているので精一杯だ。煙が収まり、視界がひらけるとそこにはぬいぐるみや、木馬のおもちゃなどが置いてある広大な子供部屋が広がっていた。地下に広がっているとは思えないほどその部屋は精巧に作られており、陽の光が入るわけもないのにご丁寧にも窓枠が設置されていて、真っ赤なカーテンがかけられている。

そして上を見てみれば、やはり弾幕ごっこだ。博麗の巫女かと思つて目を凝らしたがなんだか少し違和感を感じる。

「博麗の巫女ってあんな弾幕撃つのか？」

少なくともさつきの中華女の時は、赤色に輝くお札の形をした弾幕だった。なのに、いまさら黄色の星型の弾幕なんて撃つだろうか？

そう考えつつも吹き荒れる防風の中で、羽織をためかせながら部屋の隅へと向かう。本人たちの姿は見えないがこの部屋の中を二人の人物が高速で移動しているのは気配と弾幕でわかる。

「魔符 スターダストレヴアリエー！」

不意に元気な女の子の叫びが、広い部屋いっぱいに響いた。スペルカード？なんとなく響きのに必殺ワザ的なものと仮定するが、よくわからない。戻ったら紫に教えてもらおうと思つたが、そもそも死ぬかもしれないこの状況でこんなことを考えているより瓦礫を避けることに専念したほうがいいのでは？と思つたので細かいことを考えるのはやめた。

そこで、いきなり空中に赤、青、緑の大きな星型の弾幕が出現して

地下の壁を砕き、ドゴンつと大きな破裂音が地下中に響き渡る。

地面が割れんばかりに揺れ、大きな岩の塊が落下してきた。

「何が起こってんだ!？」

弾幕はこの世界でいわゆる銃的な立場だと思っていたのだが、今のは何だ!？」

「銃どころかバズーカじゃねえか?」

これがスペルカードってやつのか。落ちてくる瓦礫から逃げながらスケールの大きさに圧倒されているとさつきとは違う声が聞こえた。どこか幼気なその声は、狂ったように笑いながら何かを叫んでいる。

「禁忌 レーヴァテイン!」

すると砂煙でモウモウとした部屋の中央から、轟々と炎が湧き上がりそれと同時に風圧で砂煙が吹き飛んだ。現れた炎はだんだんとなにかの形を型どつていき、やがて真紅のそれが現れた。剣だ。真紅に燃え上がる剣だった。

さらに視界が晴れたおかげで相對する二人の少女の姿があらわになる。右側にいるのは箒に乗って長い黄色の髪の上に黒い帽子をのせた、まるで魔法使いのような見た目の少女だ。左に居るのは、さつきの少女より小さく、赤色のドレスに白いモブキャップを被った少女で背中には謎の色とりどりの何かがぶら下がっている翼らしき物が付いている。そして手にはさつきの燃え上がる剣が握られており、その小さい体のどこにその大きなものを持つ力があるのかと思わず目を見張ってしまう。

「モットアソボウ!」

口角をニヤツと吊り上げ、光の灯っていない濁った目で魔法使いの方を見ゆると、乱雑にさつききの剣を振り回す。

見ているだけで背筋がゾクつとしたのにも関わらず、元気に笑っていられる魔法使いはどうかしていると思えない。

「おつとこりや危なかったぜ。吸血鬼ってのはみんなこうなのか？」

箒の上の魔法使いは灼熱の攻撃を素早い動作で避けると、すぐさま弾幕を放ちながら再び攻勢に出ようとしている。

しかし向こうの少女の方も飛び抜けた身体能力を持っているようで、魔法使いから目を離れた時にはもうさつききの場所から消えていた。

「禁忌 クランベリートラップ！」

と、どこからか叫ぶ声が聞こえて大量の弾幕が天から降り注いできた。

魔法使いは多少もたつきながらもその弾幕を躲しきると何やらよくわからない、箱のようなものを手に取って上空へと登っていく。

「なあ知ってるか？」

金髪の魔法使いは幼女にそう言うと、箱を前に突き出した。

「弾幕はパワーだぜ。」

その言葉に反応するように幼女は沢山の弾幕を生成して放つ。まるで雨のような弾幕の集団は真下の魔法使いをすり潰してしまうのではないかと思うほどの速さと密度で放たれた。しかし、魔法使いは叫ぶ。

「恋符 マスタースパーク！」

箱の先端が回転して、黄色い光が集まっていく。そして弾幕が彼女の手に触れようという時だった。ドウンツ言う轟音と共に極太のレーザーが放たれた。

目を塞ぎたくなるような威力のレーザーは、上空にいた狂った少女を巻き込みながら地下の天井にぶつかった。それが5秒ほど続いたのちブスツつと音を立ててレーザーは萎んだのだが、ひとつわかった事がある。

「天井無くなっちゃったじゃねえか?!」

魔法使いはにやけながら、

「ちよつとやりすぎちゃったか?」

と笑っている。笑っている場合じゃないだろ、と突っ込みたくなつたが心の中で留めると、煙の合間から上を見上げてみた。極太レーザーによってぶつ壊されてしまった天井はポツカリと穴が空いてしまい、紅色の空が丸出しになっている。

さっきの幼女は無事なのだろうか?そんな疑問を抱きつつも自分が上に行つて確認する術を持たないので今は放つて置くことにした。

「一旦上に戻るか。」

そう思い、扉が吹っ飛んでしまった入口の方にまで歩いていくと魔法使いの女は箒に乗って上へと飛んでいってしまった。

「あいつ怒ってるかな?」

思い返してみれば、真弓はずっと外で俺が開けるのを待っているのだ。かれこれ30分はたっていてあいつも暇を持って余しているだろう。戻ったあと遅いぞと、どやさねなければいいが。

「またこの道に戻るのか…。」

気が遠くなるような気がしたが、結局ここからでなければならぬには変わらないので萎える気持ちを押しさえつげながら石の階段を登った。コツコツコツと自分の足音が木霊し、薄暗い通路を一人で歩いていると、再びズズンツと地面が揺れた。思わず階段を踏み外しそうになり壁にもたれかかる。カラカラと小さな小石が天井から落ちてきて、ここも崩れるのではないかという焦りにも似た恐怖を感じ駆け足で階段を登った。

「はあはあ。」

まったく、ここに来てからというものの休まる時間が全くと言っていいほどない。これもあそこで神社の中に入ってしまった自分の運のなさを呪うしかない。

階段を出ると、ムワツと立ち込めた大気に身体を舐められるような不快感を感じてゾワツと鳥肌が立つ。博麗の巫女がさっさと解決してくれることを願いながら、豪華そうなカーペットをトコトコ歩きなから俺は再びもと来た道に戻るのであった。

流石に遅くないか？かれこれ犬斗が中に入ってから20分以上立

つ。いくらなんでもそんな時間はかからないか。頭をポリポリと書きながらそんなことを考えていると入り口での振動が止んだことにふと気づいた。さつきまでおそらく博麗の巫女が中で誰かと戦っていたっぽいけど、もう振動は止んでおり扉に耳を当てて見るも何の音も聞こえない。

「開けてもバレないかな？」

少しくらい大丈夫だろうと、扉の取手に手をかけ少しだけ中を覗いてみる。そこには散らかった広間ばかりがあるばかりでシンっと静まり返っている。

「どうせ歩いてたら、会うよな。」

広いとは言えど、屋敷の中だし歩いていけばいつか会えるだろう、と軽い気持ちでスツと屋敷の中に忍び込んだ。中は絨毯が破れ壁にはヒビが入りここで何らかの戦闘があったということ物語っている。あたりを見回って博麗の巫女がどちらに行っただのか考えながら階段を登ると、一人の女性が倒れていることに気づいた。

「うおっ！」

二階との高低差で見えなかったその人を見て驚いてしまう。ここに倒れているということは博麗の巫女にやられてしまったのだろうか？死んでいるわけではなさそうなので放って置いてそのままその先に進むことにしたのだが、なにぶん顔が美人なものでどうしても視線がそちらにいつてしまう。

「この世界の住人は目に毒だな……。」

女性経験のない自分はこういう美人さんがいるとどうしても視線

がそちらの方に誘われてしまうのだ。そしていつも、俺の隣で妹が

「恥ずかしいからやめてよ。」

とギンつと睨んでくるのだ。思春期のせいか妹は俺に「ブス、キモい、臭い、バカ、死ぬ、カス」などの悪口ばっか言ってくるが俺の大事な家族であり、唯一の存命している家族だ。でも今ここにはいない、現代では一人で心寂しい思いをしているだろう。まあ気の強いアイツのことだから表には出さないとと思うが。

「早くしないとな。」

慌てて女性から視線をはずして歩き出す。そうして5分程歩いた頃であった。ズズンツと地面が揺れた。電車の中でガタガタ揺られているようなこの揺れは先ほどの弾幕ごっこの振動とは何か違う。明らかに地中から揺れが伝わって起こった地震だ。

「あいつも厄介ごと巻き込まれてないといいがな。」

地震は尚も止まず、絶えずズズンツという振動を続けている。これは自然の地震ではない何となく雰囲気を感じていたが恐らくそうだろう。地下がこの屋敷にあるかはわからないが、この揺れが人事的ものであるとすることは確かだ。

「この揺れが人によるものって現代では誰も信じないだろうな。」

しかしこれが幻想郷。弾幕ごっこである。

「博麗の巫女がどんだけ力を持っているのかは知らないが、あれを超えるってのは流石に無理だろ。」

一人そんなことをつぶやく。紫が自分の中でどんなことを考えてるかは分からないが、俺たちに強くなつてほしいなんてそんな不自然な理由な訳がない。観察したところあいつはおそらく頭が良く回るタイプだ。何をさせられるかは分からないが、今後とも観察していかなければならない。

そんなことを考えながら、ロウソクが怪しく照らし出す洋館を一人で歩いていった。妹のことや、紫のこと、犬斗のことで頭がいつぱいだ。が今は忘れることにする。だって、

「絶対この先だろ……。」

明らかにラスボスっぽい雰囲気扉が目の前にあるからだ。深黒の装飾に囲まれた絹のように滑らかな大理石の重厚感のある扉。それは道を塞ぐ大きな巨人のようにどっしりとそこに存在していた。扉に耳を当てしてみるも中からは何も聞こえずシンツと静まり返っている。ちよつとくらい中を見ても大丈夫だろうと手を取手にかける。

「はあ。やつと見つけたあ。」

後ろからの突然の話し声にビクツと肩を震わす。まさか見つかったのか？首だけを後ろに向けその正体を確認すると、やはりそれは博麗の巫女であり俺ではなく後ろの大きな扉を見据えていた。

ホツと胸をなでおろすと、そそくさとその場から離れて博麗の巫女のため道を開ける。見つからなくてよかったー。危なかった危なかった。まさか後ろから来るとは思わないよな。この術がどこまでの効果があるのかわからんけどやっぱ人に気づかれないうのはあまり慣れない。まるで世界中のすべての人が俺のことを忘れてしまったような、そんな感覚だ。

「異変の元凶さーん。さっさと出てきてくれると助かるのだけだ。」

巫女が問うと数秒間の静寂が訪れる。その後、返答があった。

「あら、咲夜たちはやられてしまったのかしら？」

その声は幼気ながらも凄みをもたせた今まで聞いたことのないタイプの声だった。年の功が出せるような威圧感をもつ異変の主はとうやら女性のように、こんな趣味の屋敷に住む女性とはどんな人物なのか想像が積乱雲のように、もくもくと膨らんでいく。

「あんな奴ら口ほどにもなかったわ。」

それに対して巫女は張り合うように、余裕だったと言い切っている。まあ博麗の巫女だったらあり得るのか？よくはわからないが、幻想郷の秩序を守る役割があるくらいだ。相当強いと見るべきだろう。

「まったく、客が姿見せてやってんだから主人自らお出迎えするのが礼儀ってもんじゃないのかしら？」

「あら、私にはあなたがとても客には見えないのだけど。強いて言うなら暴れ牛、とでも言ったものかしら？」

「はあ!? 面見せないくせに偉そうなこというわね。出てくる気がないんなら、こつちからいかせてもらおうわ。」

意外と短気なのか簡単に挑発に乗り、ドアの取手に手をかける。そのまま二の腕に力を入れダンツと扉を開け放ったとき、

俺の視界は赤に染まった……。

十六話 狂気は満ちる

「なっ!？」

視界が真っ赤に染まったのと同時に、目の前をなにかが通り過ぎた。頬に風を感じ思わず振り向く。その何かは廊下を真っ直ぐと突き進み、ドーンツと音を立てて爆ぜる。明らかに今は博麗の巫女を殺すために放たれたものであったのだが、事前に何かを察していたのか横に飛んでかわしていた。

「あら、今の不意打ちをかわすのね。」

煙の向こうに佇む異変の元凶は悠々自適に呟く。その余裕を感じさせる話し声はどこかファンタジーにでてくるような女王様を連想させた。

「何か索敵系の能力でも持つてるのかしら？」

能力？聞き捨てならない言葉が聞こえたが、この世界にはそんな要素もあるのか？弾幕や、人間が空を飛んでいる時点ですでに現代とはかけ離れているが中二病じみみたいな要素がさらに加わるとは思ってもいなかった。しかし、巫女は

「いいえ、勘よ。何となくそんな気がしたから。」

と能力ではないと言う。その勘が能力なんじゃないの？と言いたいが、生憎話すことはできない。ていうか、今の攻撃を勘で避けるなんてどんな思考回路なのだろう？やはり博麗の巫女というのは元から何かを持って生まれてくるのかも知れない。

「ふーん。今の勘でねえ。あなたは人間よね？」

「その口ぶりからしてあんたは人間じゃないっばいわね。」

徐々に煙が晴れていく。灰色が透けていく。玉座らしきものの輪郭が見えてくる。そして最後に浮かび上がったのは、真っ白な肌に青紫っぽい髪、真っ黒な翼にピンク色のドレスを纏った少女。それがいた。身長が10歳もいかなそうな幼女であったので一瞬拍子抜けしたが、その姿を見ているだけで脅しをかけられているような凄みもまとうていた。

なんていうか、表現しづらい感じだ。

「そろそろおしやべりには飽きてきたわね。我が名は吸血鬼レミア・スカーレット。この館の主であり幻想郷を手に入れるものよ。」

「吸血鬼・ねえ。私は博麗霊夢、博麗の巫女で妖怪退治をやってるわ。本当はお賽銭で生活したいんだけどねえ。はあく。」

「フーン、博麗の巫女ね。そう。じゃ早速、始めましょうか。」

吸血鬼と博麗の巫女の弾幕ごっこ。なんだか恐れ多い響きだが、同時に気になってしまう自分もいる、この2人の戦いはどのくらいのレベルのものなのだろうと。自分はごくりと唾を飲み込んでこの場の成り行きを見守ることにした。

「神槍スピア・ザ・グングニル。」

そうレミアは静かに呟くと、さっきまでは握られていなかった赤紫に耀く大きな槍を右手で握っている。その槍はまさに相手を破壊するためだけに作られたものであるということがその鋭い形状からわかる。持ち主の身長を軽く超えるその槍は怪しく、そして狂氣的な空気を醸し出しており見るからに危険度MAXの代物だ。

「穿ちなさい。」

それのみを告げ、腕を大きく振りかぶるとその槍を放つ。銃弾よりもはるかに速いスピードで放たれたその槍は雷のように音を置き去りにして目の前の博麗霊夢を捉えていた。風のみを感じ、あまりの速さに体がすくむ。しかし、

「そんなのお見通しだったのよ！」

博麗の巫女は当たり前のようにその攻撃を避けていた。左手で境界のようなものを張ってうまく受け流すとそのまま飛び上がる。

「夢符 封魔陣！」

そう叫ぶと、赤い弾幕を無数に展開させる。それらは目の前の吸血鬼を確実にしとめるために隙間なく放たれたはずなのだ。しかし、その攻撃は当たらなかった。吸血鬼の彼女は、信じられない反射速度と運動神経で弾幕の隙間へと身体を滑り込ませた。その繊細で力強い技術に思わず、

「おお。」

と声が漏れてしまう。慌てて口を抑えて彼女達の会話に耳を傾けた。

「ふうん。あなた人間にしてはやるじゃない。吸血鬼である私の攻撃を一度見ただけで避けるなんて。」

「生憎とこちらもそういう商売をさせてもらってんのよ。お金は貰えないけどね……はあ。」

「まあ、あなたがいくら私の攻撃に反応できたとしても所詮人間。私達吸血鬼の運動神経には及ばない。……わからせてあげるわよ。」

「あら、そう。じゃあ精々頑張つてね。私に退治されないように。」

二人は互いを挑発しあいながら、眉間の間に火花をちらしている。さっきの会話は一見自然に聞こえるが、一つ気になることがあった。話術を学ぶ警察だから気づけたことかもしれない。私達とはどういうことなのだろうか？ここにいるレミリアと名乗る少女と、他に吸血鬼がいるのだろうか？これまで見てきた刺客はみんな吸血鬼ではなさそうであつたが。

まあわかんないものはしょうがないか。

「じゃあ、覚悟しなさい。……血を吸われるね。」

前髪がボサボサになるほどの衝撃波とともにレミリアが飛び上がる。

「紅符 スカーレットシユート！」

紅の弾幕が浮かび上がり、乱暴に地面に叩きつけられる。この主人は自分の屋敷を自分で壊しているということに気づいているのだろうか？わからないが、ここにいたら巻き添えを食らいそうで怖い。ただでさえ犬斗みたいな身体能力もない俺は流れ弾を避けられるかも定かではない。唯一できるのはヘボい弾幕を一発程度撃つことができる程度だが、どうせ気絶してしまう。

先程霊夢と名乗った巫女は体捌きと結界でそれを防ぎきると、浮かび上がる。何回も見たのにも関わらず、人間が飛んでいるということに違和感しかない。

「私の速度についてこられるかしら？」

レミリアは挑発的に言うと、後ろに生えたいかにも吸血鬼っぽい翼をバサツとはためかせ高速で空を飛び回り始めた。負けじと霊夢もそれを追いかけて、前に弾幕を撃つたり後ろに撃つたり、空中での戦闘が始まった。まるで戦闘機の戦いでもみているようであったが、それを行っているのはれっきとした生き物。そのことを考えるとなんだか恐ろしくなつて鳥肌がたつ。

「こんなものになれるわけ無いだろ……」

一人寂しくぼやきながら、八雲紫の顔を思い浮かべる。あいつが俺をこんなところに連れてこなければ今頃俺は現代で楽しく暮らせていたのだろうか？

「ははっ、それもわかんねえか……」

乾いた笑いとともに、自分の人生を思い返した。今自分が何をすればいいのかわからない。だからせめて、今この場で行われている戦闘を絶対に忘れないように目に焼き付けて置こうと思った。

お祓い棒と槍が交差し、お札と真紅の弾幕も交差する。目で追うのがギリギリのスピードで移動する彼女達を目を見開きながら追い、どういう動きをしているのかを徹底的に分析する。

「何か、あんまり考えてなさそうな動きだな……」

彼女達を見ていて思ったのだが、相手の数手先を読み合いながら戦っているというよりはそのぼその場で臨機応変に戦っているように見える。お互い知らない者同士だから探り探り戦っていくのかと思ったが、どんどん自分の手札を切つていつているようだ。

「あんまり探り合いとか無いんだな。」

つまりやり合う時はとことん全力でつてことか。万が一戦うことになっても手加減してもらえないかもなあ。ていうかようやくこの屋敷の作りに納得がいった。吸血鬼、つまり西洋の妖怪みたいなもんだ。だったら洋館であることに納得がいく。

「危なっ!？」

二人が空中でぶつかり合い、大きな瓦礫がこちらへと飛んできた。とつさに横に転ぶように避けるも膝をすりむき血が滲んだ。

「痛つてえ。まったく油断も隙もありやしねえ。」

床に手をついて腰を持ち上げやつと立ち上がろうとした時であった、足元の地面からゴゴゴツと地鳴りがして再び転んで仰向けになってしまった。飛んでいる二人は感じることはできないだろうが俺にはわかる。鬼気迫る何かが、何かが来る。どこからかはわからないが絶対何かが起こる、それを本能で感じ取っていた。

慌てて揺れる地面の中立ち上がり身構えていると、ボコツつと床が盛り上がりバキバキつという破壊音と共にレーザーが間欠泉のように吹き上がる。

今のも弾幕なのか!? 太すぎじゃねえか? 紫の攻撃で見たことはあったが、こんな以太いレーザーがあるのかとアングリと口を開いて呆然としているとレーザーは天井を突き破り、更には屋根を突き破って徐々にしぼんでいった。

天井にポツカリと穴が空き紅の空が姿を表す。すると、上空に浮かび上がる瓦礫と共に人らしきものがドサツと真横に落っこちてきた。見てみれば金髪のショートにボブキャップ赤色のワンピースを着た小学生くらいの少女が横たわっている。

一瞬迷ったもののほうっておくのは危ないと思いついてその少女を起こしてみることにした。そして彼女の肩に手が触れようというとき、閉じていた目がギンッと見開きニヤツと口角を釣り上げた。光の宿っていない彼女の目にこちらは見えなはずなのにこちらに焦点があっているような気がして思わず後ろに飛び下がる。

「はあ、はあ。」

なぜだか動悸が収まらない。はあ、はあ、と呼吸が荒くなりなにか気持ちが悪くなってきた。ふと身体がグラツと揺れ、倒れそうになり崩れかけの柱にもたれかかる。

「もつとアソボウ。」

抑揚のない声で、かつ狂気的な声でそれを告げると空中に浮かび上がりどこかに消えていった。キーン耳鳴りのする耳で、レミリアが

「フラン、なんでここに!？」

と叫んでいるのが聞こえる。あの狂った少女も吸血鬼なのか？とジンジンと痛む頭で考えながらドサツと腰を下ろす。

「今のは何だったんだ？」

彼女は狂っているそれだけは確かだ。体の不調はおそらく急激なストレスを感じたことによる精神へのダメージが原因だろうが、あの目を見ただけでこんな身体が駄目になるもんなのか？わからないことだらけだが、今は自分の気持ちを落ち着けることが優先だ。

「すう〜はあ〜。」

深呼吸をしているといくらか呼吸も落ち着いてきた。さっきの出来事からおそらく数10分がたっているが、よくわからないまま4人の少女が戦闘を始めている。そのうちの一人は魔法使いの格好をしており見たことも無いが、さっきの金髪の少女も参加しているようだ。

抜けた腰を持ち上げようと踏ん張っているとこちらに近づいて来る足音が爆音に混じって聞こえた。

「大丈夫か?!」

犬斗はこちらに慌てて近寄ってくるのを抱き起こす。

「すまん、ちょっとビビって腰抜かしてた。」

頬をかきながら恥ずかしい気持ちを押し殺して、ありがとう。と感謝を述べると向こうは当然だと言わんばかりの笑顔で

「お前はそんな柄じゃねえだろ。」

と減らず口を叩いている。

「それはお前もだろ。」

と返すと、そうか?ととぼけて話題をそらされてしまった。実際あいつは俺と出会う前は結構冷たい感じだったが、そろそろ本性が見えてきたのかもしれない。本当は優しい奴、それが犬斗だ。

「で、今これどういう状況なん?」

「俺にもさっぱりわからない。腰抜かしてたときなんて言ってたか聞

く余裕なかったからな。」

「見たところ、二対二の構図ぽいつな。」

空を見上げてみれば、博麗の巫女霊夢と魔法使いVS吸血鬼の二人の戦いのようだ。金髪の少女の方を見てみればさっきのような狂気は宿っておらずちゃんと自分の意志で戦っているように見える。この数十分の間に何があったのだろうか？何も聞いていなかったことを後悔するも戦いからは目をそらさない。

それが今俺にできる最善だから。

「禁忌フォーオブカインド。」

金髪の少女が言葉を紡ぐ。すると身体が分裂して分身らしきものが現れる。そして一斉に動き始めた。遠目からみていて思うのだがさっきの狂気じみてるときと違って意外と思慮深い動きをしている気がする。ここに来たばかりの若造が勝手に批評するなど言われそうだが、なんとなくそんな気がした。なおさらさっきの数十分間に何があったのか気になってしょうがない。

赤に青に黄色に緑に紫。様々な弾幕が空を飛び交いぶつかり爆ぜる。まるで花火大会にいるような光景に息を詰めながらどちらが勝つのかとつい見入ってしまう。俺としてはどちらを応援すればいいのかわからないが、なんとなく博麗の巫女を応援してみることにした。紫の口ぶりから霊夢と紫は仲が良さそうだったので全く知らない人よりはいいのかなと思っただけからだ。

「まったく、なんでここに魔理沙がいるのよ!？」

「いやあく、ちょっと別用でな。ちょっと図書館に向かう途中で面白そうな所を見つけたんだよ。そしたら、あのフランっていう吸血鬼が

いたんだよな。」

「また性懲りもなく図書館に盗みに行ってたのね。はあく。」

「いや、盗んでるんじゃないかって借りてるだけだって。何度言ったわかるんだ？」

「いやそれはこっちのセリフなんだけど。」

「あら？二人ばつかで話してないで私も混ぜて頂戴？」

赤と紫の弾幕が二人を襲う。霊夢と魔法使いはギリギリそれを避けると再び口を開いた。

「どうやら今は弾幕ごっこに集中したほうが良さそうですね。」

「ええ、そうですね。じゃあさっさと片付けちゃいましょ、早く帰ってゆっくりしたいのよ。」

「へんつ、そんなこと言っちゃって久しぶりの異変でお前もワクワクしてんじゃないのか？」

「な訳ないでしょ。それよりもっと前を見て飛んだら？いつ弾幕にぶつかっても知らないわよ。まああんたがいなくても私は勝てるけどね。」

「はいはい。じゃあ、霊夢はそっちの紫のちんちくりんを頼んだ、フランは私にまかしとけ！」

二人会話を終わるとそれぞれ相手すべき方向へと飛んでいく。今の軽口から二人がどれだけ信用しあっているかがわかった。そうい

うハッピーな感情は自分が知らないうちに漏れ出てしまうものだ。俺と犬斗あれくらいになれるだろうか？まあ、まだわかんないか。

あの魔法使いは、魔理沙？と呼ばれていた。詳しいことはわからないが、相当の実力者であると思われるべきかもしれない。あんな太いレーザーをタダの人間が打てるものなのか？わからないが吸血鬼をふつとばしたのだ常人にできることではない。

魔理沙は箒に捕まり数人の吸血鬼からの弾幕をものすごいスピードで交わし進んでいく。背後からは水色のレーザーと星型の弾幕が放たれており、一人ずつその数を減らしている。4人、3人、2人、一人減るたびボンツと分身がとけ小さな花火のように元から何もなかったみたいに消えていく。圧倒的パワーと速度それが彼女には備わっていた。

「ほらみんな倒しちやっただぞ？ってことはお前が本物ってことだな。私にやられる覚悟はできたか？」

「私負けないもん。いくら相手が魔理沙さんでも手加減はしないからね。」

「ふーん、その調子だとまだなにかあるっぽいな。じゃあ見せてみなフランの全力を。」

あの魔法使い、中々かつこいいことを言うな。男勝りな感じでそういうのが好きな人にはたまらないのかも知れない。

そんなことを考えながら、行く末を見守っているとふと吸血鬼が動きを止める。そして開いた手を前に突き出し、何か集中しているように目を閉じる。

しかし空きだらけの彼女を魔理沙が見逃すはずもなくここぞとばかりに真っ直ぐ飛んでいく。魔理沙と吸血鬼が重なって見えないので横にずれようとした時、見えない奥側から

「キュツとしてドカーン。」

その言葉が聞こえた。

十七話 脇道にGO

「キュツとしてドカーン。」

その言葉が紡がれた瞬間、俺のもともといた場所の地面が大きな音を立てて破裂する。跡形もなくエグられた地面は俺がここにいたら間違いなく爆散していたということを表しており、だくだくと冷や汗が頬を伝ってボロボロの地面にシミを作る。

「おい今のなんだよ!？」

「さあな、俺にもわかんないけどおそらくあの女の子が出したんじゃないのか?」

なんかこいつ冷静すぎだろ。前から思っていたが犬斗は普通の人がガチガチに緊張してもいいはずの場面でどことなく冷静だ。人間味があまり無いといえれば良いのかもしれない。

「それはそうだけど・・・、そうか多分これは能力だ。なんて能力なのかはわからないけど弾幕じゃないならそれしか無いだろ。」

「でも流石に攻撃に全フリしすぎだろ!絶対あそこにいたら俺ミンチだったって。」

二人で走りながら半壊した屋敷を走り回る。あの少女は自分の見ているところを爆発させることができるのかもしれない。こうして走っている間でもあちこちドッカーン、ドッカーンと爆発が起こり瓦礫の雨を降らせてくる。

「こりゃ見てるわけにもいかないな。そろそろここから脱出しようぜ。俺たちは空を飛べないから屋敷が崩れたら普通に死ぬる。」

「でもなあ、何かちよつとかっこいいこと言った気がしたから今から変えるのなんか恥ずいんだけど。」

「いや、自分の命には変えられないだろ。」

そんな会話をしながら二人で瓦礫を超えては走りやつのことで部屋の端までくる。はあはあと呼吸を荒らげながらも無事に部屋の隅についたことに安堵を覚え、一刻も早く扉から出たいという衝動に駆られる。半開きになった玄関の大きな扉に手をかけ外に出ようとすると、何か聞き覚えのある音がした。

「キャンッ、キャンッ!!!」

響き渡る轟音の中、耳を澄ましてみるとどこからか犬の鳴き声らしきものが聞こえてきた。慌てて振り返り山のように降り積もった瓦礫の方を見ると少し奥の方に犬がいるのがわかった。下半身が瓦礫に巻き込まれてしまっているのか動くことができないようだ。

「おいどうしたんだ?」

犬斗は気づいていないのか突然止まったこちらに顔を向け、返答を求める。

「あそこに犬がいるんだけど・・・。」

「犬?!」

犬斗はびつくりしたように瓦礫に向けて目を細め犬を探す。そして見つけたのか「あつ!」と声を上げる。

「あの犬、現世で見たことあったよな?!」

そう、そうなのだ。あの犬は紫にこちらに連れてこられる直前にいたあの神社にいた犬なのだ。どこか既視感があると思ったらあのときの犬だったのだ。でもなぜここにいるのだろうか？近くにいたから一緒に落ちてしまったのだろうか？

しかし、今は考えている時間はない。弾幕ごっこをやっている少女たちはそちらに熱中してしまっていて気づくことはなさそうである。て言うか気づけないだろう。

「行く？」

正直言つて良心は痛むが、自分とあの犬の命を天秤にかけたら自分の命のほうが圧倒的に重たい。しかし、知ってしまったて犬が苦しんでいる姿を尻目にこの現場からノコノコ帰る選択をしてしまった場合、多分後悔することになるだろう。社は顔をうつむけたままであったが、突然ブンツと顔をあげる。その目には明確な決意が宿っていた。

「実は俺、犬派なんだよね……。」

「よし行くか!!!」

とは言いつつも、考えなしに二人で突っ込んで助けに行っても崩壊に巻き込まれて犬と一緒にお陀仏する未来が見えている、主に俺が。考えなしに助けに行こうとする犬斗を腕をガシツとつかみ告げる、

「俺が行ってもどうせ死ぬだけだ。俺はお前を信用する、だから頼んだ。」

「ああ、任せとけ。」

羽織の袖をグイツとめくりニヤツと不敵な笑みを浮かべ犬斗は走り出した。主人公みたいやな。それに対して俺は見てるだけか。俺

にもあんな身体のスペックがあつたらな、ここ数日特にそんなことを考えている。でもここで先に一人だけ安全圏に逃げるなんてことは絶対にしない。身体はついてはいけませんが今俺の心は、心だけはいつと共にある。だから俺は逃げない。あいつが犬を連れてここに無事で帰ってくるまでここであいつを見守るそれが今の俺の役割だ。

あいつはウサギのように、ぴよんぴよん軽やかに向こう側へと行き着く。走っている時は気づかなかつたがあいつは走るペースを合わせてくれていたのかもしれない。嬉しい気持ちと不甲斐ない気持ちがちやまぜになつて自分の今の気持ちがよくわからないが、どうやら無事で帰つてこれそうである。良かった、良かった。

ふと気になり、頭上を見上げる。さっきまでドツカンドツカンいつていた音がふと消えたのだ。少女たちはみな上を見上げており何かが起こっているのがわかる。

「霊符 夢想封印。」

スペルカードだ。誰のものかはわからない。博麗の巫女？あの吸血鬼？魔法使い？いや、今は関係ない。あのヤバいのが打ち込まれる前にここにあいつと犬を呼び戻さないぞ。

「速くしろ!!巻き込まれるぞー!」

この声が届いていないのか、よしよしとご機嫌そうにあいつは犬を撫でている。いよいよまずいぞ。

「死ぬぞおおお
!!!!!!!」

ここまで言つてあいつは今の現状に気づいたようだ。慌てて犬の瓦礫を持ち上げ犬を抱えてこちらへと向かつてくる。その時、膨れ上がった虹色の弾幕が声の主から放たれたのだろうか？下へと落ちてくる。バクバクと心臓がものすごい速さで脈打っているのが絶体絶

命の状況なのにかかる。ドツカーンと爆弾を連想させるような爆音が頭上で響き、弾幕が建物へと衝突する。耐えきれなくなった洋館はガラガラという悲鳴を上げ下にいる2つの命を道連れにしようと落下してくる。

また気絶するかもしれない。でも後先を考えている場合でもない。俺は覚悟を決めた。あいつがさっきのタイミングで覚悟を決めたのなら次は俺が覚悟を決める番だ。

目をつむり身体に感覚をみなぎらせる。思い出せ、想像しろ。ゾワゾワと感覚がみなぎり目の前に一本の矢が顕現する。

「まだだ。まだ足りない・・・。」

段々と力が抜けていく身体に活を入れその場で踏みとどまる。手を前に突き出し拳を握り身体の線が解けないように力いっぱい握りしめる。二本めの矢が顕現した。

「ま・・・だ、まだ・・・だ。」

二本じゃ無理だ。とてもとてもあの質量を防ぎきることができない。・・・十本、十本だ。せめて十本。ふと全部の霊力を出し切つてだらしなく地面で伸びていた、犬斗の姿が頭に浮かんできた。

「ははっ、どうやら俺も中二病だったみたいだ。」

膝を付き今にも身体は地面に崩れ落ちそうだ。でも最後まで身体から意識を手放さないように歯を噛み締め、手を握り続ける。今まで汚い現世で頑張つて生きて生きたんだ。溜まったもんを全部放出するとするか。

「俺の全部をくれてやらああああああ!!!」

叫び最後に力を振り絞る。絞りすぎてもう力なんてほとんど無かったはずなのに自然と身体が動いた。10本の矢が顕現する。矢なんて3本あれば折れないんだ。だったら10本もあれば折れないどころかあの質量を砕くこともできるはずだ。10本の青い閃光が放たれた。俺の全部が飛んでいく。すると身体の線がほどけ、ガクツと倒れ伏せる。自分があいつを救うところが見れないのが少し残念だった。意識が薄れまぶたが閉じる。あの叫び少女達に聞こえてないといいな、そんなことを思いながら俺は眠りについた。

十八話 紅魔異変・終

俺はあいつに笑みを浮かべて走り出す。何で笑ったのかは自分でもわからない。でもそうしたほうが良い気がしたのだ。

犬は飼い主に忠実だ。人間とは違って信頼できる。だから犬が好きだった。でもここに来てあいつと会ってあいつは信用できる気がした。もしかしたら俺は犬のためだけじゃなくて真弓のためにもあの犬を助けようとしたのかもしれない。自分はここ数日で変わったなどと思う。まあ、真弓に対してだけだが。

「俺が行ってもどうせ死ぬだけだ。俺はお前を信用する、だから頼んだ。」

あいつは俺にそう言った。それを聞いたときに身体の奥が何か熱いものが沸き立つのを感じた。誰かに頼られるのがこんな嬉しくて、またそれ相応に緊張するものだとは初めて知った。

しかし、もう考え事は終わりにしなければならぬ。眼下に広がる凄惨な現場が自分を思考の海から現実へと引き戻す。ここからは集中だ。さつさと向こうに行つて犬を連れてくるとしよう。軽やかに地面を蹴り瓦礫の上を走り抜ける。まるで義経の八艘飛びのように素早くそして的確に踏む足場を見定め飛び上がる。あの犬を見るところあまり深く挟まっているようではないようだ。瓦礫一つどかせば助けることができそうである。

現場に着いてみるとやはりその犬は見たことのあるあのときの柴犬であった。その犬はかなり興奮しているのか俺が近寄ると、「ワッ！」と吠えこちらを威嚇してくる。

「お前も紫に巻き込まれちゃったのか？」

そうだとしたら、可哀想と言うしかほかない。もしこれが俺だったら、ムカつきすぎて紫の喉元を食いちぎっていたかもしれない。まあ

犬だったら人間みたいに物事の因果関係を思考することができな
かもしれない。

「落ち着けて、お前になにかしようってわけじゃないんだ。」

頭を犬と同じ目線まで下げて、優しい声音で話しながら手をのば
す。柴犬はウルウルと唸っているものの落ち着きを取り戻し始めた
のか手で触っても噛んではこなかった。

「犬って肩間撫でられるの好きだったか？」

今まで犬は飼ったことはなかったが、子供の頃に良く近所の外で
飼っている犬を撫でていたのを思い出す。あのゴールデンレトリ
バーは人懐こくって可愛かったな。

頭をゴシゴシと撫でてやるとさっきまで吠えていた犬は落ち着い
て顔を腕に擦り付けてくる。

「柴犬って気性が荒いの結構多いらしいけど人懐っこくて助かった
わ。」

すると上での爆発音がやみふと静寂が訪れる。何が起こったのか
わからないが犬を助けるなら今だ。瓦礫の下に素早く手を滑り込ま
せて腕に力を込める。意外と軽かったので瓦礫はいつも簡単に持ち
上がり、気絶して倒れるみたいにゴロンと転がっていった。

犬は瓦礫から開放されると、隠れていた尻尾をブンブンと振りなが
ら自分の方へすり寄ってきた。

「こんなに人懐っこいってことは現代では良い飼い主を持っていたん
だな。」

そう考えると、現代では飼い主が悲しんでいるのかもしれない。

「できれば返してやりたいんだけどな。」

押し元にすり寄ってきた犬の首や頭をゴシゴシと撫でながらそんな叶うはずもない願望を口にする。紫が犬一匹ごときで現代へと繋いでくれるわけがない。あいつはそういう奴だ。

「紫に飼っていいか聞いてみるか。」

受け取り手がいないならこの犬は野良に放たれてしまうことになるのだろう。この世界には妖怪というものが存在する。いつ食われてしまうかわからない。なにより、望んでここに来たわけではないのに放つて置かれて死んでしまうなんて可哀想過ぎる。

そんなことを考えているときであった。

「死ぬぞおおお!!!」

真弓の声だ。反射的に振り向いて自然と上の様子が目に入る。虹色だった。大きな虹色の弾幕がこちらへと落下してきている。ここにこのままいたら間違いないなく巻き込まれてしまうだろう。

「やばいつてー!」

足元にいる犬を急いで抱きかかえると、真弓の方向に走り出す。しかし俺でもこの状況でさつきみたいに素早く動くことは難しいだろう。なんせ犬を一匹抱え、足元は瓦礫で埋め尽くされているのだ。

「・キッツい。」

間に合わないこのままだと下敷きだ。心は速く進めと自分の身体を応援しているのに、身体が全くそれに答えない。もう無理か? そう

思っても足は止めない。間に合わなくてもこの犬だけは助ける。それがこの犬を助ける選択をした俺たちの責任だから。今まで社会で責任と聞いても嫌な思いしかなかったのが、この責任はかっこいいなと思った。突如、

ードゴーンツー

とそんな音と揺れが俺たちを襲った。弾幕が建物に衝突して雪崩と化した瓦礫が俺たちを飲み込まんとして迫ってくる。

「クソツッ！」

死ぬのか？終わるのか？視界がスローモーションみたいにゆっくりになる。いよいよもう駄目らしい。犬だけでもと犬を胸から放り投げる。犬は綺麗な弧を描いて入り口の近くへと着地した。思ったより死ぬ瞬間でも人間は平然としていられるのかもしれない。死は突然やってくる、心がそれを理解する前に身体が死んでしまうのかもしれない。そう考えて俺は目をつむる。死体が見開いてたら何かっこ悪いと思っただからだ。

「俺の全部をくれてやらあああああ!!!」

その叫びで俺は目を見開く。その声は技名を叫ぶ少女の声ではなくまさに数日を共に過ごした真弓のものであった。自分の頭上すれすれを10本の青い矢が通り過ぎ、頭上の瓦礫を粉々に砕く。

「あいつすげえな。」

足に力をこれ以上込められない程込めて前に飛び込む。スローモーションだった視界は通常に戻り後方で瓦礫が地面に打ち付けられる音が聞こえた。

「間に合えええええ!!」

地面についた左足を沈み込ませ、地面すれすれをほぼヘッドスライディングのような形で入り口に飛び込む。真弓は気絶しているみたいだ。踏み込んだ右足は動きそうにない、この痛みと感覚からこれが肉離れであることがわかった。よって必然的に受け身を取ることができずそのまま地面に打ち付けられた。

手が地面に付きズザザーと顔面から地面を滑る。助かったのだ。あまりの展開の速さに驚いてその場に呆然としてしまう。右足はジンジンと熱と痛み持つて動かすことができない。鼻からは温かいものが滴り、手で触れてみて初めてそれが鼻血だとわかった。隣では真弓がうつ伏せに倒れていて彼が全てを出し切ってしまったのだと直感で感じる。

「ありがとな。」

静かにそして心を込めてその言葉を告げた。静まり返った入り口にその言葉は優しく消える。終わった。終わったのだ。異変、とんでもないものだったな。こりやもう何倍も強くなる必要があるそうだ。

「どういたしました。」

「は?」

驚いて声のした方向に目を向けてみれば上半身を起こして、こちらをニヤツと嫌らしい笑みで見つめている真弓がいた。

「起きてるならいえよ!」

「いや、寝てるふりしてたら面白いこと聞けるかなと思って。」

「ふざげんなよ! つたくこつちの気持ちも考えろよ。」

照れくささ半分口調がぶつきらぼうになってしまふ。今までありがとう、と心から思つて言ったことはあまり無かつた気がする。

「いやあ、助かつて良かったよ。このままだところに僕だけで残ることになってたわ。」

「僕つて気持ち悪すぎだろ。でももう少ししたらお前の妹来るんだろ？」

「ははっ、間違えたわ。でも早く妹に会いたいなあ。」

「お前シスコンだしな。まあこの状態で紫の術がかかつてるのかわからないし誰かにあつたらまずいから帰ろうぜ。」

「おう。」

「ちよつと俺右足が動かないから肩貸してくれない？」

肉離れつてこんなに痛かつたけ？運動をしたた若い頃はこんなに身体はもろくなかつたはずなのに、ちよつとシヨックである。

「しゃあないなあー。」

そう言つて真弓は俺の肩を担ぐと歩き出す。扉から外に出てみると、あたりはすっかりオレンジ色に染まつていて今にも夕焼け小焼けが聞こえてきたそうだ。

「ていうか俺たちここからの帰り道わからんくね？」

「・・・そうやん。」

「助けてー紫サマー!!」

と叫んで見るも反応はない。あいつの能力はよくわからないが何かワープできるみたいな感じだったのでそろそろ迎えに来てくれない頃合いだと思っただけだ。

「チツ、たくトロいなだからBBAは・・・。」

「誰がBBAだこの野郎ー!!!」

瞬間、目の前から紫が姿を表し怒りの鉄拳が俺の頭に飛んでくる。

「ゴブスツ!」

と情けない声を上げ地面に叩きつけられた。

「せつかく私があなた達のことを迎えに行つて上げたのにちよつと様子を見てたら、人のことをBBA呼ばわりしやがって、取つて食つてやろうか!」

「今の発言もどこかBBA臭い気が・・・?」

「うるさい!!」

再び倒れ伏している俺の頭に鉄拳が飛んでくる。何も抵抗ができない自分はその拳を頭で受けクラクラと目眩いがする。

「ふんっーさっさと帰るわよ。」

くるりを紫は背を向けて出てきた裂け目の中に入って行く。なん

だが今までのやり取りが自分を再び日常に戻してくれたような気がして少し笑みがこぼれた。

「ほらさっさと行くぞ。」

あろうことか、真弓は動けない俺をズルズルと引きずっていく。

「ちよ待てよ！痛っ、イタタタ痛い！」

そしてやがてあの気味の悪い空間にうつ伏せのまま運ばれ、紫宅に着く。そのまま俺は運ばれて布団に寝かされ怪我の処置をされると藍に言われた。

「ったく、どうしたらこんなに怪我をするんですか？この間も手をけがして・・・。」

「なんでか？そんなの・・・俺にもわからん。」

「なんかそういった感じの能力持っていたりして？」

「そんなのこっちからしたらいい迷惑だよ。ていうかそんな能力だったら俺は絶対に強く慣れない気がするのだが・・・。」

それだけは絶対やめてほしい。もしそれが本当だったら死にたくなってくる。出落ちすぎだろ。

「そう言えば能力つてももの存在今日知ったんですけど、必ずどんな人でも能力を持つてるもんなんですか？」

もしこの世界にいる全ての人達みんなが能力を持っているとすれば、今日の前にいる藍や、紫はもちろん俺たちも能力を持っているこ

とになる。

「いやそういう訳でじゃないですよ。なんなら普通の一般人が能力を持つていることは珍しいです。なんなら弾幕を打てる人も一般人の中にはあまりいないと思います。ただし、博霊の巫女は別ですが。」

「あの霊夢って呼ばれていた子か……。何か遺伝的なものってことか？」

「おそろくね。まあ能力があつたほうが強いでしょうが、結局まずは基礎的な力がそもそも足りないのでそこを強化するって感じですかね？まあ紫様に聞いてみないとわかりませんが。」

「俺も弾幕打てるようになりてえな……。」

さつきの真弓が俺を助けてくれたときに弾幕を撃っていた。この間俺は気絶していたから見ることはできなかったが、あのときに習得していたのだろう。

正直言つてかっけえ。俺もあいつみたいに遠距離攻撃できるようになりたい。できるようになれば確実に強くなる。この世界では弾幕ごっこによって妖怪と人間が平等に戦う事ができると紫は言っていた。つまり弾幕で戦うというのが正しい戦い方なんだろう。だから弾幕が打てるようになれば戦うことができないうとだ。

「結局才能ですからね。人里の者たちは多くが弾幕ごっこできませんし……。」

「つまり俺には無理ってことか？」

「まあ、これから次第ですかね？あつ包帯が切れてしまいました。」

ちよつと待つててください。」

藍は立ち上がり、その後ろの尻尾を引きずりながら近くの部屋まで歩いていく。話し相手が消え寢室に静寂が訪れる。真弓はどこかにいるのか隣に姿はない。

「はあ。」

色々あつたなと一息つきドサツと布団に寝つ転がる。今日はたくさんのが起こりすぎて頭の中がちやごちやになってしまっている。まぶたが重い。否応なしに視界が黒に染まり眠りの世界に落ちていく。もう少し話したいことがあつただけどなど思いつつまた明日でいいつかと、諦めて迫りくる睡魔に従うことにした。

「あら、寝ちやいましたか。」

藍の優しい言葉が最後に聞こえた気がした。

十九話 一本の彼岸花

「久しぶりに動いた気がするわ。」

俺は久しぶりに紫宅の庭を足で踏んだ。天から降り注ぐ日光が体と心をポカポカと温めてくれる。あの退屈な時間からおさらばできると思うと体がウズウズしてくる。

紅魔異変から約2週間程が過ぎた。その間俺は足の肉離れと、腕の怪我が治るまでの療養として屋敷から出ることができなかった。毎日ご飯を食べては寝て、空いている時間は藍からこの幻想郷についての基本的知識や家事のやり方を仕込まれるという地獄を味わっていた。まあ現代にいた頃の仕事と比べれば、と思う人もいると思うが、毎日少しずつ隣で成長していく真弓を見せられるこちらの気持ちにもなつてほしい。まるでサッカーで怪我をして一時的にマネージャーをやっている気分だ。

周りは進んでいるのに自分だけ取り残されている感じがする。動きたいのに動けないそれほど心にくることは無い気がする。

そしてその暇な療養期間はどうだったのかというと、特に何も変哲の無い日常が過ぎていくだけであった。あの紅魔異変が終わった後は、あのとときの騒ぎは何処に行ったのかと驚くほど、平和な時間が流れていた。真弓は修行に打ち込み、俺は腹にご飯を打ち込み続けた。おかげで少し筋肉が落ちた気がする。筋肉痛になったら筋肉は増えるのだが、肉離れでは筋肉は増えないので久しぶりに準備体操を試してみても体に違和感しかない。

まあそんな穏やかな日々の中で唯一大きく変わったことがあったとすれば、こここの住人が一人増えたぐらいであろう。

「命みことおおお!!」

「真弓うるせえよ!!まだ寝てるかもしれないだろ!」

そう真弓の妹だ。あいつが愛してやまない妹の名は命。元々紫か

ら事情は聞かされていたらしく何かぬるつとここの住人の一人となっていた。何かここに来るとしたらもつとなんか驚いたり、後悔とかあると思うのだが、そんなことも表に出さず家事や俺達のサポートなどをしていた。まあ、真弓と再開した時は涙を流していたからお互いの仲のいい兄弟だったのだろう。そんな彼女の性格と言えば、初めてあった俺とも気兼ねなく話してくれてとても気のいい性格ぽかった。しかし、真弓に対してだけはちよつとトゲトゲした感じで、まあそれが本当の兄弟なのか・・・。

でも二人の様子を見てるとやはり兄弟なんだなと思うところがある。よく兄弟間で物事の感性が似ていたりなんてことがあるらしいが、まさにそのとおりで食の好みや服の色の好みなど似ているところがあつたりする。

命は今藍と一緒に昼飯を作っている頃だろう。それで俺は久しぶりの修行つてわけなのだが・・・、

「お前はどれだけ妹がすきなんだよ!？」

さつきから禁断症状がでている真弓は、相当な妹バカなのだろう。キヤラがブレブレ過ぎてなんかよくわかんないことになっている。

「いやだつてかわいいやん。」

「でも向こうからしたら嫌なんじゃないの? ていうかそんなぐらいわかれよ。」

「うるせえ!!」

とそんなことを言い合っていると紫が庭にやつてくる。さつきまで朝ごはんを食べていたのか口元にご飯粒をくっつけ、満足げな顔でこちらへと向かってくる。

「あら、今日は犬斗もいるのね。」

「やっと復活したんだ、今日中にでも弾幕を打てるようになってやるよ。」

「威勢のいいことね。またあの時みたいにならないことを願っているわ。」

あのとときには俺がぶつ倒れたときのことだろうか？ぶつちやけあの時の状況がよく理解できていない。頑張つて弾幕を出そうとしてたらいつの間にか気絶していたのだ。何かやらかしたのかなと思つてはいたが、触れられなかったので特に何も気にしていなかった。

「あの時つて具体的に何が起こつてたんだ？気絶しててよくわからなかったんだ。」

紫は、「はあく。」と大きなため息をついてきつきまで満足げであった顔を呆れ顔に変える。何かそんなヤバいことをやらかしたのか？また紫の鉄拳がとんでくるのではないかと内心ヒヤヒヤしていると紫は口を開いた。

「霊力を全部一気の外に出しちゃったのよ。おかげでこっちは煙くて大変だったんだから。」

「てことは霊力が無くなつたら気絶しちゃうつてことか？」

「そういうことよ。もつとリラックスしてやったほうが良いんじゃない？」

「よくわからんけどそういうもんなのか。」

「まああなたはブランクがあるわけだし、とりあえず見本として真弓にちよつとやってみてもらおうかしらね？」

そう言えば真弓が成長しているのは知っていたが、具体的にどの程度まで成長しているのか俺は知らない。ひよつとすると普通に弾幕を打てるようにでもなっているのだろうか？

「見て驚くなよ。」

と真弓はこちらを向いてニヤツと口角を上げる。その自信有りげな顔を見るところ相当上達したのだろうか？まあ元々異変のときに弾幕を打てたんだからあれよりはうまくなっているのだろう。

真弓は前を向くと、顔を引き締め手を前にかざす。場が張り詰めるのを肌で感じた。そのまま拳を握り、ギリギリと見えない何かを引つ張るように腕を引く。すると空中に青色の矢型の弾幕が3本あらわれ庭の壁に向けて射出された。青色の光が空を切り壁に衝突し、ボンツ土煙を立てる。本人の方を見てみれば、汗一つかかず落ち着いた顔で次に打つ弾幕を準備していた。

「お前すげえな。」

率直な感想が口から漏れる。この間まで普通の一般人であった自分の知り合いが手の届かない場所に行ってしまったようでなんだか寂しい。

「前までは1本打っただけで気絶してたけど、今は3本ずつなら全く問題なくうてるようになったんだよね。まあ結局慣れって事かもしれないわ。」

「いや・・・なんか・・・強くね？」

「これが経験の差ってやつかな？まあ犬斗には無理だろうけど。」

「・・・さあね。」

「どうしたんだ？お前にしては何か弱気じゃないか？」

さつきまでこちらを煽るような視線を向けていた真弓はこちらを心配するような感じで俺の顔を覗き込む。俺だって弾幕は打てるようになりたい。でも藍は結局は才能だって言った。つまりこいつは弾幕を打つことができる才能があつたってことなのだろう。初めて修行をした日詳しくは見てないのでわからないが、こいつは弾幕を打つことができたらしい。それに対して俺は即気絶、俺才能ないんじゃない？

「いや、俺は・・・ちよつと考え事してただけだ。」

「ふーん。ていうか人が話してる間に考え事するなよ。」

真弓の表情は再び笑顔に戻り、ダンダンと元気づけるように背中を叩いてくる。悔しいが少し萎えていた心が少し回復した気がした。ふと顔をあげるとこちらを見ている紫と目があつた。紫は目を細めてこちらを見ており、その瞳は焦点はあつているのに俺を見ていないような気がして、少しゾツと鳥肌がたつ。その目は何の感情も浮かべずただこちらを見ていた、全部見透かされているのではないかとさえ思うほどに。

「それじゃ始めましょうか。犬斗はこの間のおさらいからね。」

紫は俺から視線を外すと、数歩下がりが俺が弾幕を打つ練習をするスペースを開けてくれる。相変わらず何を考えているのかさっぱりわからない。頭の中で首をひねりながら俺は紫が開けてくれた場所に

行く。

「まず弾幕を打つときの手順まだ覚えてるかしら？」

弾幕の打ち方やこの世界についての雑学は嫌というほどこの療養期間に藍に聞かされた。忘れるわけもない。

「大丈夫だ。藍から死ぬほど聞かされたからな。」

「そう、じゃあやってみなさい。今度はこの間みたいにはならないで頂戴ね。」

と紫は釘を刺す。そんな事言われてもなあと反論したくなる気持ちもあつたが、それを飲み込み今は自分のことに集中することにした。目を瞑り少しうつつむく。リラックスしたらどうかと言われたのを思い出し力の入った肩から力を抜く。

「大丈夫、俺ならやれる。」

軽く息を吐き更に集中を脳に促すと同時にゾワツと体が波打つ。きたつ、自分から霊力が出ていくのを感じるが気は抜かない。丁寧に最後まで丁寧だ。速さはこの後でいい、頭の中に弾幕を想像してみる。一瞬、弾幕を想像するために意識を外した瞬間であつた、体の霊力が急に膨れ上がるのを感じる。

「まず・・・。」

全部の言葉を言い切るまでに体の堤防が決壊し霊力が外に放出される。そして段々と眼の前は暗くなっていく。真弓と紫が何やら騒いでいるのが聞こえた。でもお構いなしに俺の思考は無意識と言う名の沼へと沈んでいく。

俺って雑魚くね？最後にそんなことを思った。

「犬斗！お前またやりやがったな!？」

紫が口を抑えながらそう叫ぶ。

「大丈夫か!？」

俺は眠りについていて犬斗の体に駆け寄ると、それがこの前と同じように霊力を全部外に出してしまったのだということがわかった。以前の自分とは違って俺は少し霊力というものに敏感になっている。なのであたりに異常な量の霊力が放出されているのに気づく事ができた。

「はあ、どうしたもんかねえ。」

俺は寝ている犬斗の横に腰を下ろして考える。俺の場合は体から放出する霊力の量をなんとなく調節することができた。それができないってことはセンスの問題であろうか？わからないがこれで気落ちしないしてほしいなだけ思う。

「はあ、何か別の方法を考えなければならぬわね・・・。」

そんなことをブツブツとつぶやきながら紫は顔を俯かせ考え事をしている。

「じゃ、こいつ寢室に連れてくからちよつと待っててくれ。」

「そのことなんだけど、ちよつと行くところができたから今日は休憩でいいわよ。あなたも最近毎日特訓だし疲れてるでしょう?」

「まあ、そりやちよつとは疲れてるかもだけど…。急にどうしたんだ?」

「いや、ちよつと急用を思い出したの…。結構大事なことから外せないのよね。じゃあ妹さんと休みを楽しんでね。」

そこまで言うと、紫は不思議な笑みを浮かべてあの怪しげな空間へと入っていきこうとする。

「最後にちよつと聞きたいことがあるんだけど良いか?」

「あら、何かしら?」

「この間知ったんだけどこの世界には能力つてのがあるんだろ。お前のそのワープ明らかに能力だろ?ましてはお前みたいな大妖怪が能力もなしにこの世界を作れたとは思わない…。」

「・・・お前の能力は何なんだ?」

「・・・私の能力は、境界を操る程度の能力よ。それじゃあね。」

そこまで言うと紫はその空間の中に消えていった。

朝見てた感じだと今日は普通に修行をやる感じだったと思うけど、こいつの気絶が関係しているのだろうか? まあ詳しいことは考えてもよくわからないし、とりあえずはこいつを寢室へと運ぶことにしよう。

う。

さつきまで寝ていたはずのこいつの寝顔はだらしなく口を半開きにしてよだれを垂らしており、気持ちいいほど爆睡していることがわかる。俺も一度経験したからわかるが、霊力切れになって気絶するのは低血糖で頭がボーッとして寝てしまう感じだ。もし低血糖で寝てしまったら最悪死ぬ可能性があるが、霊力の場合は時間の経過と主に元の状態へと戻る。なんだかRPGのMPみたいだ。

「それにしても境界を操る程度・・・か。よくわかんないな。」

境界を操るっていう能力でなぜワープすることができるとかかわからない。ていうかそもそも境界ってなんだ？例えが曖昧でよくわかんないんだけど。

俺は動かない犬斗を背負い屋敷の寝室へと運ぶ。ギシギシと床が音を立て足に負担がかかる。こいつ意外と重いな。

布団の前にドサツと音を立て布団の上に寝かた。

「はあ、疲れた・・・ほとんど何もしてないのに無駄に疲れたわ。」

横を見てみるとさつき乱暴に寝かされたのにも関わらずグーグーと寝息を立てる犬斗がいる。自分より年下ということもあってか母性がくすぐられる。なんか弟みたいな感じだな。

犬斗のとなりで横になってボーッとする。何かすることもないしな。ちなみにこの世界には人里と呼ばれる場所があるらしいが、俺たちは紫に出入りを禁じられている。イコール暇なことだ。現世からの持ち物を取ってくることは許可されたが、ゲームとか携帯は圏外だしすることもない。持ってきた漫画を手に寝っ転がることにした。

「やっぱり漫画はギャグマンガに限るわ。」

すると、寝室の障子がすーと音を立って開く。

「いたんだ。」

そこにいたのは……、

「命、いたんだな。」

俺と同じ茶髪でポニーテールでまとめた髪型、身長は平均身長、体重は知らん。そう俺の愛してやまない妹の命だ。ついこないだここに着いたばかりだが、なんとか適応して幻想郷での生活を送っている。

「昼飯の用意はもうすんだのか？」

「そのことなんだけど……、藍さんに買い物行かないかって誘われたんだ。だから着替えて人里に行こうと思ってたんだよね。」

「人里!? お前人里に行くことが許されてるのか？」

「うん、何ならこの間一回行つたよ。藍さんは優しくてほんとにいい人だね。現実でもあんな人いたら良いのに……。」

「いるよ。現実でも俺という名の聖人がな……。」

そう返すと、命は目を細めて白々しい目でこちらを見る。

「はあ? どこにそんな聖人がいるの? いるのはただキモい兄ちゃんだけじゃん。」

「はあ? 全く素直じゃねえなあ。思春期は辛いねえ。」

「まあ、現代で良いやつなのは俺だけじゃないのかもな……。」

「それじゃ俺は今日久しぶりに二度寝するから、人里楽しんできてくれ。後帰ってきたらどんなだったか教えてくれよ。ここの住人がどんな人なのか気になるしな。」

「わかった。兄ちゃんも妖怪に襲われないようにね。私と藍さんがここを出たらここに居るのあなた達だけだし。」

「・・・ツンデレかよ。」

「うるさい！」

そうはつきり否定すると、バタバタ勇み足で命は部屋を出ていった。まあ俺たちだけになってもあの紫がなにか結界とかを張っているんだろう。大丈夫、大丈夫。

「じゃあ、久しぶりの二度寝と洒落込もうや。」

目をつむり、布団を頭までかぶり眠りにつく。こっちに來てから妹の態度が少しよそよそしくなった気がする。まあ、妹のことだと何かと気にしすぎてしまう俺だ。勘違いだろう。

「おやすみ。」

誰も返事を返さない。そんな静かな眠りの挨拶が布団の中で静かに埋もれた・・・。

二十話 人里にて

「藍さん、今日は何を買うんですか？」

今は私は藍さんに連れられて、人里に買い物に来ていた。以前に一度ここに来たことがあったがなんだか落ち着かない。その原因の一つとしては、この町並みだ。幻想郷は現世で忘れ去られたものが行き着く場所。そのせいかわからないが、町並みが昔なのだ。茅葺屋根の家や住んでいる人の格好。なんだか日本昔ばなしの世界に来てしまったような感覚だ。

「今日と明日の食事分の食材と、その他もろもろだけど、今日は命にこのことをもつと知ってもらうために来たんだよ。」

「そうだったんですか！嬉しいです。ここにきてからあまり外に出れなかったのでもいい気分転換になりそうです。．．でもちよつと気になるんですけど、なんで兄ちゃんたちはここに来ちゃいけないんですか？」

「さあ？ゆかり様がねえどうしても駄目って言うんですよ。正直なところあの人たちもずっとあそこにいるのは辛いでしょうけどね．．。」

そんな事を話していると市場らしきものが見えていた。社会の教科書にのっていた定期市を思い出す。

「たしか荘園とかの近くであったんだっけ？」

中学の頃の記憶だ、あまり覚えていない。そんなこんなで道を歩いていくと、街の建物の密度や人の賑わいが大きくなってきた。おそらくこのあたりが里の中心部なのだろう。

「この辺で一旦別れましょうか。二人でいても緊張するだけだと思

ますし自由に羽を伸ばして来てください。甘味処とか、本屋とか色々ありますよ。ここには人間に危害を加える妖怪はいないから安心して楽しんできてね。」

そう言うのと、私の頭をポンポンと撫で、ある程度のお金を渡して藍さんは買い物行くべく人混みの中へと消えていった。

「どうしようかな？最近甘い物とかあんまり食べてないし、藍さんの言つてた甘味処にでも行こうかな？」

そう思いあたり、近くの人に道を聞こうと歩き出す。

「おう、その珍しい服を着た嬢ちゃん！今日新鮮なもんが入ったんだよ！ひとついらんかい？」

気の良さそうな農家のおじいさんがこちらに採れたてのほうれん草を勧めてくる。

「あ、ごめんなさい。ちよつと今は大丈夫です。でも後で私の連れの方が来ると思うのでその時お願いします。」

「お！そうかい。こんなに美人さんの連れなんだから割引しちやおうかな？」

「ちよつと、やめてくださいよ。」

とても愉快なおじいさんだ。商店街の愉快なおつちゃんみたいな感じでこちらの心まで温まってくる。

「あ！そういえば甘味処って何処にあるかわかります？」

「甘味処ね．．。何処だったかなあ？ちよつと待ってくれよ。」

おじいさんはボリボリと頭をかいて何かを考えている。そして何かに思い当たったのかしかめていた顔をパツと持ち上げ言った。

「思い出したよ。久しく行ってないが、ここから通りを真つすぐ行って右に行くとしたしか甘味処があったはずだが．．。あそこらへんは酔っ払いが多い。こんな時間から飲んでいる人も少ないだろうが、一応気をつけて行きなよ。」

「本当ですか、わざわざありがとうございます！」

「良いつてことよ。嬢ちゃんの頼みを無視するほどワシも老いとらんよ。」

そのおじいさんの二カつとした笑みを背にそこから離れると再び歩を進める。幸い時間はたくさんあるし、いつもうるさい兄ちゃんに邪魔されることも無い。色々見て回るかと、近くにあった服屋さんに足を運んだ。

「やっぱ着物っていいなあ。」

中に入るとやはり置いてあるのは殆ど和服で、他には華人服や外国の服など物珍しいものが少しだけ置かれている。服屋の特有のこのムワツとした雰囲気がとても良い心地で、小さい頃に母と買い物行つたのを思い出す。

「流石に高いなあ。」

おいてある値札を見てみるとどれも手にはとても届かなそうな値段だ。しかし、女子たるものこのまま現世の服装でいるよりも着物と

か、かわいいものを着ておしやれをしたい。

「何か小さい奴ないかな？」

店内を奥へ奥へと進んでいき、自分の持っているお金で足りるものを探すことにした。

「かんざしとかでも良いから何かないかな？」

売り物は段々と小物ゾーンとなってきた。ようやく買えそうなものが出てきた。そのまま数分がたちこれにしようかあれにしようかと考えあぐねていると、グーっと自分の腹の虫がなかった。

「迷っている時は買わないに越したことはないって言うしね。お腹すいたし、また今度でいいや。」

私は気が変わりやすい性格なのかもしれない。服屋を諦め店の外に出ると、眩しい日差しに手を被せる。

「だいぶ暑くなってきたなあ。」

少しずつ日が昇ってきて気温が高くなっているのを肌で感じる。上を見上げていると、ドンっと私を押し退けるように不思議な格好した子どもたちが通り過ぎていった。後ろを振り返ってみれば青髪と緑髪の女の子たちだ。緑髪の女の子は後ろを振り返り、ペコペコと頭を下げてもう1人を追いかけていった。背中に翼を付け飛んでいる所を見たところ妖精だろうか？ 藍さんから聞いたが実際に見たのは初めてだった。やっぱり妖精は現世の物語みたいに愛らしい見た目をしているらしい。

「かわいいなあ。」

子供って良いよね。純粹無垢で無邪気だし自分に正直だからそして何よりかわいいからだ。

「人里は見たところ人間の人以上なそうだったけど、他に妖精もいたんだな。」

周囲の人々が彼女達をみてもなんにも驚かなかったことから特に珍しいことでも無いのだろう。今度また機会があったら喋ってみていな。

「じゃあさつさと甘味処行きますか。本場の和菓子、早く食べたいなあ。」

そうして私は再び道を歩き出した。今回は緊張しすぎてあまり周囲を確認していなかったのだが、自分一人で歩いてみると色んな人がいるとすることがわかる。野菜を売ってる農家の人から、いかにも商人って感じのおじさんに杖をつきながら歩くお爺さん。さらには友達と遊んでいる子供達に気持ちよさそうに日向ぼっこする犬。

現世ではあまり見るののできない活気がそこにはあった。

「やあ、見かけない顔だね？ここに来たばかりなのかい？」

だらだらと道を歩いていると声をかけられた。凜と住んだ声音に背を伸ばしながら後ろを振り返ると、空みたいな青髪に青のワンピースを着た美人の女の人が立っていた。頭にはこれまた青の小さい博士帽のようなものを被っており、見るからに知性的な女性なのだとかる。

「あつそうなんです。今から甘味処にでも行こうと思って。」

「そうか。やはり生きるためには糖分は不可欠だからな。ちなみにその甘味処は私のお墨付きだから期待しておくといい。まるで頬が落ちてしまったのかと勘違いするぐらい美味しいからな。」

「そうなんですか!?!来てよかったなあ。」

「じゃあ、私は生徒たちの面倒を見なくちゃいけないからね。慣れないこともあるだろうが頑張っつてな。」

「はい!ありがとうございます。」

「ふふっ。」

そう笑って女の人はいくると背を向けて近くの寺子屋と書いてある建物の中に入っていった。

「寺子屋の先生だったんだ…。道理で賢そうだと思った。」

それにしても美人な先生だったな。名前だけでも聞いたほうが良かったかな?青髪っただけでも他の人より目立つのに性格もきちんとしてるんだからさぞかしモテるに違いない。そんな人のお墨付き……。想像しただけでよだれが滝のように出て止まらない。

「より一層甘いものが食べたくなってきた〜。」

こうなってきた以上、もう足を止める気はない。何の寄り道もしないで、口の中に菓子を放り込んでやるんだ。

「よーし、ひとつっ走りしますか。」

「命楽しんでくれてるかなあ?」

行きつけの魚屋さんで店主を待ちながらそんなことを呟く。人里に2回しか来てないのに一人にするのは早かったかなと少し後悔しつつもずっとあそこには息が詰まってしまうしかし今更そんな心配しても遅い。もう命は何処かに行ってしまったているだろう。

「優しい人ばかりだから大丈夫だと思うけどなあ。まあ慧音とか周りの人達が守ってくれるでしょ。」

そんなこと杞憂だったかと思い直し、店奥の方を見ゆる。

「おーい店長ー!まだく、ちよつと長くなーい?」

「大人しく待つてろよ!今ちようどいろんな魚入ってきて忙しいんだよー!」

「うるせえジジイ!こっちはかわいいこちゃんが一人で待つてるんだよ。」

「はいはいわかったから、せめて黙っててくれ。お前さんが騒ぐと客がみんな帰っちゃまうだろ。」

そう言っつて、魚屋のおじさんは新鮮な魚を袋に入れてドカッと机におく。

「待たせたお詫びに一匹多めに入れといたから、これで帰ってくれ。」

「わかってる。じゃあまた来るから。」

おじさんにお礼を言っただけで私はその場を去る。今のでわかったと思うが、やっぱりなんだかんだ言っただけの住人は優しい。

何も面倒ごとなく帰ってきてくれるといいんだけどなあ。厄介ごとおこして紫様に叱られるのも面倒だし。そんなことを思いながら私は次の野菜売り場へと向かった。

夢を見た。亀と兎がいて丘の上まで競争している。うさぎは当然早くて亀よりも早く飛び出していく。でも、亀は汗水をたらして進んでいるのにもかかわらずうさぎとの差は開いていく。そしてうさぎは立ち止まることもなく丘の上へと登っていった。取り残された亀は寂しそうにこちらに振り向きこう言った。

「おまえだ。」
と。

「はっ!?!」と目を覚ましかけられていた布団をバサツと跳ね飛ばす。

「ブワッ!」

と何か声が上げ悲鳴を上げるのが聞こえる。

「お前、流石に寝相悪すぎだろ。ていうかお前結構うなされてたぞ。」

そう言われて初めて自分がハアハアと荒い息をしているのに気づ

く。ベタツと嫌な汗をかき、額には脂汗が滲んでいる。

「その声、真弓か？」

「そうだよ。結局あれから修行もなくなつちまつてよ。することもなく久しぶりに部屋でゴロゴロしてたんだよ。」

「気だるそうに降り掛かった布団をどけると真弓はこちらを見て言った。」

「実はさ、この屋敷に俺たち以外いないんだよね。」

しばしの間、二人の間に沈黙が流れ、なんとも言えない時間が過ぎていく。チツチツと廊下から聞こえる掛け時計の秒針がこの屋敷に誰もいないことをものがたっていた。

「まじっ？」

「まじ。だから今のうちにあいつらの私室見れるんじゃないかと思つてな。」

確かに今までこの屋敷には俺たち以外の人物が必ずいた。これはまたとないチャンスなのかもしれない。今まで、紫や藍からは詳しい事情をひた隠しにされてきた。何を企んでいるのか知るにはいい機会だ。

「それならさっさと行こうぜ。あいつらが帰ってきたら見れないだろうし。」

そうして俺達は他に誰かいるわけでもないのにコソコソと廊下を通つて、二人の自室へ向かった。

「俺は紫の部屋を見るからお前は藍の方を頼む。普段の様子から俺たちのことは紫のほうが中心となって企んでると考えられる。俺は職業柄こういうのには慣れてるんでな。お前はあまり関与してなさそうな方に行ってくれ。」

「おっけーだ。」

二手に分かれ廊下をそれぞれ曲がる。藍・・か。俺はあまり彼女には不信心は抱いていない。だってご飯美味しいし、怖いときもあるけど優しいし何より顔に結構出るタイプだと思うからだ。

「失礼しまーす。」

障子を開くスルスルとした音が閑散とした屋敷に静かに響いた。

二十一話 お留守番

藍の部屋の中は思ったよりもたくさんものが雑多に置いてあり、よくわからない書物で溢れかえっていた。普段の様子を見るに几帳面な性格だと思っていたが意外と自室は汚かったらしい。かといって食べかけの物が置かれていたりゴミが放置されているわけではなくて、色々な資料などが散らばっている感じなので不潔な感じはしない。

「こりや、調べるの大変だな。」

机に乗せられた山積みの仕事を思い出し吐き気を覚えるが、なんとかこらえ足元にあった資料に手を伸ばし内容を見てみる。タイトルは油揚げの黄金比と書かれていた。内容を見てみれば、どの切り方や調理の方法が

一番美味しく食べれるのかと言う内容が事細かに書かれており、最終的にはそのまま食べるのが一番美味しいと記されていた。

「しょうもない内容だったな。」

わざわざまとめるものだろうかと疑問に思いながらも次の資料に手を伸ばす。

「なになに、油揚げはどのようにできてどのような影響を体に及ぼすのか……。」

油揚げ好きすぎだろ。確かに狐が油揚げを好むというのは昔から物語などで伝わっているが、まさか本当だったのか。そのことに多少驚きながらも俺は呆れて大きな溜息を付いた。

「こんなことやってたら日が暮れちまうよ。」

一枚一枚見てたら一生終わらないと思った俺は、近くにおいてあった紙の資料をガバっと一気にとり流し見していく。パラパラとめくっていくのだが、どれもこれもこの世界や俺たちに関係するような情報は書いておらず藍が趣味でまとめているようなものであった。

「やめだやめ。こんなところ見ても何も出でこないだろ。」

俺は積んであった資料を諦め、机の上へと視線を移した。

「机の上だったらもつとマシンな情報があるかもな。」

そう誰もいない部屋の中でポツリと呟くと、資料をかき分け机の前へとやってきた。机の上は割と片付いていて普段ここで生活してるということがひと目でわかった。すると中央においてある一際厚い本に目がいく。表紙の角がくたびれていることから、この本がよく読まれているのがわかる。表紙には日記と書いていた。

「仮にも女性の日記なんだよな。」

見るべきか見ないべきか、頭の中で二人の自分が喧嘩していたが、結局中を開くことにした。よくゲームとかでも情報を得るのはだいたい日記だったりするし。本を手にとつて見るとずっしりとした重みが指にのしかかり、ゴクリとつばを飲み込む。

表紙をめくり1ページ目を見ると、日付は俺たちがここに来る1ヶ月前ほど前から書かれておりその日の飯のメニューや、仕事の確認事項など当たり障りのない内容が記されている。そのままペラペラとめくっていくと、ふとした内容に目が止まった。

「最近、4人の現代人を紫様が連れてきた。毎回紫様の自由奔放さにはとても飽きれるが、仲良く過ごせるといいな?。」

「4人？」

ここに来た現代人は俺と真弓、そして真弓の妹の三人だけのはずだが？ここに隠れているとしても俺たちはここに来てもう3週間が立つ。それに俺たちはずっとここにいるのだから隠れていたら流石にわかるだろう。

「わっかんねえなあ。」

そんなモヤモヤした気持ちを抱えつつそのままページをめくっていくもそれらしいことは書いておらず、自分も知っている日常の出来事や、他の人のエピソードが綴られていた。

「あとで真弓に言ってみるか。」

自分より紫や藍と話している真弓のほうがなにか知っているのかもしれない。そう思っただ俺は踵と返し部屋から出ようとすると、机に小指をぶつけてしまった。

「痛っ！」

半端じゃないほどの痛みが小指を襲う。足の指を見てみると、少し赤くなっており頭の中では骨折してないとわかっていても骨折を疑ってしまう。ひいひいと声を上げながらもなんとか立ち上がり片足立ちになって足を擦る。やっと痛みが収まってくるころに頭を上げると、ふと手をついていた本棚に目がいった。小難しい事が書かれていそうな本がささされている中、どこかで見たような言葉を見かけ、一冊の背表紙に目がいく。

「陰陽？」

陰陽といえば平安時代などの昔にいた陰陽師などが思い浮かべられる。小さい頃にかっこいいなと目を輝かせたのを思い出す。興味が湧いたので突発的にその本を手に取り中身を見てみると、中は昔の仮名遣いでヘニヨヘニヨの文字で書かれている。読める部分はあるも、全てを読むことはできず何よりあまり自分に学がないので読める部分は少なかった。

「何か読んでみたいな。」

昔想像した陰陽師のことを考えながらその本を手にとると、一冊分できた空きスペースにそこら変に置きっぱなしになっていた本を差し込む。藍の部屋にある本だから何かしら幻想郷で強くなるのに役に立つかもしれない。弾幕がなかなか打てない自分を強くしてくれるのではないか。そんな小さな希望を胸にいだきながら部屋をでた。するとちょうど玄関から紫の声がしてホッと胸をなでおろした。

「真弓早くしろ。」

そんなことを静かに言って、時間を稼ぐために玄関に向かった。

「紫。昨日は迷惑をかけたな。」

「まったく、調子に乗るからよ。」

「いやこつちとしては調子に乗っているつもりはなかったんだけどな……。」

「そう……。それにしてもあなたから私に顔を出すなんて珍しいわね。普段だったらこつちから声をかけないところに返事もしないのに。」

「まあ、それはなんとなく？」

「よくわからないけど、私をがっかりさせないで頂戴ね。これでも私数千年生きている妖怪なの。ただのその辺のお姉さんみたいに思わないで頂戴ね。」

ジロツとこちらを見た紫の瞳をみて久しぶりに紫の妖怪の片鱗を見たような気がする。ゾワツと鳥肌がたつも自分の負けん気の強さのせいか

「BBAだろ。」

と言い返すことができた。

「誰がババアよ!!」

紫がキィーと叫んだことでその場の空気が緩んだ気がしてようやく肩の力が抜ける。まったく勘弁してもらいたい。紫が勝手に連れてきたくせに使えないとわかったら切り捨てられるのか…。なんか使い捨ての道具みたいでやだな。プンプン怒っている紫の言葉を適当に流しながらそんなことを思っていると、後ろから真弓がやってきた。おそらく自室に戻ってからここに来たのだろう、何食わぬ顔でここへとやってきた。

「おう紫、何してたんだ？」

「博麗大結界の管理よ。まったく最近あんた達がこの世界に来たせいで調整が難しくなってるのよ。」

「ふくん。俺にはわからない話だな。まあ頑張つてとしか言えんわ。」

「それよりもあなたは久しぶりの休みを有意義に過ごせたのかしら？」

「いや有意義に過ごそうにもここにずっといるんだからすることもないし暇すぎて死にそうだわ。」

こいつよくなんの動揺もなくスラスラしゃべれるよな。俺だつたらもつと言いよどんで周りから疑いの目線が飛んでくる気がする。

「そろそろ俺たちも人里に連れてつてくれよ。買い物ぐらいいいだろう？」

真弓がそう聞くと紫は眉にシワを寄せ頭の中で何かを考えているようだったが、自らの意思は硬いのか今までと変わらず紫の返事はN.O.だった。

「いや、それは認めないわ。あなた達を外に出すことはできない。買ってきてほしいものがあつたらあなたの妹にでも頼みなさい。」

「こんなのただの軟禁じゃねえか！」

「弾幕も打てないヒモ野郎は黙っていなさい!!!」

グサリ、とナイーブな俺の心に言葉のナイフが突き刺さる。そりや打てるんなら打てるようになりてえよ。でも、今の俺じゃ無理だ。霊力を制御するって言われてもあんな勢いで溢れてくるものを制御なんかできるのか？

「うるせえ!!こっちは当たり前のことを言ったただけだ。」

「はあ、話にならないわね。藍く、いないの〜？」

「藍は妹と一緒に人里で買い物だ。」

真弓は間髪入れずに答えた。でも俺はまだゆかりの言っていることに納得していない。このまま議論を続けようと、息を吸い込むと真弓が目でこちらを制する。喉まで出かかった汚い言葉を飲み込み、溜まったイライラが落ち着くのを待つ。

「お腹すいたー。」

こつちは真剣に悩んでいるのに紫は無神経にもそんなことを言っている。ああム力つく……。なんで俺こつちに来ちまったんだろう。この前一瞬こつちのほうが良いなんて思ったことがあったが、それはこの軟禁状態を知らない時だ。常にこの軟禁状態でいさせられたら頭が狂っちまう。

「子供みたいな事言われても俺たちは何もできないんだよなあ。まあ、このまま立ち話するのも疲れるし俺は自室に戻ってるわ。」

「俺もそうするわ。」

「じゃっ。」

真弓と俺は片手を上げその場から去る。一方紫は俺たちが背を向けると裂け目の中に消えていった。もしかしたら藍のことを呼びに行ったのかもしれない。紫がここからいなくなると今までピンと張っていた糸が切れたように肩の力が抜ける。

「お前はもうちよつと感情を制御できるようになれよ。紫の性格はここに来てもうわかったろ。」

「あんだけ煽られたら、買われた喧嘩は買わないと気がすまないだろ。」

「いやお前が喧嘩買っても瞬殺されるだけだろ。」

「うるせえ。」

そんな事言われたってムカつくことはムカつくんだよなあ。俺の性格上紫みたいなのネチネチした性格はどうも苦手だ。何を考えているのかわからないのが怖いのもかもしれない。

「まあ、そんなこと置いて互いの収穫を自室で共有しようぜ。」

「ぶっちゃけこっちほとんど収穫ないぞ。」

「まあこっちから言いたいこともあるしな。」

そうして俺たちは二人元々の寝室へと帰っていく。そろそろ藍たちが返ってくることもかもしれない。帰ってきたら命に人里やらの様子を聞いてみるか。そんなことを考え、俺は早く外に出たいという今は叶わぬ願いを思いながら、はあと大きなため息を吐く。

「で、落ち着いたところで互いの情報交換といこうや。こっちは結構色々あったぞ。」

「じゃあとりあえずほとんど収穫がなかった俺から話すわ。まず藍の部屋がめちゃくちゃ汚いということが一つ。あと、机の上にあった日記に不審な点が一つあってここに来た現代人は3人のはずなのに4人って書いてあった。俺から話せるのはこんぐらいかな?」

「ふーん。やっぱりなんか企んでるんだろうな。」

真弓は心あたりが無さそうに眉間にしわを寄せる。やっぱり紫は何かを隠している。苦手な性格だなと思っていたが、俺たちをここに連れてきた理由も話さないし嘘までついているとなると流石に疑わざるを得ない。

「次はお前の番だぞ。」

「わかってるって。まず、俺たちの存在は他には知られてはいけないうらしい、ってことだな。詳しくは書いてなかったが、俺たちの存在は外には秘密にしておくらしい。」

「今までの紫の態度から大体は察してた。案の定って感じだな。」

「あとな、これから起きる異変つてのに毎回姿を隠して調査しに行かないきゃ行けないらしい。」

「まじか、前の空が赤くなるみたいなのが起きるってことか…。ましてよ、その時なら俺たち外に出れるんじゃないか?」

「そうだな。でもイコールそれだけこの前みたいな危険が伴うってことだ。俺たちも自分の身は自分で守れるぐらいに強くなつとかないと行けないってことだ。」

「でもよ、俺弾幕打てないぞ。」

「そこは根性で…と言いたいところだが、別に弾幕が打てなくても俺はいろんな強さがあってもいいと思う。スペルカードルールがなんだか知らねえが俺たちはこっちの住人じゃねえんだから好きなよう

にやらせてもらおうぜ。」

「拳でつてことか?」

真弓は返事はしなかったが、ニコツと口角を上げた。

「俺に女を殴れつてか?」

「実際お前紫殴ろうとしてただろ。」

「それは紫が何かムカついたからつて、まあいいか。できるだけ人と戦わないようにすれば良いや。」

「結局そうなるのか・・・。」

これから先どうなるかわからないが、自分は自分らしく頑張れば良いのかもしれない。そんなこと思いつつ俺は布団にどかっど横たわる。

「頑張るしかねえな。」

二十二話 もう一輪のガーベラ

グーツ、グーツ。枕元のスマホのアラームで私は目を覚ました。目を覚ましたと言ってもまだ目は閉じたままで手探りで枕元においたはずのスマホを探す。

「はあ、眠い・・・。」

携帯のアラームを止めると、まだ閉じようとする目をこすり上半身を起こす。今日も学校か・・・学校のだるい授業を思い浮かべながらあくびをするとよろよろと立ち上がり、シャツとカーテンを開けた。太陽光が部屋に差し込み薄暗かった部屋を明るく照らす。眩しくて目をしかめながらいつものようにこう思うのだ。学校行きたくないなあ、と。

パジャマ姿のまま階段を降りいつもの食卓へと向かう。昨日ドライヤーを忘れてしまったせいか今日は寝癖がひどい。一段降りるごとに普段は触れることのない頬を髪が撫でるのでイライラしていると下から祖父の声が聞こえてくる。

「鮮華〜。ご飯ができてるぞ〜。」

「は〜い。」

私はできるだけ明るい声を心がけながら、返事をする。それが私にできる精一杯のことだから。

「今日の〜飯何〜?。」

そんな気になるふりを装いつつ私はいつもの食卓に向かった。テーブルには目玉焼きに1杯の白飯、大根の味噌汁、キュウリの塩漬

けと簡素な朝食が並べられている。すでに座っている祖父の正面に腰掛けると二人で頂きますと手を合わせる。私の右側にはもう一組の食器が並べられておりこれは祖父が並べたものだ。去年亡くなった祖母がいつも座っていた席に今も食器を並べている。この光景が私の大好きだった祖母を毎日のように思い出させる。二人共仲良かったんだろうな。そんなことを思いながら私は大根の味噌汁へと手を伸ばした。

「今日の味噌汁、大根シャキシャキしてて美味しいね。」

自分でもちよつとオーバーかなと思うぐらいに反応してしまっただが、それでも祖父はニコニコと笑って幸せそうだった。ホッと息をつきそのままご飯を口に運ぶ。今日も一日が始まる。

ご飯が食べ終わると、私は2階の自室へと上がり学校の制服へと着替える。鏡の前に立ち苦戦しながら寝癖を直し、時計を見た。6時、そろそろ家を出る時間だ。

「じゃあ行ってくるー！」

「おう気をつけてな。」

そう祖父に伝えると、私は家を出た。6時は早すぎないか？そう思うかもしれない。しかし、私には毎日の日課、いや仕事があるのだ。早朝のランナーに抜かれながら私は目的の場所へ向かう。薄汚れた石段を1段1段、踏みしめ朱色の鳥居をくぐる。

「相変わらず汚いな。」

坂の上神社。それが私のそれが私の仕事場だ。隣接する倉庫に立

てかけてある竹箒を手に取り、落ち葉を集めていく。森の中にポツリと佇む神社は鳥の鳴き声や風のそよぎを残して何も聞こえない。だから考え事をするにはちょうどいい。毎日祖父の神社の掃除をするこれが日課だ。

「今日は落ち葉が少ないな。」

いつもは二袋ぐらいは貯まるのだが、今日は一袋ですんだ。私はサンタクロースのようにゴミ袋を背負うと立ち上がり学生カバンを片手に階段を降りる。いつもは二袋なのでカバンを取りに二往復しなければならぬのだが今日はそのまま学校へ向かうことができた。小さな幸せを噛み締めつつ私は学校の校門をくぐる。

「おはようございますー！」

生徒会の挨拶に見送られて下駄箱へと向かった。そして私が向かうのは自分の教室・・・ではなく保健室だった。

「あつ、鮮華ちゃんおはよう。」

保健室の先生がいつも通り優しく応対してくれる。毎日授業を受けなければならないと思いつつも、あいつらを思い出してしまう体がすくんでしまう。

「先生、今日は家の用事があるので午前中で早退します。」

「あらそうなの？じゃあ昨日のどこだけでも復習しとこうか。」

そうすると先生はバックを開けて教科書を取り出す。先生はちゃんとしたとこの大学を出ていて頭がいいらしく、授業を受けられない分の勉強をマンツーマンで見せてくれている。ぶっちゃけ授業を受

けるよりこっちのほうがわかりやすいのでなんだか得した気分だ。

「はい。今日はここまで。」

一通り昨日の授業の復習をすると時刻はもう12時をまわっており、4時間目が始まっていた。

「先生、私そろそろ帰ります。」

「そう、じゃあ車に気をつけて帰ってね。あと、おじいちゃんによろしく言つといて頂戴ね。」

「はい、わかりました。今日もありがとうございます。」

そう言うとは私は保健室の扉を締め外に出る。帰宅の時間には少し早かったが、帰りの時間が昼休みとかぶると面倒なので嘘をついてしまった。

「やっと終わった。」

誰にも聞こえないように小さな声でつぶやき、人通りがまばらな道を歩く。スーパーの前を通ると年のいった女の人はこちらを見ている。おそらくこんな時間になんで中学生が歩いているのかしらとも思っているのだろう。コンビニを通り過ぎて、橋を渡り住宅街を抜け、いつもの駄菓子屋も通り過ぎて私は朝と同じいつもの自宅へと帰ってきた。

「今日は地鎮祭やるんだっけ。」

私はよくおじいちゃんの手伝いで一緒にこういった祭事に連れて行かれる。私が学校でクラスに馴染めていないことを知ってかもし

れないが、でかけた先ではいつも会話の席に強制的に参加させられる。

「別に他人と話すの好きじゃないのに。」

少しの不満を口からこぼすと、私は家にかかる。

「じいちゃん！どこ〜？」

声を出して聞いてみると、どうやら台所の方にいるようだ。

「おう早かったな。このあと地鎮祭やるから一緒にいこうや。」

「うん。じゃあ着替えてくるからちよっと待ってて。」

「うんわかった。今昼飯作ってるから食ったら行こう。」

私は階段を急ぎ足で上り自室に飛び込む。ヨレヨレの制服を脱ぎ母に買ってもらった数少ないよそ行きの服に着替えると、再び階段を降り食卓へ向かった。

「ほい、焼きそばね。」

祖父はワンプレートに山盛りに積まれた焼きそばを机に置く。毎回思うのだが、祖父は私の胃袋をなんだと思っっているのだろう。そこのないブラックホールだとも思っているのだろうか？

「じいちゃん流石に量多すぎだろ。」

「鮮華は育ちざかりなんだからいっぱい食べんと大きくならんぞ？」

「いや、太るだろ。」

「いや、その年じゃ太らんよ。」

「いや、それ偏見だよ。」

「いや、偏見じゃない。」

「いや、だとしてもこんなに食べれんよ。」

「いや、やっぱ人が作ったものは残さず食べるのが大事なんじゃよ。」

「いや、あなたが作りすぎなきやいいだけでしょ。」

「……。」

「いただきます。」

一方的にいただきますをして昼飯を食べ始める。いつもこんな感じだから別に気にはしない。祖父との距離が近いと思われるかもしれないが、両親がいないのが一つの要因だろう。

「鮮華もいつの間にか口が達者になりおつて。鮮華の将来は安泰だな。」

「はいはいそうですか。」

そのまま焼きそばを半分食べると、残りはラップに包んで冷蔵庫にしまった。先に食べ終わった祖父は席を立ち仕事着へと着替えに自室へと歩いて行った。

「はあ、腹裂けそう。」

女の子に腹がこんなに膨れるまで食べさせるなんて……。それも毎回。でもご飯を作ってくれる人がいて、ご飯が毎食食べることができる。これに勝る幸せなことはないだろう。

「じいちゃん先外出てるね？」

「おう。」

玄関の扉を開けて外に出る。さっきまで外を歩いていたはずなのに私服を着て外に出ると空気が全く別物のような感じがする。私はまだまだ高い位置で輝いている太陽を見上げながら額から垂れてくる汗をぬぐう。

「暑い……。」

近頃妙に日差しが強くなった気がする。これも地球温暖化のせいなのだろうか。そんなことを他人事のように考えていると祖父が玄関から出てくる。先ほどとは違い狩衣をまとっておりいかにも神主って感じの服装だ。今日は近所の仕事らしいから家で着替えて車に荷物を積んで行くらしい。

「ほいじゃ、さっさと車に乗れ。」

祖父に言われるまま車に乗り込むと車の中はサウナのように暑くなっており、いるだけで息が詰まりそうだ。

「暑いよ。さっさと冷房つけよ……。」

「駄目だ！」

突然祖父が大声で伸ばした手を静止してくる。

「なんでだよ!?このままここにいたら熱中症で倒れるぞ!」

「環境に悪い!・・・」

「・・・。車のエアコンって、走った時の排気ガスで動かしてるんだよね・・・。」

するとさつきまで汗をかいていた祖父は無言でエアコンを入れると黙ったまま前を向いた。

「絶対知らなかったでしょ。」

「知ってたし・・・。」

「もう認めなよ。」

「いや、知ってたけどあえてね。そうそうあえてだよ。孫がどのくらい成長したのか確かめるためだよ。」

「フーン。」

「なんだその疑い深い目は!ったく、そんなに言うなら教えてやろう。環境に悪いとさつき言ったがそれはお天道様に悪いということだ。つまりエアコンをつけてしまうことによつて無理やり神様が決めた気候を捻じ曲げることになつてだなあ・・・。」

「はいはい、またその話ね。ていうか結局エアコンつけちゃってるし。そもそも毎回、妖怪とか霊とか神様とか言ってるけどそんなのいるわ

けないじゃない。全部人間が作り出した幻想にすぎないんだから。いつまでもそんな言い訳が通じるわけじゃないじゃない。」

昔から祖父はことあるごとに妖怪とか神様を言い訳にしてきた。そんなのいるわけがないのに。もしいるんだとしたら、私の人生はもつといいものになっていくはずだ。こんなクソみたいな現実から救ってくれるに違いない。

「いる。」

「は？」

いつもは笑ってごまかすはずの祖父がこの時は違う。

「いるんだよ。絶対に。」

「急にどうしたんだよ？」

急に真剣なまなざしになった祖父に驚きながら聞くと

「なあ鮮華。」

と聞く耳を持たない。

「儂がいなくても生きてくれるよな。」

「はあ？」

急に变なことを言われたもんだから再び呆けた声を出してしまう。

「儂は妖怪にあったことがあるんだ。」

「ちよつと待つて。本当に大丈夫？ボケてない？このまま事故らないでよ。」

「これから色々大変だと思うが、つらくなった時は儂を思い出せ。どこからでも儂は見ているからな。」

「なに、今から死にますみたいなこと言ってるの？やめてよ。」

すると車がキーンツと音を立て止まる。

「よし着いた。さっさと行くぞ。」

すると祖父はなにごともなかったかのように車を降りて人だかりまで入っていく。わからない。なぜ祖父があんなことを言ったのか。

そのあとの地鎮祭は全く頭に残っていない。休憩時間になると私は一人で近くの森へと入り倒木に座る。

「儂がいなくても生きていけるか。．．か。」

そんなのわからない。だって今まで私は祖父に頼り切りで両親もいない。お金だつて自分で稼げないし自分に何か特技があるわけでもない。さらには人とかかわるのが苦手．．。そんなの無理だよ。

すると遠くのほうから雅楽が再び聞こえ始めたのを聞いて休憩時間が終わったことを知る。

「戻るか。」

そう一人ながらつぶやくと気づく、

「あれ？」

泣いているのだ。目から涙がポロポロとこぼれて余所行きの服に染みを作る。なんでなんだ？いやその答えは簡単だ。情けない自分に、弱い自分に嫌気がさしているのだ。この世に生まれてきて私はよかったのだろうか。今まで隠し続けてきた疑問が涙と一緒に噴き出る。

「何が正解だったの！」

叫ぶ。腹から空気が無くなっても叫ぶ。私はどこで選択を間違えてしまったのだろう。ただ、家族と幸せに暮らして普通に学校に行つて平和に暮らしたかっただけなのに。

「そう。なら連れてってあげるわ。」

は？流れていたはずの涙がふと止まる。誰の声だ？ここには私しかないはずなのに。

後ろを振り向くとそこには変な服装の女の人気が配もなくそこに立っていた。

「ちようどいいところにいる人間がいたわ。あなたを幸せな世界に連れてってあげる。」

「はっ、いや、ちよつと待って・・・。」

「私は小さい子は連れてかない主義なのだけど、あなたのお爺さんがねえ。まあいいわ。じゃ、いつてらっしゃい。」

彼女はどこかイツチャている人なのかと思う間もなく、地面を踏みしめる感覚がなくなる。

「あっ。」

落ちていく落ちていく。私の体も瞼も意識も闇に落ちていく。最後の最後、意識が本当に落ちきる間にじいちゃん、頑張れってエールが聞こえた気がした。

二十三話 不安と期待

「おい。起きなさい。起きなさいってば。」

どこからか声が聞こえる。女・・・少女か？

「いい加減起きろ!!」

バシャっという音と共に冷たい感覚を覚え飛び上がる。

「ひえ!？」

来ていた服がべったりと体に張り付き思いつき顔面に水をかけられたのだと少し経ってから気づいた。しかし、いかにして私は水をかけられることになったのだろうか？ふとそう思い辺りを見回すと、自分の真後ろに立っている少女に目が釘付けになる。

赤と白の巫女服に赤色の髪飾りをつけた私より少し小さいぐらいの少女が立っていた。その現実離れした姿に私は呆けてしまう。

「あなた名前は？」

いきなりそう聞かれたことによつてはっと我に返り、

「コスプレイヤーか・・・なんかですか？」

と質問に質問で返してしまった。

「コスプレイヤー？何よそれ。ていうか私の質問に答えなさいよ。」

「す、すみません。寝ぼけてたので・・・。」

高圧的な彼女の態度に怯み、おどおどしながら自己紹介をする。

「私は言葉鮮華です。学生です。」

こんないかにも怪しい人に情報を与えすぎるのは良くないと思ったので詳しい学校名や個人情報情報は教えなかった。だって明らかにおかしい。目が覚めたら変な格好をした人間が話しかけてくるなんてバラエティー番組のドッキリでもない限り明らかになんらかの他意があることは間違いないだろう。

「私は博麗霊夢、この神社の巫女をやってるわ。言葉鮮華……ねえ。あんた現世の住人でしょ。」

「は？現世って日本のこと？」

「いや、現世は現世よ。」

この女の子は何を言っているのだろう。私は死んだのだろうか？死後の世界をあの世界、生きている世界のことをこの世ということとは知っている。しかし、なんで私は死んだのだろうか。私が目覚める前の記憶を必死に思い出そうとすると、ズキツと頭に痛みが走る。ありがちなやつかよ……。

「なんで私は死んだんだろう。」

思わず口になすと少女はやりにくそうに手をひらひらとさせながら、はあとため息をつきこういった。

「いやいや、あんたが死んだわけじゃないわよ。」

「じゃあ現世って何ですか？」

「現世っていうのはあなたがもともと住んできた世界とでもいえばいいかしら。人々に忘れられたものが流れ着く幻想郷それがここよ。」

：意味としては分かるのだが、いまいち理解することができない。つまりここは異世界？てきなどころってことか？そもそも今の話で行くと私は忘れられてしまったということになるが、本当なのだろうか。

「なんかパワーワードばっかでよくわかりませんでした。」

「あー、私ってこういうの苦手なのよねえ。」

とぼりぼり頭をかきながらぶつぶつとつぶやいている。

「あんた、紫色のドレスを着た女を覚えてない？なんか見た目はナイスバディーのくせに中身はおぼさんの奴。あと傘持ってる。」

紫色のドレス。そう聞くとなんだか見たことがある気がしてきた。私はたしか…じいちゃんと地鎮祭にいつて森の中で女の人に…。

「やっと思い出した。私、帰らないと。」

早く帰らないと、じいちゃんを心配させてしまう。じいちゃんの面倒を見られるのは私だけ、あの年で日常生活をすべて自分でこなすのは難しいだろう。おそらくここは異世界的なものだ。にわかにも信じ難いが、今自分が夢でも見ていない限りこれは現実のことだ。

「そう帰りたいのね。じゃあ紫じゃなくても私が戻してあげるわよ。」

私よりも小さそうなこの少女にそんなことができるのだろうかと一瞬考えたが、世の中生まれ持つて生まれた才能だと散々学校で学んできたので口に出そうとした言葉は引っ込んだ。

「まったく、紫の奴は何を考えてるのかしら。こんな忘れられてもいない少女をさらってきて。」

「私は忘れられてここにきたわけじゃないんですか。」

「たぶんね。おそらく紫の仕業だと思うわ。こちとら昨日異変で疲れてるのに面倒な仕事を増やしてくれたわね。」

紫？その名に心当たりはないが、流れ的にあの紫の女だろうか。金髪で、見たときは異彩を放っていたが気づいたら地面に穴が開いて、気づいたらここだった。確信犯だろう。

「異変って何なんですか？」

ふと気になったので聞いてみると、

「紅魔館のバカ吸血鬼どもがね、空に真っ赤化にしてくれやがったのよ。まったく、めんどくさいったらありやしないわ。おまけに妹まで大暴れしてくれちゃって。まあ簡単に言えば反乱？と言ったらいいのかしら。」

とまたまた彼女は大きなため息と共に肩をがっくりと落とす。なんて言ったらわからないが、最初は怖そうだなだと思っていたけど案外かわいそうな人なのかもしれない。

「反乱？まあ、別に知る必要もないか・・・。」

でも、ふと考える。このまま帰っていいことなんてあるのだろうか。ただただ保健室に行くだけの毎日、自宅ではじいちゃんだけ話してあとはやることもなくゴロゴロするだけ。進路について悩んで鬱屈な気分になり、不安になってもものにあたってしまうこともある。

「はあ。」

私からも大きなため息がもれる。私も結局同じかと内心苦笑しながら、それでもじいちゃんの顔を思い浮かべる。学校に行かなくても見限らず面倒を見てくれた、どんなに自分が辛くても自分を励ましてくれた恩はじいちゃんが内心どう思っているか消えることはない。まあかつこいい言葉で飾ってはいるが結局寂しいのかもしれない。

「さあ、おしやべりはおしまいよ。さっさと目を閉じなさい。」

よし、切り替えよう。さっさと戻ってじいちゃんに会わないと。そして私は目を閉じる。すると、後ろから聞き覚えのある声が凜と響いた。

「その子を帰してはだめよ。」

あの女の声だ。さっきまで周りに人の気配なんてなかったのにどこからやってきたのだろう。

「紫、あなたに聞きたいことがあるの。あなた、最近こそこそやってるみたいだけど何が目的なの？まさか賢者であるあなたが異変を起こそうとしてるんじゃないでしょうね？」

「いいえ、私はかわいいそんな人間をこの世界に招待してあげただけ。まあ今回は結構特殊な例だけどね。」

目を開けていいのかわからず、しばらくじっとしていてもあまり会話が進展する様子はない。このまま何もしないのもばからしいので、目を開け声のしたほうを見る。そこには例の紫の女がゆうゆうとでかい胸を張りながらそこに立っていた。

「なんで私をここに連れてきたの。」

見上げるような形で聞くと彼女はにっこりと笑いながら

「だってあなた現世なんて大嫌いでしょ。ここなら現世とは違って面倒くさい人間関係なんてないし、またりと過ごしていられるわよ。まあ、仕事はあるかもしれないけど。」

「でも現世で私がいなくなったらいろんな矛盾が出てくるはずだけだ？」

だって私がいなくなってしまうたら行方不明届けが警察にだされて迷惑がかかってしまうかもしれない。そもそも私をこっちの世界に連れてきて何かメリットがあるのだろうか。

「そのところは心配しないで頂戴。私にかかればあなたの存在をなかったことにするなんて簡単なことよ。」

「でもじいちゃんはまだ一人残されて生活しているってことだよね？」

「それは私からしても謎なのよ。あなたのじいちゃん私たちの存在を知っていたみたい。私があの日あそこにいることもね。」

じいちゃんがこの女を知っていた？たしかに地鎮祭に行く前に意味深なことを言われたが、私が一人で生きていくことができるかって

「こういうこと？さすがにひどくない？」

「ちよつと待ちなさい。紫、私からしたら何もわからないんだけど。」

「まあ細かいことは気にしないでこの子はここに置いておいて、これは命令よ。」

「だつてさ……。私はあなたがいようがいまいがどうでもいいけどね、面倒くさいことは嫌だからとりあえずここにいてもらうことにするわ。」

「は？でもじいちゃんが……。」

「それに関しては大丈夫よ、あなたがいなくなった分それに合うようにじいちゃん

のサポートをしてくれているはずだから。」

そんなこと言われたっていきなりここに住めと言われて、何も気にせず過ごすことができるほどおめでたい性格ではない。

「そんな不満げな顔しないで頂戴。住んでみると意外といいものよここでの生活は。」

「じゃ、とりあえずあなたはこの博麗神社にいてもらうことにするわ。でも家事はちゃんと手伝うのよ。」

そうして、私のここ幻想郷での生活が始まったのだった。

「もう、何が何だかわからないよ……。」

がつくりと肩を落とし、はあと肺の空気がぜんぶ無くなるほどのた

め息を吐く。いったい私の生活はどうなっていくのだろうか。わからないが、とりあえず前に進むしかない。そんな決心と共に私は雲一つない空を見上げるのだった。